

南方抑留資料が現代に問う 「戦争」と「戦後」

文集『噴焰』および野田明氏スケッチから

山本博之編著

京都大学東南アジア地域研究研究所



CIRAS Discussion Paper No.117

南方抑留資料が現代に問う 「戦争」と「戦後」

文集『噴焰』および野田明氏スケッチから

山本 博之 編著



京都大学東南アジア地域研究研究所

目次

資料解題

文集『噴焰』および野田明氏スケッチ

—— マラヤ・シンガポールでの抑留とエンダウ収容所における作業・生活

山本 博之 3

野田明氏スケッチ一覧..... 16

『噴焰』翻刻凡例 22

『噴焰』翻刻 23

　　ゝ噴焰、創刊号に寄す..... 25

　　巻頭の辞 26

　　エンダウ開拓小史 27

　　短歌 俳句 自由詩 冠句 川柳 64

　　随筆 81

　　戦記 114

　　創作 135

　　編集後記 147

資料解題

文集『噴焰』および野田明氏スケッチ

——マラヤ・シンガポールでの抑留とエンダウ収容所における作業・生活

山本博之

日本では8月15日が終戦の日であると広く考えられているが、1945年8月15日を境に一斉に戦争中から戦後に切り替わったわけではない。そのことが顕著に表れているのが引揚げと抑留である。

樺太、満州、朝鮮半島では日本からの入植者の引揚げが困難を極め、帰国に至らずに死亡する人たちもいた。また、軍人および民間人の一部がシベリアに抑留されて強制労働に従事させられた。引揚げと抑留については多数の本が出版され、演劇や映画も作られている。雪と風のシベリアから引揚船で帰ってくる息子の帰りを棧橋で待ち続ける母親を歌った「岸壁の母」は流行歌になり、今日でも歌い継がれている。

その一方で、南方（現在の東南アジアとほぼ重なる地域）における引揚げと抑留についてはほとんど知られていない。南方の日本人抑留者は軍人・民間人を含めて120万人以上に及び、数字の上ではシベリアの日本人抑留者の約60万人の2倍に達するにもかかわらず、南方抑留は等閑視されてきた〔増田2019、3〕。

南方抑留がよく知られていない理由の1つに、戦後の地元住民、占領政府、日本人の関係が国ごとに異なり、抑留以外に主な関心が向けられたことが挙げられる。インドネシア（旧東インド）ではオランダからの独立運動が高揚し、日本軍の中にも部隊を離脱して独立運動に参加する将兵が現れ

た。フィリピンは戦争中に激戦地となって甚大な犠牲と被害を出したことから日本人に対する憎悪や反発には激しいものがあり、戦後フィリピンを支配したアメリカは日本人戦犯の摘発と処分に積極的に取り組んだ。ビルマ（現ミャンマー）およびマラヤ（現マレーシア）・シンガポールでは、イギリスは日本の南方軍70万余人の8割強を帰国させる一方、約10万人を残留させて無賃金・無報酬の労働を強要した〔増田2019、4-5〕。

もう1つの理由は、抑留体験についての情報が限られており、しかも見つけにくいことである。戦争の回顧録の多くは戦時中の体験を書いたものであり、抑留の体験が中心に書かれたものは多くない¹⁾。また、マラヤ・シンガポールの日本人抑留者には、戦争中にスマトラ島やジャワ島、さらにビルマで駐留していた部隊もあり、その回顧録は戦争中の駐留先ごとに書かれ、分類されることになる。例えば『サバン島誌——スマトラ海軍部隊の記録』〔サバン会1966〕はスマトラ島のサバンに駐留した海軍部隊の回顧録で、戦後にシンガポールとエンダウで抑留された体験も書かれているが、書名からはマラヤ・シンガポールの抑留についての記述があると想像しにくい。

公刊された情報が限られている状況では、私家版の記録や回想録、とりわけ抑留中に書かれた句集や歌集が重要な資料となる。抑留者たちは、終

▼1: マラヤ・シンガポールでは収容所ごとに劇団が作られ、その体験を綴った書籍に「リババレー収容所の『リババレー演芸史——想い出は星の如くに』〔栗田1970〕」

やタンジョンバカー（タンジュンバガー）収容所の『シンガポール収容所』〔中村1979〕などがある。

わりが見えない飢餓と重労働に日々苦しみながら、自分たちが置かれた境遇と将来の日本と世界について考えを巡らせた。俳句や短歌は、帰国の日を迎えたときに携行できる物品が限られていても持ち帰れるように凝縮された抑留者の思索の跡であり、抑留の作業や生活の実態や抑留者の考えを知る貴重な資料である。

本書が紹介するのは、マラヤのエンダウ収容所の作業隊が抑留中に発行した文集『噴焔』および同作業隊の野田明氏が抑留中に描いたスケッチである。南方抑留の実態を知るための貴重な資料であり、これらを通じて日本の戦争経験の側面が明らかになることが期待される。

以下では、『噴焔』の理解を助けるため、マラヤ・シンガポールの抑留、エンダウの作業と生活、『噴焔』の概要、野田明氏の抑留スケッチについて紹介する。

1. マラヤ・シンガポールの抑留

日本の降伏を受けて、イギリス軍はビルマとマラヤ・シンガポールで日本軍人を抑留して労務に当てることを考えた。戦時捕虜(POW)は国際法で労役が認められていないため、イギリス側は日本軍人をPOWではなく降伏日本軍人(JSP)として扱うことを求めた。戦争中に日本軍では捕虜になるぐらいなら自決するようにと教えていたことから、自決を防ぐためにPOWではなくJSPとすることを日本側も望んだという背景もあった(本書では日本人抑留者と呼ぶ)。

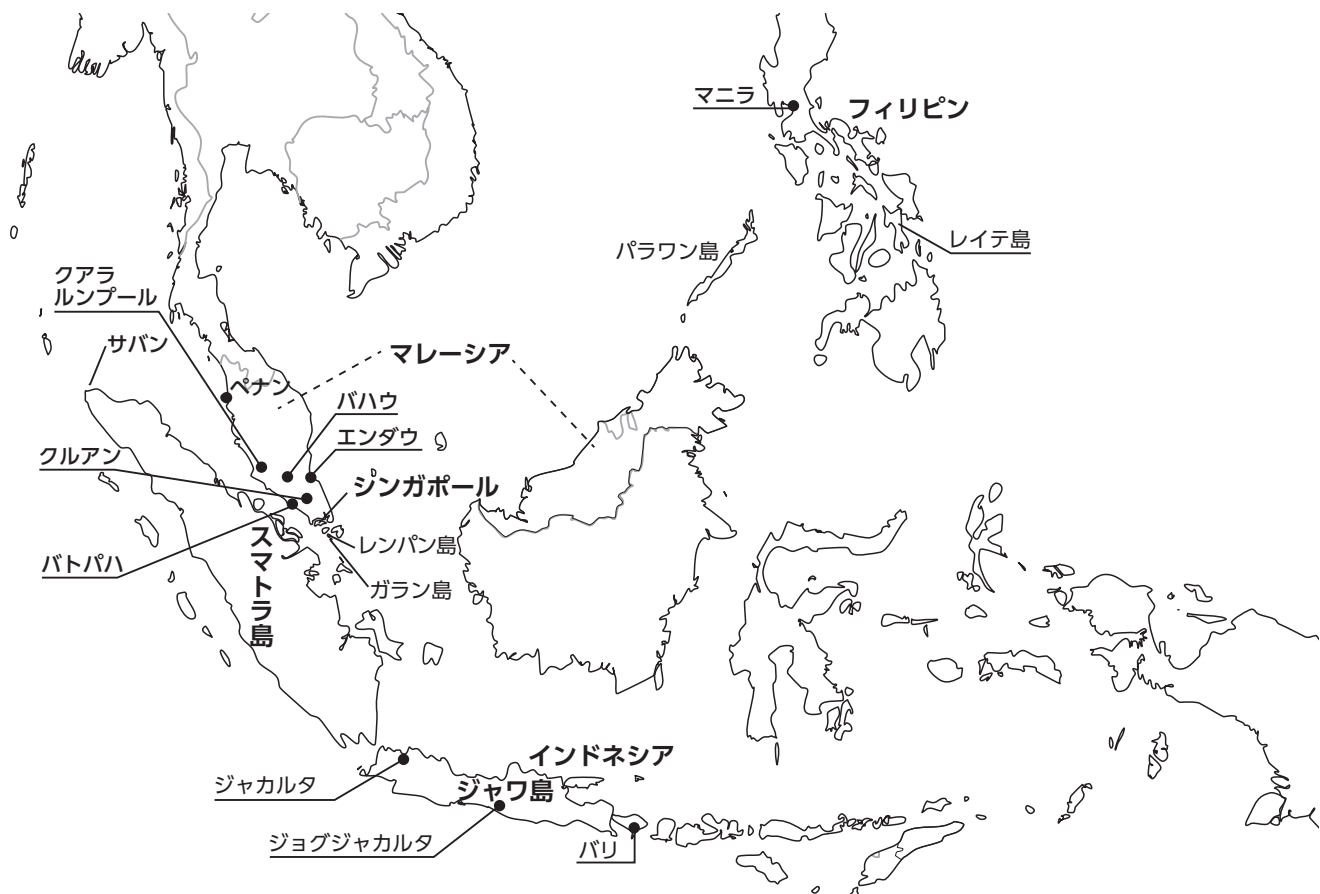
1945年9月、イギリス軍は戦災による荒廃からの復興のためとして日本軍人の供出を要求した。選抜された日本軍人はマラヤ南部のジョホール州クルアンで検問を受けた。戦犯の疑いがあるとされた者はシン

ガポールのチャング収容所に送られて戦犯裁判を待ち、戦犯の容疑がない者は、一部はシンガポール各地の収容所に振り分けられ、残りはシンガポール南部のレンパン島とガラン島に送られた。このとき供出の対象にならなかった人たちはスマトラなどのそれぞれの駐留先で自活して待機することを命じられた。

シンガポールでは、島南部の市街地付近のリババレー、タンジョンパガー、ケッペル、北部のウッドランド、東部のチャング、そしてセレターやテングーの飛行場に収容所が置かれ、日本人抑留者は収容所ごとに作業隊に編成され、イギリス人の監督下で労役が始まった。最も規模が大きいリババレーの作業内容は、資材運搬、港湾での荷揚げ作業、キャンプ建設、イギリス軍宿舎の雑役など種々雑多だった。元リババレー作業隊員が次のように回顧している。

作業のなかで最も嫌われ、恐れられたのが資材運搬であった。炎天下のもとで、ビルマ方面から南下して来た気の荒い英兵や元捕虜達が報復的に重労働を強要したからである。灼熱した鉄骨の重みで血が吹き出し、セメントで毛穴が詰まり、腫れ上った肩をかばいながら、荒れ狂う怒号と罵声のなかで、棍棒で殴られながら終日追いまくられる作業が続いた[仙予士十一期同期会1985、358]。

市中の清掃作業もまた嫌な作業の一つであった。市街の隅々に集積された芥の悪臭はひどかったし、これまで清掃したことが無いと言われたシンガポールの河川はひどい「ヘドロ」の堆積で、川に用便する風習がある水の汚れはまた格別であった。現地民の嘲笑、罵声の中での芥回収、膝まで浸って泥さらい、一軒ごと便所を覗いて便器を取り出す汲取作業は、不潔で屈辱に満ちたものであった[仙予士



十一期同期会 1985、358-359」。

しかし、身体的に負荷が大きい資材運搬などの重労働や、不潔で屈辱に満ちた市中の清掃作業を行っていることは、当時の日本にはほとんど知られていなかった。日本での南方抑留のイメージ形成に重要な影響を与えたのはランパン島とガラン島の抑留体験だった。

ランパン島とガラン島はシンガポール南方の島で、インドネシアに属する。⁴³ランパン島は面積約170平方キロメートル、ガラン島は面積約80平方キロメートルで、互いに隣接し、どちらもほとんど無人の島だった。第一次世界大戦時にランパン島に送られたドイツ兵約3000人が飢えや病気で全滅したと伝えられており、日本軍人の間でも恐れられていた。第二次世界大戦後に約10万人の日本軍人が抑留されて飢えやマラリアなどに苦しめられ、「恋飯島^{れんぱん}」とも呼ばれた。

島の周囲はサンゴ礁で船を岸につけることができないため、日本人抑留者はランパン島に到着したときに頭に載せて運べる程度の所持品しか携行できなかった。湿地帯とジャングルだけの島で、まず寝るための住居を作り、井戸を掘り、海水から塩を採り、ジャングルを拓いて道や畑を作った。武装解除のためナイフ程度の道具しかなく、ノコギリやカナヅチを自作した。飢餓に苦しみ、ヘビ、トカゲ、サソリ、バッタを捕まえ、クズイモ、ゴムの葉、キノコを採って食べ、小舟を作って魚や貝を獲って食べた。毒性があるものを食べて死亡した人が出ると近隣地区の抑留者どうしで知らせ合った。

当初、作業隊員は一定期間の労役の後に日本に送還され、その欠員をレ

▼2…本書が主に扱うのはマラヤ南部およびシンガポールである。マラヤ北部については情報が少ない。回顧録にタイピン会による『マライよ遙かなり』『マライよ遙かなり』編集委員会編1989、短歌集に平林和夫氏の『残響』小林2023がある。

▼3…ランパン島とガラン島の記述は「日比野1949」「名實1962」「清水1974」などをもとにしている。

ンパン島とガラン島にいる待機者が埋めると理解されていた。しかしイギリス軍は1946年4月に約10万人の日本軍人を残置させ、それ以外の日本軍人を日本に送還すると決定した。レンパン島とガラン島で待機していた人たちは順次日本に送還され、1946年8月に帰国が完了した。スマトラ島などの駐留先で待機していた部隊は、クルアンの検問で戦犯容疑者とそれ以外に分けられ、戦犯の容疑がない者は、一部は作業隊に組み込まれ、それ以外は帰国となった。その一方で、1945年9月の時点で作業隊に振り分けられていた人たちは、病気による帰国者を除き引き続き作業隊として残留することになったため、理不尽で不公平な扱いに不満を抱いた人も多かった。

レンパン島から帰国した抑留者たちは体験記を発表した。そこにはシンガポールの作業隊の話は含まれていなかった。抑留者の話を聞いた大佛次郎の「無人島の話」でまるでロビンソン・クルーソーの島の生活だと書かれたこともあり「大佛1949、129-133」、南方抑留は食べ物がなく苦労したが重労働に駆り出されることはなく、概してのんびりしていたという一面的な情報が伝わった。

2. エンダウの作業と生活

1946年4月にマラヤのジョホール州エンダウにも収容所が作られて作業隊が置かれ、一部の部隊はエンダウに配置された。本書が紹介する文集『噴焰』はエンダウの作業隊によって編まれたものである。

エンダウはマラヤ半島東海岸に位置し、ジョホール州とパハン州の境界を流れるエンダウ川の河口の地域を指す。エンダウ川がしばしば氾濫する広大な湿地帯で、イギリス植民地政府は食糧不足の解消のため水田

化を計画して1939年から試験的植え付けを行ったが、大規模な水利工事なしに水田化は不可能だとわかり、第二次世界大戦の勃発もあって開拓事業を放棄していた。

マラヤとシンガポールに軍政を敷いた日本軍にとっても食糧問題は深刻であり、1943年、軍政府は食糧自給を図るため市街地の住民を農村地帯に入植させる計画を発表した。ユーシア人と華人カトリック信徒をヌグリスンビラン州のバハウ、華人をエンダウに移住させ、シンガポールの約30万人の住民のほとんどをマラヤに移住させる計画だった。エンダウでは7万エーカーの湿地帯が開拓事業の対象とされた。

1943年12月に第一陣の入植者2000人がシンガポールからエンダウに向かい、1944年末には1万2000人の住民がエンダウ入植地に住んでいた。エンダウの入植地は日本人には「新昭南」、華人には「興樓」と知られた。礼拝所、学校、病院、幼稚園、集会所用の場所が作られ、入植者は3〜4エーカーの土地および建設資材や道具が与えられた。ただし入植者は米作の知識が何もなく、水田はほとんど利用されなかった。割り当てられた土地の区画に連れていかれた入植者は、巨大な木がすべて切り倒されて建物2階ぐらいの高さまで山のように積み上げられており、その処理を自分たち入植者がしなければならないと告げられて泣き出しそうになったと記している「クラトスカ2005、310」。

シンガポールと違って憲兵隊の目を気にすることなく自由に暮らせるという触れ込みで入植者が集められたが、入植者の手で開墾しなければならぬなど期待外れで、戦争が終わると入植者たちはシンガポールに戻っていった。

戦後マラヤとシンガポールに復帰したイギリスは、食糧問題を解決する方策として短期食糧生産局(STFP)を設置し、STFPと灌漑局(DID)の監督下でエンダウ開拓事業を進めた。STFPの仕事はジャングルの開

墾およびタピオカ、ラギ、水稻の栽培、D I Dの仕事は水稻栽培の基礎となるダムの建設および排水溝づくりだった。そのための労働力として日本人抑留者が配置された。1946年4月に海軍の約1000人がエンダウに派遣され、翌月に陸軍の約1600人が追加され、5つの作業隊が編成された。作業隊員の数は時期によって増減があり、最も多かった時期は5000人と言われるが、作業隊員の間では3000人と認識されていた。主な作業内容は、酷暑の中、沼地を切り拓き、灌漑設備を作って荒地を水田にすることだった。作業を監督したイギリス人は戦争中に日本軍の捕虜として泰緬鉄道建設に使役された経験があり、日本軍人にそれと同等の重労働を課すと公言していた。

食事は常に不足していた。朝食と昼食をあわせてビスケット4枚が配られた。朝のうちに4枚とも食べてしまう人もいて、作業地で休憩中に食べ物を探した。地元の行商人と物々交換で食べ物やタバコを手に入れる人もいた。物々交換およびそれを行う行商人のことをマレー語で「交換」を意味する「トッカル」と呼んだ。クルアンの検問で私物を没収されていたためにほとんど持ち物がなく、わずかな衣服を1枚ずつ剥がされるように食べ物やタバコに替えたが、交換できる持ち物はすぐに底を突いた。畑を作って芋を植える人もいた。マレー語で「鋤」を意味する「チャンコール」から、作業隊に割り当てられた仕事を「第一チャンコール」、自活のための畑仕事を「第二チャンコール」と呼んだ。

作業隊員は従軍以前に手に職をもっていた人が多く、作業隊でもその技術が活かされた。作業地への行き帰りに拾った材料を使って道具を手作りし、木片で下駄を作り、町の華人に売って食べ物やタバコを手に入れる人もいた。他人から報酬を得る作業は「第三チャンコール」と呼ばれ、公式には禁じられていたが実際には黙認されていた。

作業隊には医療所があり、軽度のけがや病気は医療所で手当てを受けた。

重篤な病気にかかるシンガポールのニースン地区にある陸軍の病院に送られて治療を受けた。作業隊のイギリス人監督は日々の作業人数を守ることを厳しく求めたため、病人が出ると欠員の補充に苦勞した。市内に複数の作業隊があつて各作業隊の規模が大きいシンガポールと異なり、エンダウは地理的に孤立しており、特に海軍はマラヤとシンガポールをあわせても人数が少なかったため、エンダウの海軍作業隊では他地域の作業隊から人員を補充するのが難しく、病気になっても作業に出なければならなかった。ことがしばしばあった。

作業隊員には俳句や短歌の嗜みがある人もいて、俳句や短歌の同好会が作られた。乾パンの包装紙を小さく切つて綴じた句帳を作り、短い鉛筆と一緒にふんどの紐に下げて作業に出て、休憩中に思い浮かんだ句や歌を書き、夜は宿舎で薄暗いヤシ油の灯りを囲んで句会を開いた。

俳句や短歌を発表する演芸会が行われ、そのうちにニッパ椰子で葺いた立派な舞台が建てられて演劇も行われるようになった。作業隊ごとに演劇のための隊を編成し、作業の合間に稽古を重ね、作業隊どうしで競うように演劇が披露された。日本から送られた慰問雑誌に載っていた『湖の娘』が演じられると、捕虜生活を経て復員すると妻は夫が戦死したと聞かされて再婚していたという物語に客席が感動で覆われたという。

イギリス軍は日本人抑留者の帰国時期について明言せず、はじめは「1946年末までに」、後に「1947年の春までに」としだいに帰国時期を延ばし、そのたびに日本人抑留者を落胆させた。1947年に入ると抑留期間をさらに1947年末まで延長することが検討された。抑留を嫌ったマッカーサーが早期送還を強く求めたこともあり、1947年3月に帰還事業が再開されたが、規模が縮小されながらも抑留者による労役は続いた。1947年12月に日本人抑留者を乗せた最後の船がシンガポールを出発し、裁判のために残された戦犯容疑者を除いて、最長で2年

3か月に及ぶ南方抑留が終わりを迎えた。

イギリスが日本人抑留者の帰国の時期をたびたび延期したところ、エングダウ海軍作業隊で士気を高めるため作業隊員の文芸作品を集めた文集を刊行することになり、1947年3月に『噴焰』が刊行された。苦勞して入手した紙をすべて使って500部作成し、500人の作業隊員に1部ずつ配布した。表紙は手漉きの紙を使い、作業隊が開拓した水田で育った稲の穂を織り込んだ。

第2号刊行の構想もあったが、創刊号の発行と前後してイギリスが日本人抑留者の帰還計画を発表し、『噴焰』は創刊号限りとなった。このとき配布された500部のうち野田明氏が持ち帰ったものをもとに翻刻したものが本書である。

3. 『噴焰』の概要

『噴焰』の構成と内容を紹介しよう。

序文と巻頭の辞に続く「エングダウ開拓小史」は、「一・作業隊前史」、「二・エングダウ開拓規模の考察」、「三・吾等の苦闘史」の三部から成る論説である。

「一・作業隊前史」はエングダウ入植以前から語り起こしている。エングダウの海軍作業隊は戦争中インドネシアに駐留していた。スマトラ島のサバンにいたときに唐突に戦争終結が伝えられると、軍の命令に従って降伏するか、軍人の精神に殉じて自ら命を絶つか、部隊を離脱して地元住民の独立運動に身を投じるかの選択を迫られた。独立運動による混乱を收拾するよう英蘭軍から命じられたため、武器を求めて日本軍を襲う独立運動との間で不本意な闘争をしなければならなかった。1945年末にマラヤに渡り、バトパハを経由してクルアンで検問を受け、戦犯容疑を免

れた人はシンガポールとマラヤの作業隊で労役に服することになった。

「二・エングダウ開拓規模の考察」では、1936年に日本の鉄鉱会社がエングダウ奥地のランカップ鉄山で採鉱事業を始めたこと、1939年にイギリス植民地政府がエングダウ河畔の開拓事業に乗り出したが戦争突入で事業が放棄されたこと、戦時中には日本によってエングダウ開拓事業が計画されたが失敗に帰したことが記されている。

「三・吾等の苦闘史」ではエングダウ作業隊の日々の作業と生活の様子が記されている。イギリス人監督のキッチンナーの管理が厳しくて1か月にわたって無休の日が続いたとき、自分たちは怠けたいではなく世界的な食糧問題の解決に貢献するために作業を成し遂げたいと訴えた様子が詳細に記されており、日本人抑留者が労役に積極的な意義を見出そうとしていたことがうかがえる。

作業隊員が自暴自棄になるのを防ぐ目的もあり、収容から半年にあたる1946年10月にキャンプ祭が行われた。河童の扮装で河童音頭を踊る作業隊員の姿からは、水の上で力を発揮する海軍が陸に揚げられて慣れない作業を強いられているもどかしさが伝わってくる。

「エングダウ開拓小史」で興味深いのは、イギリスにとって作業隊は開拓作業の労働力というより現地住民のストライキに対する牽制力としての役割が重要であることと見抜いたことである。そのため作業のサボタージュはイギリスに対する交渉力にならず、内還（内地帰還）を早めるためには現地住民とりわけ共産党員と接触して日本人は厄介者だとイギリス人に思わせるのが早道だろうと論じている。ただしこの考えは多くの作業隊員の理解と賛同が得られないだろうから、日本の世論に抑留生活の実態を伝えてイギリスに圧力をかけてもらうことが現実的な手段となる。そのため、抑留と作業隊についてよく知らずに帰国した人たちの体験談や、娯楽施設等が表面上整っているシンガポールに立ち寄った復員官がたまた

ま見た印象が伝わって「比較的安易な生活」と信じられている南方の抑留生活が実は「目も当てられない惨状」であることを日本国民に知ってもらうことが急務であると訴えている。

同記事によると、エンダウ作業隊は戦時中に日本の入植事業が開拓の対象とした2715エーカーの開拓作業を行い、1616エーカーの伐採、焼却、清掃を終え、そのうち1238エーカーの耕作と植え付けが完了したが、1099エーカーは耕作に至らなかった。それと別に7285エーカーが人跡未踏の原始林として横たわっており、そのすべてを開拓するには今後50年の歳月と延べ5400万人の労働力が必要になるだろうが、3000人の日本の抑留作業隊員はその黎明を切り拓いたのだと結んでいる。

「短歌・俳句・自由詩・冠句・川柳」の部では、短歌63首、俳句78句、自由詩6篇、冠句43句、川柳21句、歌2曲が披露されている。この他、「短歌・俳句・自由詩・冠句・川柳」の部以外のページでも俳句24句、自由詩2篇、漢詩1篇、冠句14句が披露されている。

帰国の見通しがまったく立たない中で日々の食べ物と交換に私物を1つずつ手放していく状況で、これらの作品は戦地から日本に持ち帰ることができた数少ないものだった。故郷の父母や家族・友人を思うもの、暑さと雨の中の作業の日々を綴ったものなど多くの作品があるなかで、次の一句は抑留の特徴をよく表しているものとして印象深い。

外国で殿役の軽からず

殿しんがりとは敗け戦などで軍が退却するときに軍列の最後尾で敵の追軍に備える役を指す。自分たちを殿役になぞらえることで、日本人抑留者の労役は日本軍が退却する過程で誰かが引き受けなければならない役目であり、その意味で日本軍全体（さらには日本全体）にかわって戦争の後始末の役目

を引き受けているのだという思いが感じられる。

「随筆」の部には15編の作品が掲載されている。「泥の足あと」「日々の作業の様子」、「雨」(雨で作業が休みになった日)、「煙」(早朝の炊事当番)、「抑留閑話」(草刈り作業で他人に負けまいと頑張り、まんじゅうの配給があった日にはしゃぎ、休日に久しぶりに衣服を洗濯する)からは作業や生活の様子がうかがえる。

労役に服し汗に土に明け暮れる生活のむなしさを感じながらも、寒風に鉄を振るい霜枯れの土に一人で麦を蒔いているであろう故郷の母を思い、「尊きは土に生きゆくぞ」という母の教えを思い出す「お母さん」、自暴自棄になりそうになるたびに父母や戦友を思い浮かべて自制し、祖国の再建に力を捧げるために現在の忍従の生活を明日の茨の人生の糧とする¹と表明する「私の人生観」、「ベニスの商人」を紹介して、抑留されている日本人どうしがいがみ合うのではなく、キリストが説いた愛の教えを取り戻すことで難局を乗り切ろうと呼びかける「愛の復活」などの作品からは、故郷の父母を恋しく想い、祖国の再建復興に参加できないもどかしさを感じながら、故郷から遠く離れた地で労役に服していることに積極的な意義を見出そうとする様子が見て取れる。なお、「非登録患者日誌」は戦時中にスマトラ島サバンで診療を担当した軍医官による死亡胎児の取り出し、ガス壊疽、マラリア脳症の回想で、人体破壊の描写が含まれている。

「戦記」の部には、駆逐艦霜月の乗員による「レイテ沖海戦記」、索敵機搭乗員による「搭乗記断抄」、真珠湾攻撃の「ハワイ奇襲記」、遭難して無人島に漂着したが日本の船団に救助された「パラワン遭難記」、重巡洋艦羽黒の乗員による「レイテ突入記」の5編の戦記が採録されている。戦闘状態での艦上での緊張感を持った動きが克明に記されているとともに、帰らぬ戦友たちに馳せた想いが綴られている。

「戦記」の部の末尾には、「うそ倶楽部」と題して、1947年4月1日のエイプリルフールに内還が開始されるという記事や、内還期日を当て

る懸賞の当選者を優先的に内還させるといふ記事が3編載せられている。帰国の目的が立たないことを笑い話にするしかないけれど笑えないという思いが感じられる。

「創作」の部には4編の作品が掲載されている。戦争で父と妻子を失って日本軍を恨んでいたシンガポール華人の陳君がエンダウで日本兵の田植えを見たことから日本兵と打ち解け、帰国する日本兵をいつまでも見送っていた「陳君物語」。無二の友でよき競争相手でもあった幼なじみの戦死を知り、彼への友情の証として祖国再建のための相手なき戦を遂行する覚悟を表明する「手」。草刈り作業で鎌を振り下ろしたら、日頃から生意気だと感じていた同僚の足を鎌で切ってしまい、些細な感情で戦友を傷つけてしまったことを悔やむ「鎌」。医学志望を捨てて海兵団で訓練を受けていた弟に対して、若いときの貴重な時間を無駄にしないためにも、自分の帰国を待つことなく祖国再建のために自分の信じる道を進むようにと呼びかける「弟よ」である。「弟よ」の著者は実際に弟がいたのかもしれないが、この作品は日本で再建復興を担うすべての若者に向けて書かれたものと読むこともできる。

「編集後記」には、『噴焰』の続編発行は紙の入手と内還時期に左右されると書かれている。1947年3月には帰還事業の再開が各作業隊に伝えられているが、『噴焰』刊行の時点でその知らせはエンダウに届いていなかった様子である。

4. 野田明氏の抑留スケッチ

『噴焰』の誌面にはところどころイラストが添えられている。本書ではそれらに加え、野田明氏が抑留中に描いたスケッチを採録している。南方



ベナン〈1945年9月〉[001]



バトバハ [011]

抑留は記録が少なく、抑留者が詠んだ俳句や短歌が貴重な資料である状況で、野田氏によるスケッチは抑留について知ることができる極めて貴重な資料である。

野田明氏は1922年に佐賀県佐賀市で製菓業「日の出屋」の長男として生まれた。1939年から長崎県佐世保市の海軍工廠に工員として勤務し、1943年に海軍に召集されて海軍航空隊の整備兵として従軍した。1945年2月に第一南遣艦隊に配属され、南方に到着したところで終戦を迎えた。バトバハでの待機とクルアンでの検問を経て1946年5月にエンダウ作業隊に配属され、1947年7月に帰国するまでエンダウで抑留生活を送った。

野田氏はもとより画才があり、作業隊の隊長に命じられる形で抑留生活をスケッチした。風景、静物、人物、作業風景など多岐にわたる。紙が不足していたため、地図の裏、乾パンの包装紙、便箋などが使われた。絵の具もなかったため、赤い色はヨーチンを使うなど工夫して色を付けた。野田氏のスケッチは正確さで知られ、1981年に元作業隊員がマレーシアとシンガポールを訪れたとき、野田氏のスケッチが正確だったために旧作業隊の場所を探し当てるのが容易だったという。

スケッチには題や説明が添えられており、スケッチが描かれた時期と場所がわかるとともに、終戦から帰国まで野田氏がどのように移動したかを知ることができる。最も早いスケッチは1945年9月に描かれたペナンの風景で、抑留の前はマラヤ北部のペナンにいたようである。

1946年1月からバトバハのスケッチが描かれている。バトバハ近郊のゴム園が広がるスリガディン地区に野営し、この間に「かいほり」、「ゴム運搬」などの作業風景、「水浴」、「釣り」、「福ちゃんと打石君の漫才猛練」などの生活風景、「ゼビラン 16才」、「白髪のお婆」などの近隣住民の人物画などを描いている。

1946年5月からエンダウのスケッチが描かれている。作業隊に関するものでは、「黄昏れる雨期のエンダウ」、「雄大かな エンダウの野辺」、「沼地」などのエンダウ風景、「赤い道」、「白兵戦」、「草刈り」、「苗取り作業」、「四万エーカーの水田」、「清掃チャンコール」、「重労働」、「初収穫」、「収穫を急ぐ」、「ドレイン完成」などの作業風景、「湯沸かし当番」などの生活風景がある。

作業隊の演芸活動を描いたものも多く、「演芸場うら」、「楽屋」、「着付け」、「姿三四郎(森田兵長)」、「おお姿君」、「舞踊」、「花笠子萬」、「旅立つ小満」、「女形(杉さん)」、「十六部隊の演芸」などがある。「噴焰製本」のスケッチもある。地元の行商人との物々交換(馴染みのトッカル婆を描く)、「トッカールの一憩」や近隣住民の人物画(「少年A」、「少年Aの兄」、「少年B」、「少年Bの姉」、「少年Bのお父さん」)もあり、近隣住民との交流の様子もうかがえる。

1947年3月に抑留者の帰還事業の再開が発表され、順次シンガポール



バトパハ(1947年5月) [025]



人物画(1946年) [035]



人物画(1946年) [024]



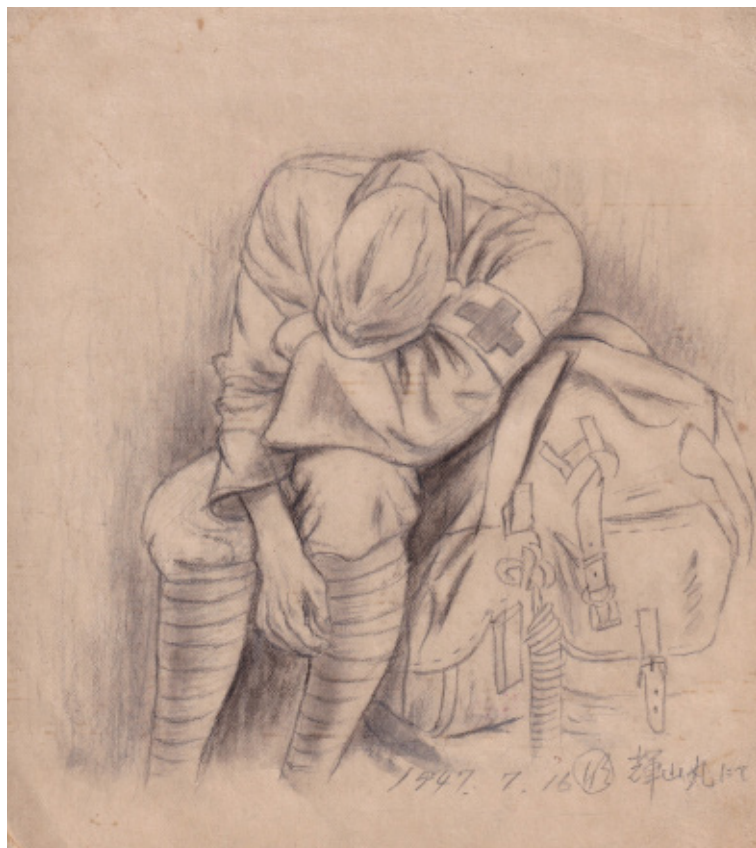
静物画(1946年) [003]



演劇[113]



演劇(1949年) [114]



帰国(1947年7月) [167]

ルから復員船に乗って帰国した。野田氏は病気のため帰国前にシンガポールのニースンの病院で治療を受けており、1947年5月以降のスケッチにはニースンで描かれたものが混じっている。1947年7月16日付の「傷病帰還兵」は帰国する輝山丸の船内で描かれたもので、添えられている説明には、ニースンの港を出港して1か月目に佐世保の浦頭に上陸して復員したと書かれている。

エンダウやニースンに移った後にもバトパハのスケッチを描いていることや、入手できる画材が限られていたことから似たような色彩のスケッチはほぼ同じ時期に色が付けられたと考えられることから、スケッチの一部は下描きの状態で持っており、作業時間ができたり画材が手に入

たりしたときにまとめて彩色していたものと思われる。

人物画は近隣住民を訪ねてスケッチしたもので、おそらくスケッチの一部はモデルとなった人たちに渡していたであろうことから、実際には現在確認されているよりも多くのスケッチが描かれたと考えられる。野田氏はスケッチは内地帰還を早めてもらう説得材料として日本の復員局に送られたと語ったというが、その行方は確認されていない。

帰国後、野田氏は1947年10月から佐世保重工業に行員として勤務した。朝鮮戦争の勃発により佐世保市が米軍で賑わうと、野田氏は妻の美枝子さんと一緒に米軍人を相手に肖像画を描く屋台を営み、後に日本人客を相手に肖像画を描く仕事をするようになった。

美枝子さんが難病を患って1979年に他界すると野田氏は悲嘆にくれたが、1983年に一念発起して町の絵画教室に通い、基本から油彩と水彩を学んだ。1985年に第18回佐世保市民展で市長賞を受賞、同年の第19回佐世保市短歌祭でも市長賞を受賞し、1998年10月に初の個展「マレー抑留海軍作業隊スケッチをかえりみて」を開いた。

野田氏はその後も創作を続け、2001年に諫早湾干拓を描いた「干潟の墓標」が第54回創造展で会員賞を受賞し、2010年にはトルコにスケッチ旅行に行ったときの作品「ウチヒサル」が第63回創造展で下田賞を受賞した。野田氏は2018年4月7日に96歳で永眠した。

野田氏の抑留生活のスケッチについては、2015年1月に『長崎新聞』に「よみがえる抑留の日々 野田明のマレー・スケッチ」(10回連載)が掲載され、JSP研究の岡山大学・中尾知代准教授(当時)によってJSPに迫る第一級の資料であることが指摘された。2月26日にはNHK長崎放送「イブニング長崎」の特集として放送され、「おはよう日本」で全国放送された。

2023年11月1日～12月24日におもちゃ映画ミュージアム(京都市中京区)で「敗戦後、強制労働させられた降伏日本兵のひとり 野田明が残

したマレー抑留のスケッチ画展」が開催された。これを契機として筆者が野田氏のご遺族から文集『噴焔』とスケッチ一式をお預かりして、研究・教育および一般利用がしやすいように文集とスケッチを整理することになって本書の刊行となった。

筆者がお預かりしたのはスケッチ181点および短冊26点である。本書では、それらの中から『噴焔』の記事の理解を助けられるものを選び、関連する記事の付近に示した。題と説明は野田氏によるものである。スケッチの一部は彩色されているが、本書の紙版では白黒で印刷されている。

5. 抑留文集が問いかけているもの

『噴焔』は南方抑留の実態に迫る貴重な資料であるとともに、抑留者の言葉を通じて今日の私たちにも通じる問いかけがなされているという意味もあるように思われる。

『噴焔』に掲載されている記事全体を通じて読者に迫ってくるように感じられるのは、戦争が終わって多くの日本人が帰国し、故郷の家族や友人と再会を果たし、祖国再建に取り組んでいるとき、なぜ自分は故郷から遠く離れたこの地に留め置かれ、自由を奪われて飢餓と重労働に耐えなければならぬのかという問いである。

この問いはさらにいくつもの問いに分けられる。なぜ日本は戦争をしたのかという開戦についての問いや、なぜ同胞や占領地の人びとに犠牲を強いることになったのかという戦争遂行についての問い。あるいは、日本軍占領地を戦争による荒廃から復興させる責任があるのであれば日本または日本人が全体で負うべきなのに、なぜ自分たちだけがその責任を負わされているのかという問い。さらには、抑留と強制労働は理不尽ではあるがいつ

たんそのことは受け入れた上で、この境遇に置かれた自分たちはどうすれば祖国再建という大きな目的に貢献できるのかといった問いなどである。

これらのうち特に後ろの2つの問いは、戦後世代を含めて広く日本人に問いかねられながらもこれまで十分に応答されないままになってきたように思われる。これらの問いに応答するためにはまず南方抑留の実態および抑留者が考えたことについて理解することが必要であり、本書の刊行がその一助になれば幸いである。

参考文献

- 大佛次郎(1949)『鎌倉通信』研究社出版。
クラトスカ、ポールH.「今井敬子訳」(2005)『日本占領下のマラヤ1941-1945』行人社。
栗田まさみ(1970)『リババレー演芸史——想い出は星の如くに』新泉社。
小林秀司編(2023)『平林和夫短歌集「残響」私家版』。
サバン会(1966)『サバン島誌——スマトラ海軍部隊の記録』サバン会。
清水寥人(1974)『レムパン島』あさを社。
仙予士十一期同期会(仙台陸軍予備士官学校第十一期生同期会編集委員会)編(1985)『学徒兵の手記パートII』。
竹森一男(1959)『レンパン島』穂高書房。
中村八朗(1979)『シンガポール収容所』徳間書店。
名賀一郎(1962)『流島への途』日本農業新聞。
日比野清次(1949)『レムパンの星——マライ軍抑留記』香柏書房。
増田弘(2019)『南方からの帰還——日本軍兵士の抑留と復員』慶應義塾大学出版会。
「マライよ遥かなり」編集委員会編(1989)『マライよ遥かなり——第二十九軍憲兵隊タイピン回顧録』タイピン会。

表 野田明氏スケッチ一覧〈1／6〉

No	年	月	日	紙	色	場所	題	メモ
1	1945	9		地図	多色	ベナン	ベナン 五時頃	再びベナンへ行く事も無いだろう
2	1946	1	1	地図			マンゴスチンの母子	演芸に見入りマンゴスチンの皮を噛んでいる幼な子も五十二、三才のよき母親となっていることだろう
3	1946	1	5	地図			パパイヤ	
4	1946	1		薄紙		バトパハ	バトパハ 支那人の家	
5	1946	1		不明		バトパハ	バトパハ 酋長の家	
6	1946	1		地図			雨	
7	1946	1		薄紙				
8	1946	1		地図				後からスケッチしていたら急にふり向いて何やら訳のわからぬ言葉でベチャラベチャラおこった
9	1946	1		地図	多色		かいぼり	
10	1946	1		地図				福ちゃんと打石君の万才猛練
11	1946	2	1	地図			水浴	
12	1946	2	9	薄紙	青		夢	
13	1946	2		包装紙	青		夢	異郷に苦しむ者にとって、唯一の慰安は故郷を想い夢見ることである
14	1946	2	21	薄紙			山羊	
15	1946	2	23	地図			叢林の彼方	
16	1946	2		地図		バトパハ	セビラン 十六才	
17	1946	3	5	不明				
18	1946	3	10	不明			郷愁	
19	1946	3	10	茶色紙			白髪の老婆	夕食を終え馴染みになった近くのハウスに行って写生するのが何よりの楽しみだった 床で老婆が木の実を割っていた
20	1946	3	22	地図			釣り	
21	1946	3	22	地図			沼	
22	1946	5	8	地図			スリガーデンのとばり	自給自足 芋を作っていた
23	1946	5	11	地図			檳榔樹	
24	1946	5	12	地図		バトパハ	ゼビラン 16才	
25	1946	5	17	不明		バトパハ	ゴム運搬	ゴムの樹林を巡り樹液を集めトロッコを押して運ぶ作業も楽ではなかった
26	1946	5	18	箱			野豚	十六部隊の野豚狩り 一片の肉みあらず牡丹汁 缶を叩き大声をあげて隊員が叢林を囲み野豚を追い出し捕える筈だったが、私たちの頭上高く飛び越え殆ど逃がしていった 中位の野豚一頭を捕える丈に終わった 猪と思える程の敏捷さで到底吾々の手に負えるものではない
27	1946	5	19	包装紙		エンダウ	エンダウ 熊本兵曹	
28	1946	5		不明		エンダウ		水浴をするよどんだ深い沼からとうとうと響かせて落ちる水は小さな溪流さながらに農道の横を小川となって走っている 流れ落ちる一か所はかなりの深さで背びれから尾びれにかけて紅いの鯰に似た魚が銀鱗をひるがえしている その溜りに手製の漁具を仕掛けるのだ 苦役の疲れも何のその現場に急ぐ太公望の胸の高鳴りが聞こえてくるようだ
29	1946	5		薄紙		バトパハ	バトパハ 農園の小屋	
30	1946	5		地図			馬來の子供たち	草笛を吹きながら福留兵長と長い赤道をあちこちと歩いて歩いた 土橋の草むらに少年の釣りしている姿を見とめた
31	1946	5		地図			英語の堪能な木下さん	全身濡鼠になって仕事から帰ってくると水浴もそこそこに先ず温いモーフを被る そしてこんな姿で腹を満すのである 女房でもいたなら、いや内地だったら「いかにせん婆婆ぢや一家の亭主だが」ね つらいものよ

表 野田明氏スケッチ一覧〈2／6〉

No	年	月	日	紙	色	場所	題	メモ
32	1946	5		地図	多色		ゆあみ	元朝やゆあみに風の薫りなり
33	1946	5		地図	多色		自活園	片隅に花も一輪自活園
34	1946	6	1	包装紙		バトバハ		
35	1946	6		地図		バトバハ	十八才 アワン	兵舎に突然たずねてきた
36	1946	6	10	地図			馴染みのトッカル婆を描く	
37	1946	6	10	薄紙	多色		診察室	
38	1946	6	13	地図			華僑の姉と弟	
39	1946	6	14	茶色紙		バトバハ	バトバハ 小屋	
40	1946	6	14	包装紙			子供	
41	1946	6	14	地図			子供	大きな瞳は常に輝いている
42	1946	6	15	便箋		バトバハ	バトバハ ゴム林	
43	1946	6	15	薄紙		バトバハ	チャイナー	
44	1946	6	15	不明			トッカル	
45	1946	6	15	地図			トッカル（物々交換）の一憩	抑留舎から遠くへは出られないので近くの民家の現住民や物々交換にやって来るマライ人や華僑の人たちが私にはこよなく親しいモチーフに限られてくる
46	1946	6	16	薄紙			灯影	かんづめあげてモデルになってもらった
47	1946	6	16	薄紙			ポーズ	水浴を終えて 樋口兵曹
48	1946	6	16	原稿用紙			ポーズ	裸体より
49	1946	6	17	包装紙			少年A	マライの少年
50	1946	6	17	包装紙			少年Aの兄	マライの家族は皆むつまじく暮らしている
51	1946	6	17	包装紙			少年B	
52	1946	6	17	包装紙			少年Bの姉	アムエル 十四才
53	1946	6	17	包装紙			少年Bのお父さん	
54	1946	6	18	薄紙			風揚げ	南の空は高く広い
55	1946	6	20	原稿用紙				
56	1946	6	20	便箋		バトバハ		
57	1946	6	20	地図			イビラン 四十五才 父	この善良な家族へ幸あれと祈る
58	1946	6	23	印刷用紙			タピオカとズイキ	
59	1946	6	24	不明			椰子の実	灰色に干からびた椰子の実から鮮やかなみどりの新芽が伸びてゆく
60	1946	6	26	薄紙			椰子	
61	1946	7		薄紙	多色	バトバハ	海軍食糧庫	
62	1946	7		地図			句集	遅しき手に植えてゆく早苗哉 俳句の選者でもあり英語も教えていた文化部員木下兵曹は井の頭の家を売り払い故郷の和歌山県で八十三才で世を去った
63	1946	10	6	地図			三叉路	
64	1946	10		地図				灯の消えて空に月ありちちろ虫
65	1946	11	8	地図		バトバハ	少女	
66	1946	11	9	地図	多色	エンダウ	黄昏れる雨期のエンダウ	雨雲の垂れて暮るるや枯木立
67	1946	11	9	地図	多色	エンダウ	雄大かな エンダウの野辺	はるけくも茅原の雲の峯白し
68	1946	11	9	地図				荒地の芋畑で空のリュック2ツ発見す
69	1946	11	10	地図			マンデーの道	
70	1946	11	11	地図	多色		赤い道（ボーキサイト）	労働風景
71	1946	11	11	地図			白兵戦	両方からせめ合って鋤をふるい進むので白兵戦と私は呼んでいた

表 野田明氏スケッチ一覧(3/6)

No	年	月	日	紙	色	場所	題	メモ
72	1946	11	12	地図			キャンプの雨	五日間の期限付きでキャンプの設営作業が急がれた
73	1946	11	12	地図	多色		鋤	この鋤こそエンダウ海軍作業隊の象徴である
74	1946	11	12	地図	多色		雲	
75	1946	11	13	地図			草刈り	一エーカー当り十五名乃至二十五名が当てられ一日平均1メートル幅二百メートルを耕さねばならないのである この耕作面積は正当に行われなければならない 未熟な者、未経験な作業員にとってはほとんど休みなしに鋤をふるっても、なお太陽が沈む頃でなくては終わらなかった
76	1946	11	13	地図	多色		雨晴れて	
77	1946	11	14	包装紙			苗取り作業	水田作業は整然と日本式に行われた
78	1946	11	15	不明	多色		雨晴れて	
79	1946	11	15	地図	多色		雨後	
80	1946	11	15	地図	多色	エンダウ	老婆	
81	1946	11	17	地図			砂糖黍のある家	
82	1946	11	17	地図				
83	1946	11	17	地図			西日	
84	1946	11	22	地図	多色		大樹の跡	
85	1946	11	22	地図	多色		雲	
86	1946	11	22	地図	多色		沼地	湿地帯に囲まれるこの地は必然的にマラリヤ蚊の巣窟でもあった
87	1946	11		地図			子供	作業帰りの道端で
88	1946	12	6	地図			四万エーカーの水田	燕去り灯く頃 人は故里に帰る 祈る心に鈴振れど 汗は目にしみて ああ敗れたる敗れたる 流漂の旅はどこまで続くものぢややら
89	1946	12	6	地図		エンダウ	農道	この農道を進めば開拓している四万五千エーカーに及ぶ広漠たる水田が一望に眺められ、苦勞に稔った黄金の穂波がそよいでいた。
90	1946	12	13	地図			沖縄空襲を知る	彼は沖縄生れと云う
91	1946	12	15	地図		エンダウ	一憩	雨期を前にして炎天下の密林に伐採 焼却 清掃の順に作業は急がれ 休みなく続けられていった
92	1946	12	15	地図			清掃チャンコール	終生忘る事の出来ない清掃チャンコール 炎暑のもと 焔と煙を風がおり呼吸も出来ない
93	1946	12	17	地図				
94	1946	12	18	地図			伐採	
95	1946	12	20	不明			排球大会	
96	1946	12	30	地図			大蛇	サバイバル この大胆な料理人の名は忘れて了った
97	1946			包装紙				皆の要求は腹一杯飯を喰うこと 満腹すれば御機嫌が頗る良いのである その後には郷愁が又も甦って来る 小生 24 才 木下さん 36 才
98	1946	12		原稿用紙			1 日のたのしみ	タピオカにて饅頭を造る
99	1946	12		地図			演芸場うら	黒こげの枯木が夜のとばりに一増の無気味さを漂わせる
100	1946	12		薄紙			楽屋	中島兵長 舞台装置などで夢中になっている時かもしれぬ 木下さんと私の衣のうが無くなっていた 若干のスケッチ、シンガポールで買った鱧皮の財布が惜しくて今でも忘れられない 衣のうの底に母からのハガキが昨夜の雨でへばりついていて 部員の木下さんも今はない
101	1946	12		不明			着付け	
102	1946			薄紙				
103	1947	1	1	手製			エンダウの春	自画像 元旦
104	1947	1	5	地図			姿三四郎（森田兵長）	どこの生まれだ 相津です 姿三四郎の森田さんご逝去

表 野田明氏スケッチ一覧(4/6)

No	年	月	日	紙	色	場所	題	メモ
105	1947	1	5	地図			おお姿君	おお姿君よくいらっしゃいました 貴男はお強い■ 村井本助 (伊藤) 姿三四郎 (森田) 監督 阿部幸輔
106	1947	1	9	不明			マライ	夕闇せまるザボンの木陰で演芸に見入るマライの親子
107	1947	1	5	地図			姿三四郎	ウ…っ… 赤くなる 青くなる 勝つのだ 死ぬのだ ウフフ… 桧垣源之助 (伊藤) 三四郎 (森田)
108	1947	1	10	地図		エンダウ		稲袋を点検する英側キッチンナー
109	1947	1	19	地図		エンダウ	橋	隊を組み毎日通った兵舎付近の橋
110	1947	1		包装紙			高野曹長	
111	1947	1		地図			湯沸かし当番	
112	1947	1		地図	多色		文化部	
113	1947	1		地図			舞踊	お島千太郎に扮する岩男兵長
114	1947	1		地図			メイキャップ	
115	1947	1		地図	青		蒼に雨	
116	1947	2	2	地図				棕櫚科 丈二丈余 沼地に自生
117	1947	2		地図			ガタガタ橋付近	
118	1947	2		不明			重労働	乾期には水不足に悩まされ 汚れ果てた身体を洗うべき 水浴場もなくそのまま眠るといった生活が続いたが 雨期に入って泥濘膝を没する水田作業もまた形容し難い苦痛の連続であった
119	1947	2		地図	多色			表通り橋より見たる宿舎
120	1947	2	6	薄紙			花笠子萬	およそこのような催しものを見た事もないキャンプ付近の支那人 マライ人はその度毎に最高の衣裳に着飾って見物を楽しむ このことが彼等の対日感情好転にどれだけ役立ったことか! 自然演芸部員にも一■迫真の演技がこもるのである
121	1947	2	6	不明			旅立つ小方にて	
122	1947	2	10	地図			初収穫	指揮していたマライ人 近くから出勤していた彼は勤勉でユーモアを交えて我々を指図した
123	1947	2	13	地図	多色		旅立つ小満	「後編 旅立つお萬」の主役を迫真の演技で飾ってくれた南沢さんだった 復員後東京都大田区でゴルフ製作を設立、順調だったが平成四年三月他界された事をご家族から知らされた 享年七十二才だった
124	1947	2	13	裏紙	多色		女形 (杉さん)	東京都 ブラジャーも手製である
125	1947	2	16	薄紙				衛兵隊のデッキにもレコードが廻ってきた 湖畔の宿 勘太郎月夜唄 湯島の白梅 など 一時の疲れも忘れ魂を奪われ 狂喜した
126	1947	2	25	裏紙			歌集	生きて世に甲斐ある命一筋に わが大君の春を迎へん 永田兵曹長 (歌人)
127	1947	2	25	茶色紙			伸びる甘根	何もかも喰えるものなら喰ってみる
128	1947	2		薄紙			十六部隊の演芸	隊の中には芸達者な人が居て 浪曲、万才 演劇と月一回の演芸会は何よりの慰安だった 近くに住む原地人も兵舎の外に群がった
129	1947	2		地図	青	エンダウ		
130	1947	3	1	不明			海	小生
131	1947	3	8	包装紙			大野曹長を描く	
132	1947	3	11	薄紙			噴焰製本	隊員の文芸作品を集録した文集「噴焰」出版は五百部にのぼった 既に三十年前に亡くなられた箕輪さんの製本によるものである
133	1947	4	24	薄紙			息詰る総員集合	
134	1947	4	26	薄紙			水容便 (アメンバー)	

表 野田明氏スケッチ一覧(5/6)

No	年	月	日	紙	色	場所	題	メモ
135	1947	4	26	茶色紙			熱	マラリアに患い隔日の高熱に襲われ 木下さんは憔悴しきっていた
136	1947	5	3	地図			熟睡	内還途中
137	1947	5	6	印刷用紙		バトバハ	バトバハ ゴム林	
138	1947	5	6	印刷用紙				移動混乱のエンダウ作業隊に送る
139	1947	5		包装紙			鋤	水田作業の服装
140	1947	5		薄紙			収穫を急ぐ	
141	1947	5		地図			ドレイン完成	掘っても掘っても泥水が流れ込んで、日がとつぷりと暮れても出来上らず応援に来てくれた隊の人達と一緒に戦争のような騒ぎをして八時頃にどうやら曲りなりに掘り上げた 味の無いビスケットを齧り乍ら足を引きずるようにして隊に帰り着いた事も今はなつかしい 「請けかぶり応援隊の汗も冷え」
142	1947	5		薄紙			病室の朝	
143	1947	5	8	薄紙	赤		湯沸し	病室の外の間でお湯を沸す同僚
144	1947	5	8	薄紙			枕元スケッチ	
145	1947	5	9	地図			スケッチ帖	この頃裸体に力を入れていた
146	1947	5	10	薄紙				診察の結果全治
147	1947	5	14	薄紙			錬成班において	雨の日は一戦交えるのが楽しみだ 背中の菱形は紫色で抑留作業隊員のユニホーム
148	1947	5	14	印刷用紙			内還ニュースを読む	病室で内還ニュースを読む
149	1947	5	15	地図			島から帰った男	
150	1947	5	17	茶色紙			抑留生活の一つ	
151	1947	5	20	薄紙		ニュースン	ニュースン 映画の夕	映画の夕 内還途中
152	1947	6	11	地図		ニュースン	ニュースン 内還途中	
153	1947	6	12	茶色紙				トッカールも暇らしい
154	1947	6	12	不明			オクラと芋	静物写生
155	1947	6	12	薄紙		ニュースン	乾燥肉を齧る (陸軍)	よく喋る男であった 今どこでどうしているだろうか
156	1947	6	14	地図		ニュースン	マライの子ども	ゴム採集を手伝うマライの子供 ニュースンにて
157	1947	6	14	包装紙		ニュースン		
158	1947	6	14	包装紙		ニュースン		
159	1947	6	16	印刷用紙		ニュースン	病弱者の内還	
160	1947	6	19	裏紙				
161	1947	6	20	薄紙			谷口水長	彼は明日内還するという
162	1947	6	20	便箋			女 スケッチ	彼女のポーズをとってくれたスケッチは数枚ある 内還出港2、3日前にして想い出深く残るだろう
163	1947	6	21	茶色紙		ニュースン	女 スケッチ	
164	1947	6	21	便箋		ニュースン	粉を選ぶマライの女	
165	1947	6	23	包装紙		ニュースン	椰子	病舎の窓から見える椰子の梢の葉からとなり葉へと敏捷に飛び移るリスを高熱でもうろうとしていた眼で追っていた
166	1947	6		薄紙		ニュースン	ニュースンの病室にてお粥を食べる柿沼さん	腹一杯食うことを馬來語でマカンブッサールと云うなり
167	1947	7	16	地図		帰国船内	傷病帰還兵	輝山丸船内にて 傷病帰還兵 ニュースンの港を出港して一ヶ月目 佐世保浦頭に上陸 復員 この日帰郷した
168	1947	7		画用紙	多色	帰国船内	傷病帰還兵	
169	1947	7		薄紙		帰国船内	髭を剃る	輝山丸にて 内還途中
170	1947	7		便箋		日本	浦頭に上陸	佐世保 浦頭も近い

表 野田明氏スケッチ一覧〈6／6〉

No	年	月	日	紙	色	場所	題	メモ
171	1947			地図				叢林を開拓し水田と化した4万エーカーの一部
172	1947	9	5	地図			舞台裏にて	この人が一番よく似合う
173	1947	9		茶色紙			古川重体に陥入る	嘗て戦友愛と云うものをこんなに強く視た事はない
174				不明	青			
175				厚紙				眠れ 母の手に
176				薄紙				
177				包装紙			内職	現地人の仕事を手伝いする事 固く禁ぜられているのだが！
178				厚紙			鎌	固い灌木の伐採で鎌の刃はすぐこぼれて了う その都度手持のヤスリで研ぐのである 小林兵曹
179				茶色紙			村越兵長と林さん	演芸部員の村越三郎さんは三ちゃんのお愛称で呼ばれていた 平成六年五月三鷹市で死去 享年七十二才
180				地図				演芸場つづきだのに元の文化部で木下さん 福留さん 小生 手前が文化部長だったと記憶している
181				画用紙			茶店の女 十八	

表凡例

- 「No.」は整理のために筆者が付したもの。描かれた時期が早いものから順に並べて番号を付した。時期が不明の8点は174番以降に並べた。
- 「年」「月」「日」はスケッチまたはメモに書かれたものに従ったが、明らかに異なる場合は修正した。記載がない場合は空欄にした。
- 「紙」はスケッチが描かれた紙の種類。「地図」は地図の裏。「不明」はスケッチの裏面全体に紙が貼られているもの。
- 「色」は、黒色のみのものは空欄、黒色に赤色または青色が一色あるものはその色、二色以上あるものは「多色」と記した。
- 「場所」は明記されているもののみに記載した。「スリガーデン」は「スリガディン」(Sri Gading)、「ニュースン」は「ニースン」(Nee Soon)の方が現地の発音に近いが、元の記載のままにした。
- 「題」はスケッチの表面に書かれたものを記載した。題がない場合は空欄にした。
- 「メモ」はスケッチの裏面または添付メモに書かれたものを記載した。添付メモには帰国後に回想して書かれたものがある。
- 「題」と「メモ」には今日の感覚に照らすと一般に使われない表現も見られるが、原表記を尊重した。旧仮名遣いは現代仮名遣いにした。

『噴焰』翻刻凡例

旧仮名遣いは現行の仮名遣いにした。

送り仮名は原則として現行の送り仮名にした。

旧字体や俗字は原則として常用漢字にした。

漢字は、明らかな誤字は修正したが、現在の一般的な表記と異なるものを含め、原則として原文の表記にしたがって記載した。例えば、極地〔局地〕、拾収〔収拾〕、使驅〔驅使〕、気嫌〔機嫌〕、軍規〔軍紀〕、好遇〔厚遇〕、美事〔見事〕、恍惚〔恍惚〕、養てる〔育てる〕、荷なう〔担う〕、辛棒〔辛抱〕、喊高い〔甲高い〕、急救〔救急〕、巨離〔距離〕、陣衛〔陣営〕、効を奏す〔功を奏す〕、待期〔待機〕、真っ黒闇〔真っ暗闇〕、劇痛〔激痛〕、渾心〔渾身〕、無中〔夢中〕、幸事魔多し〔好事魔多し〕、目鏡〔眼鏡〕、不精〔無精〕、布く〔敷く〕、競走〔競争〕など。（〔 〕内は現在の一般的な表現。）

漢字を仮名にした場合がある。

事〔こと〕、様〔よう〕、共〔とも〕、程〔ほど〕、位〔くらい〕、丈〔だけ〕など。

殆ど〔ほとんど〕、只〔ただ〕、仲々、中々〔なかなか〕、一寸〔ちょっと〕など。

居る〔いる、おる〕、呉れ〔くれ〕、乍ら〔ながら〕、出来〔でき〕、云う〔いう〕など。

「来る」「行く」「時」「所」「処」「者」「物」は文脈によって仮名にした場合がある。

「這入る」は「入る」に、「不拘」は「拘わらず」に変更した。

「我」と「吾」は統一せず原文の通り記載した。

原文が仮名で書かれている言葉は、同一の言葉が本文集中の別の箇所漢字で書かれている場合を含め、仮名のまま記載した。

固有名詞（地名・人名）およびカタカナで表記される語につける鍵括弧は省略した。

カタカナ表記の言葉は、濁点の有無、長音の有無など適宜修正した。（シャイロップ〔シャイロック〕、ニューヨーク〔ニューヨーク〕、スィンクス〔スフィンクス〕、レニン〔レーニン〕など。）

国名・宗教名等の漢字表記は原文のままとし、初出時に〔 〕内にカタカナ表記を添えた。（独逸、猶太など。）

「マレー」「マライ」「馬來」は統一せず原文のまま記載した。

記事中の人物の発言は、原文では、改行され、鍵括弧に入れられ、前後に「・・・」が置かれているが、改行と前後の「・・・」は省略した。

マレー語の単語の意味など、現在の日本の読者にわかりにくいと思われる語句には【 】で説明を付した。

印刷の具合により判読が難しい場合は文脈等から推測した。それでも判読できない文字には■で示した。誌面の一部が破損して文字が読めない場合も■で示した。

『噴焰』の記事の一部は加筆修正が施された上で『サバン会誌』に採録されている。『サバン会誌』の加筆修正のうち『噴焰』の記事の理解を助けると思われるものを適宜〔 〕に入れて示した。

寶

小

何のその
道草もあり
千代八千代

エンダウ海軍作業隊

『噴焰』創刊号に寄す

第十方面艦隊司令長官

海軍中将 福留 繁

エンダウ海軍作業隊で文集の創刊号を発刊することとなったから、題名の揮毫と何か序に代わるような一文を寄稿せよと森山副官から私に言って寄越された。

私はエンダウ作業隊のこの意義多き企てに心からの敬意と賛同を表するの余り、その任ではありませぬのも顧りみず、森山副官からの御申出を引き受けさせて頂くことと致しました。

文字は私の天性の悪筆を御許し願うの外はありませんが、文の方はこの上ない相應しい序文が森山副官の御手紙の中に書き尽くされておりますので、私の拙い表現などを書き綴るまでもなく、そのままそっくり御手紙の文章を拝借致すこととします。森山副官は左のように述べておられます。

萌黄一色の水田は既にみのりもたわわな頃となり、こうやって吾々の成果が眼のあたり見られるとき、植付け当時虫にでも食われてしまえと思った異人さんの作業も、そういった単純な感情を越えて、勤勞の樂しさが胸の中から込み上げてくるのをおぼえます。私達が色々と苦しい生活に追われ、内還をするまで俊寛のようにあこがれている気持ちの中に、日本人の勤勞精神が本質的な勝ちどきを高らかにあげているのを感じます。

更にまた、近頃ほどお互い同志の愛を感じずることはありません。入植当初に較べて確かに私自身を考えてみても、気はすさんできたように思われます。だが静かに反省してみると、こういう逆境のもとにあつて

なお堂々の前進を続けているのは、よほどの愛情なくしてはゆけるものではありません。

愛と勤勞の精神、この二つのものは、内還後私達自身の足跡をふりかえってみるとき、異常ななつかしさを呼び、来るべき未来への強力な精神的推進力となることを固く信じております。

今般当隊で「文集」の創刊号を発行することになりました。文集を貫く主張は愛と勤勞であります。そして文面にもられるものは戦争中の体験と抑留生活の生々しい記録であります。将来再興の日本帝国の文献的意味を持つように、また、興奮した表現を用いるならば、世界に対して抑留という異様な環境下にあつてなおこのような文献的文芸作品を生み出す日本人の驚くべき底力を示さんがために刊行するものであります。(下略)

私は右の森山副官の御手紙を拝見して言い知れぬ感動に打たれ、自分でもおかしいくらい涙しました。これこそ諸君が異様な逆境に処しつつ生活体験を通じての真剣な叫びであり、考えに考え、悩みになやみ抜いて掴み得た人間としてこの上ない尊い自覚であり、信念の声であると信じます。あに森山副官一人の声ではなく、西川部隊長始めエンダウ海軍作業隊全諸君の心であると存じます。これ以上私が何を申すことがありましよう。

終

卷頭の辞

馬来海軍作業隊指揮官

海軍少将 魚住 治策

『何のその 道草もあり 千代八千代』

馬来の土を鮮血に染めて快心の決戦を行うつもりであつた吾々が、思ひもよらぬ終戦という大変局に際会し、心身ともに慌しい中に幾変遷、遂に十万余の戦友とともに作業隊として南方地区に留まることになった。

この間、英側から提示された各種の好条件は何の挨拶もなく次々に反故にされ、内還に関する最高司令部の懸命の努力も老獪な相手には暖簾に腕押しで何の反響も示さない。たまたま入手する内地のニュースは物情甚だ憂慮に堪えないものがある。

これら悪条件の元において吾作業隊は実によく頑張ってくれた。

エンダウ作業隊は編制の当初から幾多苦難の道を辿つたが、隊員一同よく一致結束、遂に現在地において大ジャングルを青田と化した。正に作業隊中の白眉である。

元より魂のないところに形の上の成果はあり得ない。隊員諸士が一日の労役にヘトヘトになりながら、兵舎に帰つては、士気の昂揚に、情操の向上に、あらゆる工夫と努力とを傾けた。

古人も、和歌は天地をも動かすと喝破した。

至誠の進るところ、神は必ず現われ給う。エンダウ作業隊が見事な成果を納めつつあるのも、また当然と思う。

およそ人生、苦悩は悲しみも恐ろしさもこれを形に表現することに

よつて軽減される。それは苦悩に取り組む自分自身を第三者として観察する余裕ができるからだ。ここに苦難突破の妙諦がある。

前掲の句は、私がかつてエンダウ訪問の時、展覧中の作品で私の心を打たれたものの一つである。今回エンダウ作業隊で『噴焰』を発刊して隊員の作品を収録するという。誠に結構な企て、過去を偲び順境のときには思い出の楽しみともなり、逆境のときには難局突破の指針ともなると確信する。

そして願わくば内還の暁は祖国再建の資とされたい。

囑に依えて巻頭の辞とする。

皇紀二千六百七年一月二十六日

「獄舎生活を終えてバトパハ宿舎にて識す」

終

エンダウ 開拓小史

森山幸晴

森山幸晴

序

一・作業隊前史

二・エンダウ開拓規模の考察

三・吾等の苦闘史

序

わずかに入手される報道によれば……

祖国は今、のたうちまわっているという。だがここに、のたうつ術もなく、今一度祖国のせせらぎの音を聞きたいと、ただそれだけを望みにようやく生きていかねばならぬ巨大な日本人の集団がある。

J・S・P——哀しい調べを持つこの言葉のもとに、日本人がかつて体験したことのない「投降軍」の逆境の道を哨ぎ哨ぎ歩み続ける南方十万残留作業隊の人々がそれである。

これらの人々の生活記録は祖国再建の精神的礎石として大きな文献的価値を持つものではあるまいか。

我々もまた作業隊の一員として、この苦闘の日々をマレー半島エンダウの地に、三千の同胞とともに屈辱と疲労に明け暮れしているものである。

我々はこのかけがえのない体験を虚飾なく書き綴ることによって、恐らく歪められているに違いない次の世代の若い人々の歴史の片鱗に、吾々の歩んできた真実の歴史の資料を提供したく思う。

ここに語られる流れの一つは生のままの白人の対日感情であり、他の一つは大和民族の組織的訓練の窮極的精神形態である。

一・作業隊前史

作業隊生活を語る前に、我々は作業隊の成立過程について、その概要を戦時に遡り考慮せねばならない。

何故ならば、我々作業隊員は、既に作業隊以前において、祖国で暮した人々、殊に平時の人々にとっては想像に絶する茨の道を辿ってきており、その当時の悲劇的な心理状態を作業隊生活にそのまま持ち越して進まねばならなかったという二重の苦痛、即ち作業隊出発当初、既に作業隊員が精神的肉体的に忍耐の限度まできていたということは当然明記せねばならないからである。

私は若輩の一予備中尉であり、南方全域にわたる諸問題について語る術を持たない。だが私の周囲をとり巻く環境は世紀の変貌の渦中であり、その環境を物語ることによって南方全域の類似的運命は相当明瞭に浮き出してくるものと信ずる。

昭和二十年八月十五日、戦争終息の御詔勅の飛電が八十万将兵のもとにもたらされた当時、我々の守備するサバン島もいきまぐ戦場であった。天佑を確信し全員突撃せよ！絶大な期待をもたれて断行せられた捷一号作戦（レイテ海戦）に敗れ、艦隊の主力を失い、祖国との連絡を全く絶たれ、更に米英の航空機潜水艦の跳梁により極地輸送すら絶望となった南方軍全体の苦悩は、我々の生活面にも露骨に現われていた。

何よりもまず、我々は食って生きていかねばならなかったのである。そのためには我々は野草を食い、自活態勢をととのえることに寸暇を惜しんで働かねばならなかった。

また、病魔に対する薬品の決定的不足は悪疫瘴癘の南域にあつて将兵を充分治療することを許さず、傷病兵の交代不能はこの状況を更に

悲惨なものに駆り立てた。中でも恐るべきマラリヤ蚊の猖獗は、私の部隊を例にとれば、同時期に最高七五%の患者を出し、防瘡対策に精一杯という状態のときもあった。

だが軍の目的はただ生きていることではない……。
生きて闘うことである。

決戦の様相を帯びてきた南方軍は、慌しい空気の中に城塞の完成に全力を尽くした。空腹と炎熱にめまいを感じながら、将兵は黙々として働いた。

決戦に備えて患者の相当数が築城に訓練に駆り出されたことは当然であつた。

かくて昭和十九年度後半期より狂乱にも似た日が重ねられた。

二十年度春、英国の南方奪回計画が尖鋭となり、アンダマン、ニコバル、サバン等の艦隊基地は大規模な艦砲射撃と艦載機の空襲、昭南、パレンバン地区のB29による定期空襲等、息づまる雰囲気の中に、西方離島方面の防衛陣地はほぼ完成し、戦略的に重要でない方面の兵力は大陸方面〔の後方基地〕に集結し、〔昭南を中心とする〕大陸防衛もようやくその規模を高めていた。

サバン島においても天然の要塞による洞窟陣地と〔航空兵力転進後に残されたる莫大なる遺産を活用せる〕現地における爆弾砲の完成、それらを一貫させた訓練の成果は、中部太平洋におけるみじめな遊撃戦法の戦術的意義の弱さを超えて偉大な戦果を約束する如く、全ての将兵は耐え、信じ、祈った。

また伝わるところによると、ビルマではインパールを目標の間に迫って糧食の不足から数千の餓死者を残して敗退し、それを契機として英軍は全ビルマに渉り攻撃前進を続け、遂に首都ラングーンは奪回された。だが日本軍は新しい努力をかたむけて立ち上り、戦友の屍を取り戻

すためにようやく大反撃の火ぶたを切りつつあつた。

そのとき全ての将兵が崇高な逆上の頂点にあつた。ちょうどそのとき、唐突として戦争終息が伝えられたのである。

我々は独立して戦争することは可能である。将兵の脳裡をかすめた最初の一ことはこのことであつた。

南方総軍の大規模な独立戦争を夢想した相当数の将兵達が、降伏か、抗戦か！一触即発の内部的分裂の危機をはらまして、総軍〔最高首脳〕の腹を割った命令を鶴首したのは自然の勢いであつた。

だが寺内元師の詔書必謹の命令はよく全軍に浸透していった。

この頃、「おん涙　ぬぐい給いし白き御手　み民われらの忘らうべきや」の詠歌が伝えられた。

抗戦の与論はやがて潜在的となり、次いで個人的感情になり、遂に一切の個人的感情は組織そのものに捕縛され、これに反するものは自然淘汰の形をとらざるを得なかつた。

かくて典型的武人であり、ただ来るべき戦闘のためにのみ生き抜いて来た、私の尊敬する某老大尉も、見事に自刃して果てた。

また、この激しい変貌に耐え得られない精神的に弱い人々——私の身辺だけでも二人の者が短銃自殺を遂げた。

当時の思想的混乱の圧力は、如何なる楽天家たりとも死に対する観念を強烈に植えつけさせずにはおかぬものがあつた。

自然淘汰の他の一方のはけ口は、自刃するよりむしろ個人的に当つて砕ける式のものであつた。

このような考えを持つ血気の若者達は現住民の間をくぐり、ゲリラによる闘争を行わんとするものである。一見ものの怪につかれたようなこの考え方も、実現されそうな外部的諸条件は具備せられており、そのため多くの清い、だが悲しい物語が繰り展げられた。

この稿を草しつつある今も、ハノイよりの仏印戦線公報によれば、昨年十二月十九日戦乱が勃発して以来、今日まで五十に上る日本人の死体が発見され、日本人達は主に軍事的技術者、砲術指導官として活動しているそうである。断ち難い祖国との恩愛のきずなを断つて密林深く苦闘しているこれらの同胞達のことを思うとき、形容し難い焦燥を感じ、胸の底から悲しみがこみ上げてくるのである。

さて、私は降伏に至るまでの将兵の一端に触れるため、この種の環境、即ち彼等の夢を現実に通じた現住民との関係を事実によつて語らねばならない。

私は終戦当時、スマトラ根拠地部隊の陸戦隊の一士官をやっており、隊長が衛兵司令(隊内警察を兼務していた関係から、若干この種の事件にふるところがあった。

終戦直後、スマトラ根拠地部隊は基地サバン島に英蘭軍上陸のためスマトラ大陸に直ちに移動すべき命令を受けた。そのため対岸のアチエ州のブランビントン(月と星の聚落)という小村付近に移動集結を完了した。

その直後、海軍施設部の若い工員数名が愛国的ゲリラを敢行するため、貨物自動車に糧食を満載し、インドネシア婦人を伴い山中深く潜ったという報を受けた。

私は直ちに衛兵副司令とともに北アチエからスマトラ縦断街道を南東に進み、密林中のカンボン【集落】を探し求めた。ようやく小さな金山の付近の住民により、それらしいインドネシア婦人が米袋を頭にのせサロン【腰布】をかるげて山中に入るのを見たというのを耳にした。

果せるかな、それより五哩ほど奥地の沼沢のほとりに彼等の隠れ家を見出した。

さて問題はインドネシア婦人の私に対する言葉である。

「私は日本人が大好きです。この人が密林の中に逃れて日本のために

戦うのだと聞かされたとき、私はぜひ一緒につれて行ってくださいと願いました。日本が敗けたからといってどうして私はこの人を捨てられましょう。私達は苦しい旅をつづけ、やっと愛の巣ができあがろうとするとき、こんな山奥までなぜ貴方は私達を追いかけ、私達を引き離そうとするのですか。」

つぶらな瞳にいつぱい涙を湛えながら私につめ寄って来たのである。私の言わんとするのは南方地域の対日感情である。終戦直前の苦しい状態にあつて、民政は現住民に対して相当激しい影響を与えたはずである。

戦前白人達によつて支配されていた住民達の生活が、戦時中、吾々が戦争のゆえに我慢してもらつたあの苦しい生活以上であつた(彼等を白人の支配より解放するための戦いゆえの苦しさであるということ)を自覚したためであろうか。あるいは、もつと本質的な魂のふれ合いにあつたのであろうか。ともかく、現住民の対日感情はこのように深い尊敬と愛情につまれていた。だから個人的に現住民を通してゲリラの夢を実現させることは可能であり、絶望的な気持ちは降伏という屈辱の世界よりもむしろこの方向に傾きがちであつた。

軍としての抗争は放棄せられた。

だが……降伏か！ 死か！ 離脱か！

三者選一のこの問題に全ての将兵は深刻に考え、疲労困ぱいしたのである。マレー・シンガポール地区等にあつては英軍の大部隊進駐が終戦よりほど経ずして行われ、このような環境から英軍使役の淵に直ちに突き落された。

サバン島における「英軍の」進駐軍の状況を私の見た目で卒直に語るならば、彼等の風態【態度】は勝利者のそれでなく、やっと救われた難破船の乗組員といった風であつた。

彼等の上半身は裸体で、およそ人間らしくない赤い皮膚をさらけ出し、腰には疲れ果てた短ズボンを申訳にまとい、もう既に自分達のものである砲台のパイアの果実を気の弱い強盗がせいっぱいでとりあげるようにもぎ取り、赤い汁をしたたらせながら、まるで酒天童子を思わせる素振りで果実をバクついていた。

シンガポール・マレー地区も恐らく同様の印象を受けたことであろう。だが〔降伏〕調印式が行われ、サウドパレードが終わり、酒天童子が正気を取り戻したとき、マレー方面の〔日本軍にとり〕血涙下る屈辱的生活の幕はあけられたのである。

一方、スマトラ、ジャワではインドネシア民族が英蘭軍の上陸を頑強に拒んだ。そのため英蘭兵のこの方面の大陸への実力的進駐は不可能であり、まず英軍はこの混乱を日本軍の手によって拾収しようと試みた。

そこで降伏軍において依然武装が許されたのである。スマトラのパダン、メダンその他蘭印方面に数ヶ所申訳に英蘭軍は上陸したが、彼等の駐屯地帯の外周には必ず〔武装した〕日本軍を充用し、インドネシアとの直接の接触を避ける挙に出たし、また実際に接触は不可能であった。

かくして米記者の表現をかれは、「日本によつて牙を植えられたインドネシア民族」の独立運動が澎湃として各地におこるや、日本軍隊をめぐって集団的な紛争事件がぼつぼつしたのである。

武装をもたぬ日本軍人に対しては依然として極めて親切であったが、武装を持つ者〔日本軍〕に対しては、武器ほしさのあまり、双方の血を見るまでも彼等は譲歩しなかった。

日本軍は彼等との不本意な闘争をしなければならない悲しむべき運命をなげきつつ彼等と対立していった。

私達の関係したアチェ民族は、インドネシア民族中最も精悍な種族であり、オランダと三十年にわたる闘争をつづけた歴史を持っている。

彼等はアピアピ（火の如く）という結社を作り、あるいは日本式ゲリラ訓練を持つTKRという軍隊を編成して、政治並びに実力闘争の段階にまで自力で起ち上つたのである。

彼等は宗教の詩篇を唱えながら蛮刀（パラシ）を大上段にふりかぶり、猛烈に突撃して来た。

その詩篇を唱え肉体を滅ぼすことは靈魂の不滅を意味するのだ。

それどころか、銃弾にあたればその勇士は讃えられ、天国で美しい天女と結ばれると信じているのだ。〔驚くべし、その先頭に立つものは白髪の老婆のこともあり、若き娘のこともあった。吾等の十三耗機銃はその突撃集団を串ざしにした。米英相手の戦いの最中はひたすら敵機撃墜のみに向けられた機銃は、独立を望む人々をかく殺戮せざるを得なかったのである。〕

あるとき、〔我々を襲つて殺された〕一人の若いアチェ人の死体の処理にあたつて、私は〔彼の〕父親を呼んだところ、その父親は息子の死体の冷たい唇に接吻をして神に祈つたが、やはり父親の顔は物狂わしように変貌して私の心を打った。

俳句 灯

ともしびの消えて月ありチチロ虫…… 福留貢

ドリアン（の）匂い残して灯すぎ…… 大窪彦七

（キャンプ祭にて）

去り難き宴の庭のあかりかな…… 福留貢

雪洞のなまめく茶屋やキャンプ祭…… 木下睦雄

とうとうと灯火に響く太鼓かな…… 同右

抑留の解けん日近く灯に集う…… 同右

また、私の部下の（止むを得ざる自衛的）銃弾に傷ついたアチエ人は、うたれた腕の傷の手当てに（自分に）怪我をさせた日本軍の病舎に治療を受けに來た。治療が済むと必ず「有難う」（テレマカシー）と頭を下げ、バナナの一房を必ず置いて立ち去った。

そういった純真な民族と相戦わねばならぬことは耐え難いことであつた。といつて——武器を渡す（ことは我々の死を意味するために渡す）わけにはいかず、（武器を）掠奪に來た場合、対手を打ち殺さねばこちらが無慘に斬り殺されるのである。

多数の暴徒に襲われて我々にも相当の被害を受けた。

私の同期の某中尉、それから優しい主計長の某少佐など、蛮刀の下に惨殺された。

昭和二十年（一九四五年）九月以降十二月まで（アチエ州強行脱出、マレーに向かうまで）〔南方諸地域に先んじてサバン基地を英艦隊に引渡し、スマトラ北端にて生きるがための農耕にあけくれ、同年十二月、数万のインドネシア独立軍の囲みを強行突破、マレーにいた海軍仲間の中に迎え入れられるまで〕丸四ヶ月の間、吾々はこのような環境（のもとに置かれていた。同時期のマレー・シンガポール方面の海軍部隊の状況）については私のよく知るところではない。ただ（彼らの）昭南上陸後、突如三〇時間以内に全シンガポール方面の日本軍はジョホール州に移転すべしの命令を受け、（その時間内に）移動のできなかった者達は当日以降、英軍の直接監督の下に、おもゆとかんぱんだけが与えられ、シンガポールの繁華街を走らされ、強制重労働を科せられて呻吟したそうである。

残余の部隊は海軍ではバトパハ（日本の南方産業発生地）、陸軍ではレンガムに集結して、木を倒し、草を茹り、粥をすすりながら兵舎建設作業に奔走した。またこの間、レンパン島へ移住開拓を命ぜられた部隊は、前大戦に独逸「ドイツ」軍捕虜によって（開拓が）企てられ、遂に失敗した

場所だけに、悲壯な決意を胸にして旅立っていった。

我々（スマトラ海軍部隊）がバトパハに到着した二十年（一九四五）末はちょうど兵舎設営作業も完成の頃であつた。（我々の）部隊は異国で何もない正月を迎え、それでもほっと一息つこうとした瞬間、追いかけるようにして英軍より次の如き新しい命令がきた。

日本投降軍の一部の者は、（現地の）食糧事情の窮迫と戦後復旧事業のために船待ちまで特定作業に従事すべしという命令であつた。

時の（英軍）参謀長ブローニング中将との会見に際して、〔南方総軍〕沼田参謀長は、日本作業隊員の労苦を想い、作業隊員の優先内還を要請し、ブローニング中将は（作業隊は）四ヶ月―六ヶ月にて交替すること、並びに（彼等の）優先内還の二原則を承認し、ここに将兵は一度は苦役の門を通過しなければ内還不能を觀念し、ただ数ヶ月後には内還という目標を一途にして、シンガポールに、セレター軍港に、また馬來半島各地に、ぞくぞく梯団を編成して苦難の道を自ら進んでいったのである、途中クルアンにおいて検問が行われ、携行物件は極端に制限された。許可されたる携行物件は次の如きものである。

毛布一枚、軍帽一、略帽一、軍衣一着、襦袢二枚
シャツ一枚、靴一足、靴下二足、手拭二枚、褌三枚
石鹼一個、万年筆一、時計一

作業隊員はローリー（貨物自動車）で送られた。そうして途中英兵や印度兵の不法点検を受けた。彼等は（僅かな携行物件の中から）時計や万年筆やめぼしいものを取り上げた。兵隊達は既に物に対する魅力を感じていなかったけれど、（その理不尽に）激しい憤りを感じたのである。

クルアン検問所では物に対する検問のみでなく戦犯に対する訊問が行われた。キャンプは白と灰色の二つに分けられ、灰色の天幕に送られ

たものは不帰の人としてチャンギーの牢獄に引かれて行った。

かくして終戦直後より労役に服している者を含めて十万四千五百名の者が、東南アジア全域にわたり地獄の生活に追いやられたのである。当時の在南〔日本人〕総数は七十万三千百六十名を算していた。

一一 エンダウ開拓規模の考察

南部馬來の中央山系よりシャム湾に流れ込むエンダウ河流域一帯の地勢は、比較的低地の丘陵と湿地帯によつて形成されている。

一九三六年、人跡未踏のエンダウ河下流十一哩の密林地（ランカップ）に、飯塚と呼ばれる日本人の経営になる鉄鉱会社が小規模な採鉱事業を始めた。この地域から採掘される鉱石は極めて純度高い鉄を含有しており、そのため歳月の流れるにつれて飯塚ランカップの鉱業は次第に拡大され、この地域の経済的前途が注目されるに至った。

もともとこの一帯は雨量に恵まれ、植物資源地帯として喧伝されていたのであるが、今また鉱物資源を抱えていることを知った英国植民地政府は、エンダウ河が経済地理的に将来シンガポールのヒンタラランドとしての動脈の役割を果すであろうと着想した。

更にこの広大な地勢が低地と湿地帯によつて形成されているということは、農業立地の条件を具備しているように考えられたのである。従来マレー半島の住民達の主食である米はケダー、ケラントン、マラッカにおいて全マライ人口五三九万の中、僅か三七%の需要を満たすに過ぎず、国際不安の地勢はマレー半島自体の主食自給を強く要請していた。かくて「英国は」一九三九年、鉱林農の総合経済的見地のもとに、全エンダウ河畔の開拓計画に乗り出したのである。まずこの具体案は農業

立地の立場からとなえられ、スマトラにおける如く会社による個人経営法を採用し、それが先向〔先陣〕としてジョホール州政庁による測量がエンダウ河口二哩の地点を中心として行われた。

当時この付近（アイルタワ）では一九三八年に入殖してきた若干のマレー人達の手で約二十エーカーの水田が耕作され、湿地帯の水田化が成功する一つの資料を提供してくれた。

殖民政府は一九三九年後半期には三百名の苦力による水利工事に着手し、それと併行して試験的植付けを行ったところ、予期以上の成果を収めた。これに力を得て四十年、四十一年度と二度にわたって更に規模を高めて試験植付けを行ったが、水量多く失敗に帰した。一九三九年度の成功は同年の天候が一九三六年以来の旱魃に原因していたためである。ここは大規模な水利工事の完成なくしては水田化が不可能であることがわかった。そのため一九四一年、これが解決法としてダム建造にとりかかったが、堤防の沈下により竣工に至らず、一九四三年再び前計画に基づき着手したが、同様の沈下のため再度失敗した。そうして戦雲ようやく急を告げる頃、開拓事業は一時放棄するの止むなきに至ったのである。

大東亜戦争勃発し、全馬來は日本軍の手に帰したが、日本政府も戦争による輸送力の枯渇のため、英国以上に食糧問題に困却した。

マレー主食自給態勢の一翼としてエンダウ開拓事業が手がけられたのは当然である。

日本政府によつて計画されたエンダウ開拓事業はパダンエンダウ（アイルタワを含む地帯）を中心として七万エーカーの規模であり、この開拓計画には、また多分に政治的意味が含まれていたように考えられる。

それはシンガポールの華僑に対する政治的弾圧の巧妙な一手段であった。

シンガポールの華僑の経済的勢力は圧倒的であり、戦前、戦後をとわず、殖民政府に超然たる感があった。そうして経済を独占する華僑の配下である大ボス、小ボスの暗躍は占領下日本軍の悩みの種であった。

かくて無頼の徒を含むいわゆる不良分子がパダンエンダウに強制移住せしめられたのである。新昭南と呼ばれるこの計画都市の名称そのものによっても、当時の政治性を十分察知できるのである。

さて、この開拓都市の名称は日本人シノザキ某によって名付けられた。彼は日本国政府よりパダンエンダウにおける一切の権限を委任せられ、この地帯は解放地区として、その独立行政権を持ち、彼は新昭南建設に辣腕を振った。

移民者の数は一万四千の多きに達し、これらの労働力によって本格的な水利工事、密林伐採等が開始されたのである。

当時の人口とその人々の前身よりして、おそらく労働力は八千名を超えていたはずである。新興都市新昭南は戦争インフレの波に乗り、表面は活況を呈し、映画館、料理店、旅館なども軒を並べ、学校、病院など公共施設もシノザキ氏により注意深く設立されていた。

その殷賑振りはエンダウの街をはるかに凌ぐものがあつたそうである。思想は無頼の徒の集まりであり、共産思想が横溢していたが、これまたシノザキ氏の大ボス、小ボスの巧みな運用により、移民者は日本政府に対して協調的態度であつた。

今もなお同氏の徳を慕うものが多い。

しかしこの開拓事業はマラリヤその他不明の湿地病等のために多数の犠牲者を出し、開拓事業がようやく本格的になり始めた頃、労働者の開拓意欲が著しく衰え、労働力は急激に低下していった。

そうして終戦直前には死の新昭南(シヨナンバル)の名が冠されるに至つたのである。

この間、一九四五年第三回ダム工事が英国政府と同様の方式で行われたが、堤防の沈下により三度失敗に帰した。

終戦後一時開拓事業は放棄せられ、移民者の多くはシンガポールに帰り、激しい貧困のため帰郷不可能の人々約一千名の者が取り残され、人口の急激な減少によって購買力を失った商人達は、なす所を知らず自家農耕に辛うじて生活する状況であつた。

一九四五年、英国政府は戦争による食糧不足に対処するため、更に戦争前の諸計画の実現に乗り出した。即ち鉱林農の関連においてエンダウ河畔四万五千エーカーにわたるエンダウ開拓総合計画である。

この計画は図に示す如く新昭南を基点とするエンダウ河口一万エーカー、鉱業区ランカット一万五千エーカー、メルシン一万エーカー、カハン一万エーカーの開拓規模であり、その第一期計画としてエンダウ河畔一万エーカーが選定された。

そうして最も困難なる第一期開拓事業は、死の新昭南の名を拭い去るため日本抑留作業隊の労働力を充当するに決定した。

この計画の一環として、一九四六年四月以降、我々は新昭南に移住せしめられたのである。

今年には既に日本政府時代に大木の伐り倒された大部の丘陵、並びに湿地帯(パダンエンダウ)の開墾を終り、一九四七年度(本年度)計画としては、この地帯を完全に入殖可能地域とするにあり。一九四六年度上半期以降日本作業隊によって植付けられた八万エーカーの水田は大成を収めたが、これは雨期の例年がない小雨のためであり、ダム工事の完成はなお開拓事業成功の鍵である。

一九四六年、第四回目のダム工事が日本作業隊の手によって着手されたが、これまた失敗に終つた。将来パダンエンダウの堤防のみならずこれが根本解決としてカハン湿地帯の大堤防が計画されており、また



[093]

パダンエンダウよりエンダウ河に沿ってランカップ、カハンに通ずる道路が建設され、既設政府道路と結び、エンダウ河流域地域を循環する経済国道が完成されるであらう。

そうして遠い将来はメルシン、パダンエンダウ、ランカップ、それに日本語名そのままの昭南バルとこの四都市はエンダウ沃野の四つの星として輝かしい未来を持つかもしれない。

さて、ラッフルズが当地に足跡を記してより百有余年、一貫して住民の一種族化を恐れ、常に新民族を注入し、現住民の発言権の弱化をはかり、あるいは直接現住民との接触をさけ、貧民政策をとってきた英国の殖民政策は、日本軍政部の戦争中の指導により搾取主義として現住民の前にさらけ出され、今や現住民は旧態依然たる政府の政策に対立し、英国の政治性は極端に困難の度を増しつつある。

今現住民の間に怨嗟の的となっているものは一九四一年法令と言われるものである。戦争直前、一九四一年法令として主食の配給管理、輸入の統制、所得税の取立に関するこの法令は、戦争勃発により実施不可能となったが、戦争終息と同時に現住民の反感をよそに強行実施されている。

(二)一九四一年度法令

米、配給率

日本時代……………一八斤

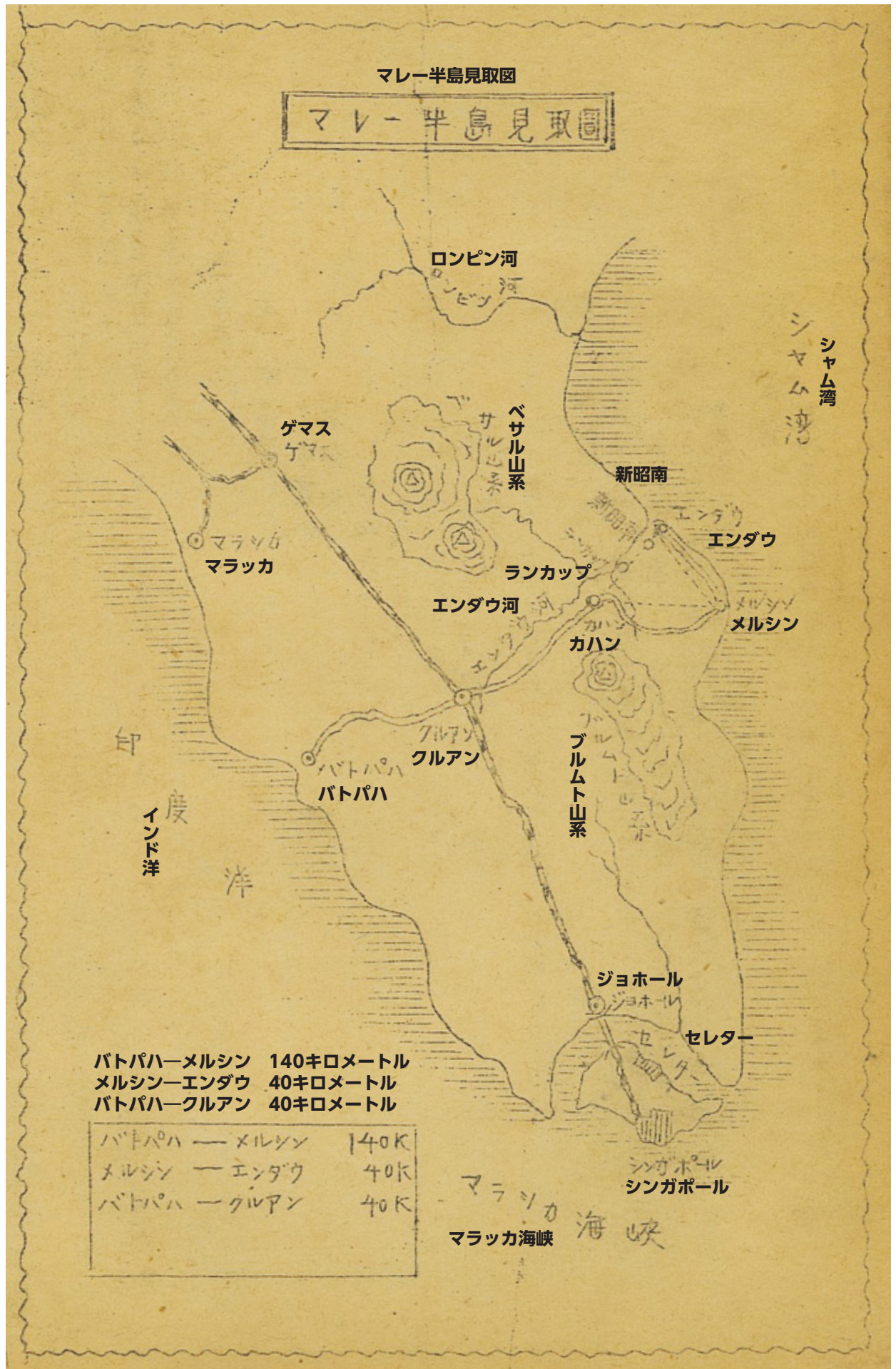
終戦後

一九四六年まで……………八斤

以後九月まで……………五斤

十二月まで……………三斤

一九四七年一月まで……六斤



二月……八斤

ただし米の代わりに少量の麥粉を配給する

衣料配給

日本時代は物資窮乏のため意の如くならなかったけれども、現住民は戦時中のこととてあきらめ、終戦後非常に英政府に對し期待を持っていたにも拘らず昨年十一月に至るまで全く配給なく、同月より若干の配給を見たのみである。

輸入統制

現住民の猛烈な反對のため政府においても緩和策をとり、本年一月頃だいたい廃止状態に入った。

所得税

政府をして最も強硬政策をとり、現住民の反對をもちえりみず本年一月より収税を執行。税率の一部例左の如し。

土地一エーカーに付き……年一円

家屋一軒……年三元

雄犬……年一円

雌犬……年五円

豚、牛、山羊屠殺の際課税される

間接税はシンガポール、マラッカ、プロビンス・ウエルス（ペナンを含む）を除き、全ての商品に課せられ、その主なものは次の如くである。

衣料は他州より搬入の際……二〇%

マツチ……一〇〇%

レコード……一五〇%

タバコ……一五%

等の課税をせられる。

(二) 現物価

タバコ ネビーカット一箱……〇・二五円

ラフリシダー一箱……〇・二〇円

パン一斤……〇・四五円

米一斤……〇・二五円

(ただし闇値……一・二〇円)

(三) 現住民労働者日給(於エンタウ)……一・三〇

(シンガポール方面は労働者のストライキにより三・〇〇)

エンタウ開拓地区においても一九四一年法令の反對運動は猛烈をきわめ、これに對して当地下部組織として共産黨員が音頭をとる三民族団結による反對運動を展開しつつある。マレー共産党【マラヤ共産党】の綱領は、

一、マレー民族による完全独立乃至自治権の確立

一、マレー民主化

一、英軍の撤退

以上三項目であり、これを闘争目標として地下活動が活発化しているわけである。

マレー共産党は本来第三インターに属するものであるが、インドネシア独立に刺激され、彼等は今やあらゆる点に独立国家を形成することを前提として動いている。

彼等に言わすれば、

「現在英国による民主自治の実現ができて、将来に對する不安はこの問題を等閑に附する限り、依然として立ち去らない」からである。

事実彼等の生活はおびただしく苦痛である。新昭南の人口約一千、男

が女に比べて圧倒的に多いという事実は、開拓移民としての特殊性によることもあるが、また経済事情の窮迫を如実に示しているものともいえよう。

現住民の反英熱は高い……。

この方面からの観察よりすれば、エンダウ開拓の労働そのものの苦痛性とそれによる賃金問題をめぐって、この大規模な開拓事業の前途を強く拒むのではなからうか。

三、吾等の苦闘史

ブルムト、ブサルの両山系の狭間を東西を貫く政府道路が東海岸にぶつかるところにメルシンの町がある。その町から沿岸伝いに約二〇哩北上、途中密林地帯をくぐり峠を越え、谷を下り進むうちに、丘の頂より突如俯瞰一下、広漠たる原野が展開される。

道路の右には丘陵をかかえ、左には広茫の平地が地平線の彼方の縁まで拡がり、面積の観念は彼方の空に消えていくように広い。すっきり枯れきった無数の巨木〔の残骸〕が空の碧と大地の青と「の間」にくっきり浮き出て、渺々たる風景は人の心を淋しくとらえ、林立する枯木の間に点在する廃家が、まるでお伽の国の魔女でもすんでいそうな不気味な幻惑さで黙りこんでいる。

広野の中ほどまで進むと左に折れる道路があり、そのT字路の入口に朽ちかけたアーチが忘れられたようにポツンと建っている。

新昭南……。

まだはつきりと読みとれるアーチの文字は、かつてこの地に相当建設的な意欲に燃えた開墾が行われたであろうことを物語っている。

果たして注意深く道路を見ると、アーチの小脇に「団結路」と書かれた標示板が立てかけられてある。団結路は新昭南の目貫の通りであったのか、ものの五分も歩けば支那人のバラック家屋が両側に立ち並び、豚の首が無雑作に並べてある。

肉屋らしい屋台……英国製のタバコがさも大事そうにキチンと並べてある雑貨店……など、ところどころ申訳のように店が開かれてある。残りの建物は死の街を思わせるように固く戸を閉じ、人通りもない。

この街がきれいになるところに、およそ人の住めそうもない小屋がある。かつて苦力がこの土地の水利工事のため流れ込み、この小屋で乏しい営みをしていたそうだが、今は雑草で作られた屋根は吹き飛び、壁板も床板もはぎとられ、ただ丸太の骨組が小屋の形態を止めているに過ぎない。

昭和二十一年四月中旬、千名の海軍作業隊が、半数はラビスの街の雑役を終えて、他の半数は新しい〔編成の〕作業隊として、バトパハ・ベースキャンプからこの骨組みの小屋〔の群〕の中にたたき込まれた。

かくて我々の苦闘史の扉が哀しく開かれたのである。〔到着〕当日は泥の上にゴロリと横になり、露深い一夜を一枚の毛布にくるまりながら南十字星を夜もすがら眺めたことであつた。未明の空を破るジープの音に起き上がった吾々の前には、籐杖を小わきに抱えた英国人の冷やかな眼ざしがあつた。

スコッチに生まれたフィッツ・ゼラルド——彼の前歴は泰緬鉄道〔建設〕に使役された戦時俘虜であつた。今やジョホール州政府D. I. D. (灌漑排水局)エンダウ支配人としてJ. S. P. を思いのままに使駆できる地位にある。

その日から息つく間もなく、吾々は二千名を収容できるJ. S. P. の兵舎設営作業にとりかからねばならなかった。



赤い道(ボーキサイト) [070]

T地区(仮キャンプ)と名付けられたこの地点を中心として奥地へ一哩のAキャンプ、更に二哩奥地のBキャンプ、Bキャンプを越えて三哩の密林湿地帯のCキャンプ、Tキャンプの湿地帯を横断して二哩の地点のDキャンプ。

この五つの地区に千名のものがばらまかれ、五日間の期限つきで設営が急がれた。しかし設営材料として板一枚、アタップ屋根【椰子の葉で葺いた屋根】一枚与えられたわけではない。吾々は廃屋の破れアタップや木皮を運んでは、夕暮迫る頃、Tキャンプの泥の寝間に空腹と疲労で感覚を失った足を引きつったのである。キャンプの入口には巨木の切株がドッカと座り、墨痕あざやかに「人々知涼茶」と書かれてあった。

あるいは数年前この付近に楽しい支那人の茶房があったのであろうか。哀れな吾々の目には「何か現世のことと思われぬ」沁みるような文字であった。また、猛獣の棲息するこの密林地帯では、獣の足跡が人家近くまではつきりとついており、夜ともなれば虎の遠吠がまるで狐の鳴き声のように無気味に聞えてくる。

吾々は猛獣よけの焚火をたきながら、それでも泥のように眠ったのである。

設営作業がようやく半ばに達した頃、五日の期限はきれて、我々の前には水利工事が待ちあぐんでいた。

フィッツの与えたこの仕事は時間制の受取(請負)制度という不可解なしろものであった。午前七時に仕事に着手して、午後五時以前には終ってはならない。その間一時間に五分の休憩と中食時一時間を除いた正味八時間は鍬を振り続けねばならない。もし与えられた仕事の量が五時までに終らぬとすればサボタージュと見なし、当然労働時間は延長さるべしというのが彼の持論であった。

この頃スマトラよりマライへ集結を始めた陸軍部隊は、バトパハに

上陸するや直ちにクルアンまで二十六哩の道程を歩みつづけていた。

彼等にもエンダウ開拓作業〔参加〕の命令が達せられたのである。

だが四万五千エーカーに上る開懇事業に内還待期の日本投降軍の労働力がどれほど役の足しになるか、そう考えたとき、陸軍はこの膨大な開拓計画が例によって英軍の単なる思いつきに過ぎず、恐らく行軍途中に取り止めとなるであろうと、一日五哩以下の速力で前進するつもりであった。

だがクルアンに到着するや英軍はローリーの全力を注いで一千五百の陸軍作業隊員をエンダウに送り、六月上旬には流れ込んだ陸軍と合して二千五百の部隊は五つのキャンプに分れて本格的開拓作業が始められた。

当時支配人としてフィッツ・ゼラルドの他に農耕支配人としてコックス少佐が新しく着任していた。

彼はフィッツに更に輪をかけた鼻息の荒い男であった。

事実気性を表すと言われる彼の鼻息は、五米離れていても驚鼻からとび出した長い鼻毛を貫いてなお聞き取れる底のものであった。

彼も泰緬鉄道の戦闘員捕虜として三年八ヶ月の使役の体験を持っていた。

コックス少佐は着任早々、「日本軍の」各指揮官を参集し、彼の泰緬鉄道の体験を語り、明日より第一級の重労働が課せられるであろうと宣告した。

フィッツは吾々と馴れるに従って、気嫌のよいときには口笛などを吹く、いわゆる殖民ゴロであり、一度は吾々の訴えに耳をかたむけることもあったが、コックス少佐の前には吾々は人間ではなかった。

彼は能率よりも軍規を常に叫んだ。

このことは、彼にとつては作業の成果は問題ではなく、吾々に

俳句 叢林

叢林や下露白く朝の道…………… 斉藤茂雄

叢林に野鳩の声や午下り…………… 林忠孝

叢林に闇シンシンと這いよれる…………… 坂本俊夫

叢林の枯木は高く月冴ゆる…………… 憂子

叢林に煙一筋たそがれて…………… 坂元清巳

若葉もゆ灌木林の午しずか…………… 木下睦雄

対する苦痛を如何にして増やすべきかが問題であったことを意味している。

彼の作業は丘地帯のジャングル伐採である。

吾々は戦時中の警戒見張そのまま嚴重な警戒網を張って彼に備えた。けれどもしばしばその見張網を潜って突然現れるのである。「空襲警報」の合言葉が交わされるとき既におそく、例の鼻息で根棒を振り上げ、あたりの兵隊達を力の限りなぐりつけた。都合の悪いことには、「空襲警報」という合言葉は三年半の捕虜生活の間に彼の頭には既に自国語ほどにこびりついていたらしく、約半月にしてこの対応策は取り止めとなった。

さて、そのようにコックスに追いまくられているときには兵隊達は密林の中に逃れ、懸命に斧やパランを振って灌木を切り倒した。

彼が来たときの作業は一時間に〔彼の姿がないときの作業量の〕優に五、六時間分の量を凌ぐほどであった。その代わり彼が帰ると、ぐったりとなつた五体をトゲの多い「草の上であろうと」泥の上に「であろうと」横たえ



苗取り作業 [077]



草刈り [075]

て前後不覚で眠るのである。

陸軍の到着からしばらくした六月中旬、海軍部隊の五百名は未だ住居の暖まらぬうちにペランゲイの新しい開墾作業のためにエンダウの地を去っていった。

そのとき、コックス少佐はベンドンに向って新任務のために立去った。これに代つて S. T. F. P. (短期食糧生産局) 支配人 R. キッチナーが着任した。

彼はいわゆる英国式紳士であつた。表面は比較的吾々の主張を理解し、労働者に対する正当な仕事の量を与えた。

しかし吾々に与えられた給与と労働との関係は依然として著しい不均衡の状態にあつた。吾々がこの問題を取り上げるとき、彼もまた「自己の日本軍による」抑留時代の話を持ち出すのである。

「我々は三年八ヶ月の間、最小限十時間の労働を強要された。給与の状況も現在と相違はなかった。しかし吾々は何一つ不平を言わず働いたのである……」と。残念なことには、彼は仕事に勤勉な男であつた。五十八才と言われる年齢に似ず、すっかり禿げ上つた頭に汗をビッシュリかきながら、「我々が不馴れな」二人引きの鋸の引き方など熱心に教えた。キッチナーは我々をなぐりつけて作業能率を高めんとするような下手な使い方はしなかつた。その代わり仕事の不熱心であると感じたときには、この頃ようやく与えられるようになった一週一日の休日を巧みに取り上げた。

長い時は一ヶ月にわたって無休の日が続いたことがあつた。これに對して吾々は次の如き抗議文を彼のもとに送つたことがある。

(一) 貴殿は「日本軍の」一指揮官に對し、食糧増産のためには休務をも顧みることなく作業を続行すべし、休日の許与に關しては当方に

おいて決定すると教示さる。貴下の命令には絶対服従すべきものなるが、以下述ぶる軍規維持と將兵の心情を汲みとられんことを希望するものなり。

(二) 部隊指揮官以下全員の気持は、現在の任務を命ぜられたる以上、貴方の満足せられる程度にこれを遂行し、任を解かるれば互いに感謝と別れを惜しむが如き人類の麗しさを見せたいと念願するものなり。

(三) 貴殿が御承知の通り、吾々の戦友の大部は日本に帰還し、父母、妻子とともに起居し、平和の生活をなしあり、戦争終了の今日(いまだ抑留下にある)作業隊員の心情御賢察ありたし。貴殿がもし戦争中日本軍が使役せし連合軍俘虏または抑留者に對し取扱いを云々せらるるとせば、右は既に人道上許すべからずとして戦争犯罪者として処置せられあり。吾人は平和の今日、戦時俘虏の觀念を有せず。自由到来、人類平和なりと信ず。しかして現在の作業は世界の食糧飢餓(の解決)に貢献しあるものなり。

(四) 軍隊として現在の如く労務に服する限り、厳正なる軍規の必要なるは貴殿のつとに熟知せらるるところなるも、前述の如き戦友の大部が既に「帰国して」自由の生活に入りたる今日、残留者の軍規維持は難事なり。殊に休日をなからしめらるるは希望を失い、加うるに体力低下し、威令行われず、作業力に影響すること大なるものあり。

(五) 以上の理由と、日本側司令部においても一週一日の休日は貴軍に承認せられあるをもって、当作業隊においても定期的休務日を決定せられ、將兵をして明朗にして澁刺たる意気を養わしめ、作業に従事せしめられんことを希望するものなり。

以上。

これに対してキッチナーは次の如き返事をよせた。

エンダウキャン普投降日本軍

R・キッチナー

休日と軍規維持の件

本日八日付貴方の上記件名の書翰に関し、同書中詳細に述べられたる大部分の事項については全く賛同の意を表し、かつ軍規維持に関する貴官の気持に同意するものなり。だが、観察するところによれば多くの向上を要すべき点あり、同書翰の諸問題につき、各項ごとに筆を進めん。

(一)秩序と軍規維持の困難性についてはよくこれを認む。また現在の日本軍は降伏以前の日本軍とは異なる点も充分認む。無理もなきことなり。

しかしながら農耕部隊は一般的に希望の欠如は認められず。否、かえって兵隊は呑気で楽しく丈夫そうである。余の見解では投降以後、彼等の受けた好遇のため、戦後の必須の要求に徹底せしめざるべからず。

(二)作業は正しく好意を以て行われたき貴意を承知す。今日までのところ、余はこの希望についての一部の具体的形跡を見たり。しばしば余は働いているべき時間に多くの者が座っているのを認めたり。

(三)余の見解によれば、日本軍が不平を言うことなく当地に留らねばならぬ理由は、日本軍が幾百万の極東の人口に飢餓と失望と病気を、幾百千「万」の無辜の民に死をもたらした誤ちを復旧に努めるためなりと思考す。しかしてこの信条は彼等が故国に帰りたる秋、新日本建設をなすに必要なすべての理想と理念とを与え得べきなり。



エンダウ[108]

(四)働く者にとり一週一日の休業は最も立派にしてかつ必要なるものたるに賛成す。ただし、日本軍の占領により食糧をはぎとられたる地域において食物が充分ならざることは不思議にあらず。現在の状況において本事項が充足される最良の方法は、食糧事情が好転するまでよく熱心に働くことなり。このことに関し司令部が余と同意見なること、見るはよろこばしきことなり。余はここに跨踏なく申すべし。

「作業員の一般の行動に進歩を認めうるときには休日を与うるべし」と。なお、右に述べたる如き進歩が認められるまでは作業は現状のままとすべし。

エンダウ農耕支配人

R・キッチナー

炎天のもとにジャングル伐採、清掃、焼却の作業が続けられていった。焼却作業の焰は吾々の恨みの焰でもあるかのように深夜の闇空に炎々として燃え上っていた。

一方フィッツの排水溝作業は依然として続けられていた。彼に言わすれば、「数ヶ月来同様な作業を行ってきたお前達は、現在ではこの仕事に熟練したはずである。従って現在では、かつて与えられた量以上の仕事を与えらるべきは当然である」と言うのである。

吾々はこれに対してまた、蠟螂の斧に似たものではあったが、精一杯の抗議をした。彼からは次の如き回答があったのみで、一笑のもとに捨て去られたのである。

「海軍部隊の不平文書に接し、余は貴官の申込の意図がまことに愚かしいものであることを知る。それ故に説明を要す。」

(一) 貴官並びに貴官の兵士達は仕事のために当地に送られたものなり。

貴官のキャンプは休業(ホリデー)キャンプにあらず。余は貴官を含め日本側がもたらした現在の食糧飢餓を緩和するために困難な作業を強いるのである。

食糧の逼迫はマレーのみならずインド、日本、欧州においてもまた然り。今期に食糧が増産せられなければ今年中に全世界にわたって数百万の人口が餓死するであろうと言われている。

貴官並びに貴官の兵士達は現在のこの重要な仕事にたずさわっている大きな組織の一つである。エンダウでは吾々のかの呪うべき泰緬鐵道の生活と比べると比較的安易に生活している。良い食物を食べ、立派な家に住み、良い服を着て、見た目にはあらゆる点よりして幸福そうである。

(二) 貴官はD・I・Dの仕事を開始したとき一日八時間制で働いた。貴官は勤勉な一日を労働するとあえて言ったが、その勤勉さは明らかに日本人の真の姿ではない。私はこれまでなされた仕事を計算したが、「貴官等は」働いていなかったということが明らかにされたのである。余は八時間制労働におけるジャワ人、支那人、日本投降軍によってなされた仕事を次の表によって比較してみる。

族名 面積 立米	支那人	ジャワ人	日本人
	3.01	2.38	1.00

貴官は何故余が受取量をその熟練に応じて増さねばならぬかを理解するであろう。またそれを強要するものである。もしも貴官がそれだけの仕事をするために十二時間を要する如き方法を選ばなければ何等余にとって不都合はない。」

右の手紙は彼の性質を示す良い例である。現地人は吾々の仕事の量に驚嘆して、「我々は恐らく彼等の五倍は働いているであろうと言っていた。

彼の示す統計は明らかに虚偽であり、その虚偽を文書に示して強要するところに彼の無神経と吾々の悲劇がある。一見この文書は正当のようである。常食を食べ、一日一立方メートルの土塊を掘り上げることは、内地の労働者の労働量からすれば適当な仕事である。だが吾々の粥腹に与えられたこの仕事の量は、この文書の上に数字的に示されたような生やさしいものでない。

作業は湿地の堀割りであり、まず掘るにつれて水量のかさが掘り上げられた土塊と同量に流れ込むのである。そのため土塊で区画して、クリークの水をブリキ缶で外に流しながら掘り上げるのである。しかも掘り上げた土は堤防として、自転車が自由に通行できるように平たくなさなければならぬ。堤防を築くために土塊を掘り上げると同量の労働力が必要とされた。次にできあがった堤防とクリークには、崩れ落ちないように草を植えつけなければならない。遠方よりモッコで運ぶために、更に同量の労働力が必要であった。

S. T. F. P. の楽でない時間制労働が五時に終わると、それ等の人々は直ちに困難を分担するために D. I. D. の応援に出掛けた。

それは胸のつまるような清い友情の上に行われた。早朝七時より夕刻八時に及ぶ重労働は、本文集の随筆「泥の足あと」に、「日がとつぷり暮れてもできあがらず、応援に来てくれた隊の人達と一緒に戦争のようなさわざをして八時頃にどうやら曲りなりに掘り上げ……」と語られているように、兵隊の精力を消耗し果てた感があった。

あるとき、当のフィッツがクルアンの政庁に出張中、吾々は彼の助手であるハーフカス【混血者】のスロットに対し、一方的に受取制度を廃止



かいばり [009]

し、その頃英側で取り決められた日本人雇傭規定に基づく八時間労働制を主張し強引に実施した。

ところがフィッツがエンダウに帰るやその話を聞き、激昂して直ちにキャンプに駆けつけた。彼は吾々の兵員室(デッキ)に駆け上るや、杖を持ってあたりの兵隊達をなぐりつけていた。私は急を聞いて彼に応接したところ、彼は私を睨みつけながら「指揮官はいるか」と叫んだ。私は「今水浴中である」と告げるや、「それではお前に用がある」と言った。「何用であるか」と尋ねると、「用とはこれだ」と叫びながら、杖をもって私をなぐりつけた。私はじっと痛みを胸にかみしめ、心の中で「忘れぬぞ、忘れぬぞ」と号泣した。

煙草を吸っていて彼になぐりつけられた者は少なくない。彼に言わせれば「捕虜に煙草はぜいたくである」のである。

一方、陸軍では彼の監督のもとで密林奥地のダム工事に精力を消耗していた。このダム工事の状況については、この工事に従事した陸軍の某君がその手記の中でこう語っている。

「……エンダウ平野の給水源たるべきこのダム建設工事は、一九四一年英国の手によつて着手され、莫大な費用と貴重な人命の犠牲を呑み、しかも兩度失敗後、日本軍の手によつて改めて工事が施されたが、これまた失敗に終わった。いずれも堤防沈下によるものであった。原因が奈辺にあるか技術的なことはわからないが、この運命のダムに四度挑むべく、英軍の手によつてわが作業隊は工事を開始したのである。長さ一六〇米、高さ九米、底幅二四米、上幅三米の堤防は短時日の間に完成することを要求された。定量の糧食で、ともすればふらつきそうになる。空腹は茶で満した。三人で突く大タコは英人技師のステッキによつて二名に減じられた。誰もがやせて真黒に陽灼けして目ばかり光らせていた。(中略)

掲示板に貼出される進行記録を見ては互に肩をたたき合い、振う十字鍬も軽くなった。完成近きある日の朝、堤防中央辺にいた一団の兵の中から異様な叫びが上った。一糎幅ほどの亀裂が堤防を横断しているのを発見したのだ。無気味なこの一筋の亀裂は隊員全般に暗いかげを投げ、無言のどよめきとなつて拡がっていった。そうして不安の午後、俄然一糎の亀裂は二糎になった。二糎になるとあとは早かった。急激に三糎になり、あれよという間に五糎、六糎に拡大した。無言のどよめきは次第に悲痛な歎声に変っていった。しかも人間の力を超越した自然の力は堤防の両側に土を押し出し、押し出す力は巨木を倒して人々を嘲る如く、徐々に悠然と進んで行った。

失望と、僅かに残された希望との複雑な感情の中に、南国の日は常と変らず赤々と燃え樹海の彼方に沈み、不安の夜は眠れぬままに立木の倒れる音におののきつつ更けていった……。かくして四度のダム工事はまたも失敗に帰したのである。」

D. I. D. の工事は一年度の予算を概ね費やして九月二十日に終止符を打った。聞くところによれば、助手のスロットの測量の誤算から喰い込んだ予算を取り戻すために強いられた工事だったとのことである。助手スロットの誤算のために吾々はどのように苦しい生活を課せられたことか、恩讐深いD. I. D. 作業中止の報に吾々は歓喜の涙にむせんだのであった。

丘作業はドンドン進んで行った。

灌木地帯は既にラギやタピオカの芽が青く吹き出て、丘陵がいくつも明瞭なカーブを示して昼々と彼方の林縁に連なっていた。

この間、(バトバハ等の)ベースキャンプにある者達の内地還送が大量に行われ始めた。作業隊員は片唾を飲んでその成行きを見たのである。やがて我々の番がまわってくるであろうことを固く信じ、かつての作



内還ニュースを読む[148]

業隊員優先内還の約束が反古となりつつある今も、この次には吾々であると、ただそれを唯一の希望に激しい作業の日々を過した。だがこれらの淡い期待は裏切られた。

五月三十一日付日本将兵残置の命は発せられ、吾々作業隊十万四千五百名は、一九四七年春以降までは延期せられざるべしという条件のもとに労務に従事することに決定された。隊員は失意に暮れながらも、本年いっぱい残留を何とか泳ぎ抜こうとけんめいに努力を続けた。ところが更に八月三日、作業隊残置に関する左の驚くべき文書が発せられたのである。

日本軍軍規維持に関する連合軍最高司令官命令(八月三日)

(一) 投降日本人の内地還送に関連し、事態は新段階に到達せり。

(二) かつて東南アジア地区には八十万の投降日本人ありたり。当初これが内還に三年乃至五年を要するものと予測せられたるも、連合軍は一九四五年十二月以来六十万以上の内地還送に成功せり。

(三) 東南アジア地区の秩序回復は単に日本人の内地還送のみならず、また英国その他の領土における復旧事業も含むものなり。

(四) 「日本軍による」連合国領土の侵略の結果、各国の経済は破壊され、日本軍の占領の結果、数万に上る各民族、一般労務者は、あるいは死亡、あるいは負傷せり。十五万の一般人は彼等の家庭より泰緬鉄道労務に移動され、その中七万は死亡せり。その結果としてこれらの国々は労働力の不足に悩みつあり。

(五) よって連合軍最高司令官は、日本軍の占領せる領土の復旧に日本人をして援助せしめることに決定、東南アジアに十万四千五百名の投降日本人を残置するよう命令せり。

(六) 残置期間に関しては未だ決定を見ず。(この時既に英地上軍は英本国

に對し一九四七年末まで作業隊残置の希望を申し送っていた。)

これに對し「南方總軍」沼田中將は、「海軍」福留中將とともに、作業隊帰還の時期に關して深刻な文書を連合軍に提出した。元來大量内還の際、作業隊の交替並びに優先帰還に關し再三懇願したにも拘らず、その約束は實現せられず、「戰時中における」日本軍捕虜、離隊兵、その他軍規を亂した者等は先に帰還せしめたに對し、最も誠実に降伏業務に従事して優先帰還を約束された作業隊が最後となり、更に残留せしめられ、約束が実行せられざるに至つて、隊員の不平は覆うべくもなく、その士氣は極度に低下して自暴自棄に陥り、武力をもつて弾圧はある程度可能であろうが、順調進んできた降伏業務が最後の段階においてその魂を失ひ、悲しむべき状態に立ち至ることを恐れる。

大英帝国の偉大より見れば誠に小さき十万作業隊の内還を、今年末、おそくも明春までとせられたし、と懇願したのである。

ここに吾々は、なお相當の期間にわたり困難な作業に従事せしめらるる運命を背負わされたのであつた。明らかに「その宣言の一項に曰く、日本兵は速かにその祖国に歸し平和な生活を送らせる云々の」ポツダム宣言の違反である。この行為に對して吾々は血涙を絞り、また内地の政府に對しても、吾々のこの苦難の道が吾々だけが負うべきものでなく國家の負担において負うべきであると切齒扼腕したのである「が、頼るべき祖国政府は無きに等しく、全く無力だつた」。

「エンダウに話を戻すと」七月十五日海軍部隊によつて始められた水田作業は全部受取制度をもつて実施せられ、雨季をひかえて伐採、清掃、耕作、種まきと順を追つて進められた。受取量は双方の歩み寄りによつて決定されたが、彼と我的開きは相當に大きかつた。

吾々は勞賃を士官四ドル二〇、その他は一ドル三〇支払われるよう

になっている。その金額は全部日本政府に渡され、更に賠償金の一部として英國側に支払われるものである。

従つてキッチナーの生産局にしても、吾々勞働力を無賃で持つてゐるわけではない。彼はその金額に相當する勞働量を吾々に要求するのである。

吾々の側は絶対量の不足である「食糧の」熱量を基礎としてこれに応じようとする。ここに雇傭關係が全く矛盾の立場に置かれるのである。

さらに吾々自身としては無賃勞働者である。金錢の追求なき勞働者、そういうものが果たして存在するものであろうか。

それが J. S. P. の反面の姿なのだ。

かくのごとき關係よりして交渉は全く困難であつた。それでも吾々は新しい作業があるごとに試みられる受取量の決定作業に、巧みに作業量を考慮しながら作業を行い、受取は常に彼の言う半量にまで落したのである。

彼と吾々との中間には「以前の」D. I. D. 助手スロットと同じように印度人トーマスがいた。

彼は「南方で見かける」あらゆるインデアン「インド人」がそうであるように、いわゆる殖民地根性の男であつた。キッチナーがかつて水田の中に入つていくと慌てて彼も入り込んだのであるが、五尺に足りない彼はたちまち泥の中に腰までつかつて動けなくなつてしまつた。飼われた犬が主人のあとに何としてもついていこうとする盲目的な奴隷根性があつた。

彼の俸給が一八〇ドルから二一〇ドルに昇給したとき、彼は「キッチナーは神様のような人です」と言つた。

トーマスは小心者のキリスト教信者であつた。そこで「三〇ドルの昇給は吾々の血と汗によつて築き上げられたものだ。さぞ御機嫌よろし

からう」と応酬すると、彼は急にしょげてしまった。

さて吾々はこの苦しい生活(の秩序)を何とかして守り「元気を盛り」立てるため手を打たねばならなかった。十月十日、海軍部隊のキャンプ祭が「入殖」半週年を記念して催された。

この記念祭のために吾々は毎日の乏しい糧食の中からそのいくらかを貯えて、せめてその当日だけでも満腹したいと考えた。貯えられた糧食は、主計科員の注意深い献立により野草の葉や木の実の汁でデコレーションも美事にできあがった。

赤や青の色紙がこれまた無理算段して集められ、「焼そば券」「甘味券」「カリン糖券」などのチケットが内地の茶屋の雰囲気を出すために作られた。

一方、櫓が組み立てられ、二軒の茶屋ができあがった。茶屋は「河童茶屋」「サロップロンパン」「プルンプアン(女性?)」と名付けられ、茶屋の中には内地各地の名産のビラが効果的に貼られた。中には「故郷のあの娘にこがれ鍋」などというものもあった。

さて当日は満月の輝かしい星の夜であった。大鼓の音とともに「総員

俳句 迎春

迎春や見なれぬ形の松かざり……………高木勇

抑留の仮家に春の飾かな……………斉藤茂雄

迎春や諸も掘りなん菜も摘まん……………野村一雄

風慕う椰子の木蔭や今朝の春……………高木勇

迎春の話に灯華げり……………服部清

抑留の心に晴衣迎春(春を迎えむ)……………原善吉

櫓の下に集れ」の号令がかかり、人々は嬉々としてキャンプを離れ櫓を取り巻いた。

詩の朗読によってキャンプ祭第一部式典の幕が切つて落とされた。「点火用意」の合図で河童の扮装をした演芸部員がかがり火を持って現れ、キャンプファイヤーに次々と点火していった。キャンプファイヤーは名月に相映して神秘的な輝きを南の丘に照らしてぬらぬらと燃え上がった。詩の朗読は続く……「陸に上った河童よ、魂泳五千軒……今宵は遙か祖国に吾等が聖なる祈りを捧げようではないか……」朗読が終わり、第二部河童踊りと茶屋の開店が行われた。

指を拡げて奇態に踊る河童音頭の踊りの輪は二重、三重とひろがり、演芸部員の女形なども混つて、シンシンと夜の深まりゆくのも知らぬ感があった。茶屋でも流しなどが組まれて「苦心の結果による珍味が並べられ」、人々はここをせんとど舌鼓を打ったのであった。

文化的運動は、豊かな国民性を持つ日本人にとってはどのような環境の中にあっても絶対に必要なものである。

次に私は逆境の中に育つ文化運動について語ろう。作業隊員を除く南方六十万の内還が終り、それまで吾々の唯一の文化的慰安であった「世界時報」が廃刊となった。

「世界時報」はニュースに飢えた吾々の心理に巧みに応ずる英軍の宣伝紙ではあったけれども、一切の文化を剥奪された吾々にとって、この日本活字は大きな魅力であった。

「世界時報」の廃刊によって、何らかの方法をもって文化機構を自ら造り出す必要に迫られた吾々は、「文化部誕生」という形でこれに代った。

また、「世界時報」の廃刊は指揮官達に一つの反省を促した。即ち兵員に対する責任者自らの啓蒙運動である。

内地では復員者に対する多くの不当な非難の声が上がっているにせ

よ、祖国再建の興望を担うべき精神力と肉体とを持つものは、その圧倒的
青年層の復員軍人である。南方軍の精鋭として殿軍役を承り、最後の
責任を遂行しつつある作業隊員は当然その中核たる運命を担うべきも
のであるとの自覚は、更にこの機会に叡智を高めなければならぬとい
う結論に到達したのである。

この試みは相当困難なることであつた。しかし「作業隊員の」強烈なる
意志は遂に栄養失調と重労働のあえぎの生活を克服して文化運動の実
践となつて現れた。

七月十日文化部設置の件が隊長会議に付議せられてより、早くも同



[180]

月二十三日には演芸部及びニュース班の組織が実現したのである。部
員は激しい作業の後に演劇の練習を行い、楽器を製作し、海軍演劇班
により第一回の催しが試みられた。一方ニュース班は短歌、俳句、川柳
冠句等々の月二回の定期募集及びその発表、英誌切抜写真による時事
解説、並びに文化一般にわたる壁新聞等が、ささやかながら当直室の木
皮の壁に貼り出された。

演芸運動は各大隊の提携により新演芸場の改築となり、第一回発表
当時ランプで舞台も、発電機による立派な照明に代つて月二回の総合
演芸会にまで発展していった。演劇場建設の資料集めのために、激しい
労働を終えて部員は密林深く伐採に出かけるなど、並々ならぬことで
あつた。

およそこのような催しものを見たことのないこの付近の支那人やマ
レー人達は、月二回の演芸会には綺麗な衣裳に着飾つて見物に来ると
いう状況であつた。このため支那人の対日感情「好転」にどれだけ役立っ
たかもしれない。

ニュース班は語学教育の方面にも進出し、僅か半年の間に中学の三
年生程度の「語学力をつける」驚くべき進歩ぶりであつた。四十才に近い
英語講習員は「私の勉強は自分のためではない。子供のためにやるので
す」とたのもしいう言葉を吐き、その熱心さは素晴らしいものであつた。

十二月に入るや、内還の見通しつかず、本格的教育の必要はニュース
班の活動を高め、終に講堂が建設され、毎夕、経済、英語、法律、自然科
学、珠算、簿記等の講座が開講せられ、代数の個人指導も行われるよう
になった。

削り減らしの鉛筆と乾パンの小さな包紙でもつて苦役の後の僅かな
休み時を真摯に学問する作業隊員の姿は、聖という言葉にふさわしい
ものが感ぜられた。



十六部隊の演芸 [128]

さて、筆を作業隊生活にかえそう。何と言っても吾々の生活の全てを規制するものは苦役生活である。霧は次第に深くなり、本格的な雨期は遂に到来した。乾期では吾々の日常生活に烈しい影響を持ったのは水の不足であり、泥んこの身体を洗うべき水浴場もないといった状態で困却したが、「雨期に」泥濘膝を没する水田作業はまた形容し難い苦しさであった。

受取作業の改善に対しては執拗にまた巧妙に支配人及び助手と交渉が継続されたけれど、一度決定された受取制度の改善は思うようにならなかった。

受取の一例をあぐれば、耕作は一エーカー〔当り〕二十五名乃至十五名であり、一人平均一日一米幅の二〇〇米という膨大な面積である。

この量は正当（プロパリー）に行われねばならない。未熟な未経験な兵士達にとっては殆んど休みなしに鋤をふるってもなお太陽が沈む頃でなくては終らなかった。だんだん要領を得てくるにつれて兵隊達は概ね午後の二時頃までにこの仕事を片付けるようになったけれど、そのためには作業は殆ど休みなしで行われた。

作業員は出発前に朝食と昼食を一度に食べて仕事に出かけた。そうしてエネルギーの消耗を午前中に集中し、午後は昼食ぬきで死んだように眠りこけるか、あるいは野草取りに原野をかけずりまわるのである。そのために病人は急激に増加した。〔持参した〕地下足袋を消耗し尽くした作業隊員は跣足で作業をやらなければならない。

足の裏の傷が増えていった。過重労働によって鋤を無意識に機械的に振り上げるため、思わず自分の足先に鋤を打ち込むといった状態がつづき、外傷患者は後を絶たず、また、たちの悪い大蟻がやたらに喰いつき、毒を含んだこの蟻に刺されると身体全体がはれ上がり四十度に近い熱を起こすことがある。

また、湿地帯に囲まれるこの地はマラリヤ蚊の巣窟でもあった。かつて苦力が全滅したといわれるこの環境も、吾々の衛生的努力によって病魔の跳梁を阻止することはできたけれども、なお相当数のマラリヤ患者を発生した。

かくて作業出場人員が激減していった。そうしてこのことは吾々の悲劇をいつそう悲惨なものとする原因となったのである。

ある日、作業隊係士官チーマ大尉より作業派出人員に関する厳達があった。それは、管理人員は「総人数の」一〇%を越すべからず、また患者は五%を越えるべからず、残りの八五%以上は作業に出場せしむべしというのである。

彼の見解によれば、身体の虚弱な者は「既に」内還させ、作業隊員は健康な者ばかりで編成されているものであり、患者がこのように多いのはごまかしであり、また作業隊員の衛生に対する観念の徹底が期せられていないというのである。

直ちに英軍の軍医がエンダウに派遣せられ、聴診器もあてずに手でもって患者の胸を聴診して出勤患者であると診断し、脚気患者は足の屈伸をさせてこれは仮病であると突きとばした。

この命令は絶対に服従しなければならない。「患者五%以内」の命令に対する不平は武力をもって鎮圧さるべしという高圧的態度により、吾々は涙をのんで患者を作業場に送った。

当日より、びっこを引く者、マラリヤで色青ざめた者、悲愴な患者パーティーが一里の山道を息をぜいぜいさせながら、海軍部隊だけでも毎日三十名を越えて働きに出かけなければならなかった。

「これらの人々は」軽労働に服せしめられたしとの吾々のギリギリの歎願も、冷やかな黒人「インド人」助手によって、これらの人々も健康者と同様な賃金を支払っているのだとの理由のもとにはねつけられた。

陸軍ではこれに対処するためクルアンのベースキャンプより交替兵力が派遣されたけれども、海軍部隊ではベースキャンプ「たるバトパハ」の余剰人員がおらないために、ついに一ヶ月のねばりの後に、その命令に抗し、武装兵の来たらば来たれの最後の腹を決めたのである。

時を同じうしてタピオカ山の盗難事件が起こった。それは入殖当時植付けられたタピオカ芋がようやく実の入り始める頃より次第に抜きとられたことに端を発する。そうして正月を控えてその数は著しく増大し、正月には遂に六〇エーカーにわたるタピオカ山は禿山と化してしまった。

キッチナーは激昂して作業隊係士官チーマ大尉に面接して嚴重な取締りを要望した。チーマ大尉はもし犯人が見つければ民間「警察」に引き渡して差し支えなき旨を述べ、同時に週一回武装隊をエンダウに派遣することを約束した。

キッチナーは犯人を捕まえようとして自ら深夜タピオカ山に潜伏して機会を持った。ところがタピオカ山盗難予防のために出された作業隊の巡察隊員が既に掘り上げられて散乱している芋を整理している現場を支配人に取り押さえられてしまった。

不幸なことには、その頃は果実の稔りの時期であり、たまたま密林中で果実を拾った二人の兵隊が現地人に咎められ、その現地人をいささか傷つけて逃れた事件と関連して、その兵隊と都合三名の者が民間警察の手に渡された。

タピオカ事件の一人は指揮組織の努力により釈放されたが、果実の件の二人のものは今もなお暗い牢獄の中につながれている。

この問題は明らかに熱量をとられた人間本能の深刻な叫びである。労働と熱量との転倒は次の表に現れた数字の如く絶対的なものであった。

一人一日体内熱量消費量換算表

英軍給与	2 0 4 0乃至 2 4 0 0
山作業	3 4 5 0
水田作業	3 6 3 0
ダム工事	4 5 0 0
ドレイン工事	4 2 0 0
自隊作業	3 4 0 0

この表よりすれば、一〇〇〇―二〇〇〇カロリーの不足量は何らかの形において当然補わねばならない。そうしてなお補い足りない分は体重の減少となって明瞭に現れてきたのである。すなわち

体重測定日	平均体重	増減
バトバハ時	5 9 K	
1 0 月	5 6 K	3 K減
1 1 月	5 5 . 2 K	0 . 8 K減
1 2 月	5 4 . 3 K	0 . 9 K減
1 月	5 2 K	2 . 3 K減
合計		7 K減

という結果が生じた。

ともかく、タピオカ山と果実の事件は指揮官達を驚愕させた。民事裁判にかけられたならば、マレー地区では数ヶ月あるいは一年近くも裁判が行われないことがしばしばである。これが防止を何としてもやらねば不幸は重なるばかりである。

多くのものは本能の叫びとして、平時では許されぬ事■、当然として考えるのである。この矛盾を解決する唯一の鍵は熱量の増加である。

熱量の埋め合わせは、野草によって、あるいは僅かな衣類の一枚一枚をまるで自身の身を剥ぐ思いをして現地人と交換した食糧によって、僅かながら行われていた。

だが、今や取り換えすべき被服もなくなった。絶体絶命の関頭に立つたのである。英国政府に対して自活農園のできるまで増配を要請したが聴き入れられるものではなく、タピオカの若干を分けてくれるように願い出たが、支配人はナンセンスとして一笑に付した。

指揮官達は激しい苦悩に悩まされつつ、ただ声を高くして制裁でなく忍従を激しく問う以外に術はないのであった。このような苦境にたちいたつたとき、常に思うことは故郷の生活である。一切のトラブルを一掃する唯一のものは内還である。内還すれば一切の問題は吹きとぶであろう。

だが、内還はいつになったら始められるのであろうか。吾々は何度となく、この基本的問題について英国の老獪な遷延策にあやつられてきた。あるいは永久に祖国の土を踏むことができないのではなからうかとさえ考え、精神的苦悩の淵にたたき込まれることすらあったのである。そこで、南方総軍の数度にわたる交渉も空しく、内還に関して何らの見通しもつかぬということに業を煮やしたベースキャンプの少壮士官は、内還促進に関する強力なる地下運動を展開するために決起した。

それは中部馬來におけるデモ並びに罷業の実績に関する南部馬來の若き士官達の反省によつて生まれたものである。中部馬來では、不意をつかれた英軍は何らの強制措置に出ることなく事態を拾収した。

たまたま一週二本の煙草の配給が行われるようになり、この問題と関連して一応成功の感を抱いたのである。

さてこの〔中部馬來の〕地下機関から、南部馬來の一番大きな作業隊であるエンダウに対して工作が行われはじめた。



伸びる甘根[127]

「労働問題研究会」という文化運動の側より巧みに内還運動を呼びかけたのである。「下部大層(大衆)よりもり上がる力でもって内還運動を展開せよ。」

内還運動！ 吾々にとって何という魅力ある言葉であらうか。この言葉はまるで熱病のようにエンダウ作業隊全員に拡がるように思われた。だが問題の鍵ははるかに遠いものである。既にこの問題に関しては、直接兵力を握る現場の(我々)指揮官達によって、それこそ命がけで考えられていた。問題の究極は吾々作業隊員が当地に残留を余儀なくされている英側の考え方である。

吾々残留の根本原因は、吾々の労働力そのものよりも、むしろその後にある数百万の現地労働力(賃銀問題)にある。すなわち現住民のストライキに対する牽制力としての役割こそ英国の狙いなのである。

「吾に十万の強制無賃労働者あり」——英国殖民政府は(現地人による)ストライキの起こるたびに直ちに日本作業隊の若干を現場に送り込み、ストライキを鎮圧してきた。吾々の労働力そのものが第二義的意味を持つものであるとの考えは、我々自身のサボタージュやストライキもまた第二義的なものであることを示すものである。

吾々の危険なサボタージュに対しては、(彼ら)勝利者と(我々)抑留者の形において、おびただしい血の犠牲を強いるだけであらう。しかもこの種の事件は(彼等にとって)あくまで第二義的問題として葬り去られ、内還は歯牙にもかけられるものではない。「八月十五日以後の彼等の最大の目的は、その英帝国植民地に対し、日本軍占領期間中の空白をいかにして速かに排除し、かつての自信あふれる、かつ巧妙な植民政策を一日も早く再現するかにあるのである。」内還問題の鍵はストライキ等という平時の生やさしいしろもので解決がつくものではなく、吾々を当地に留めておくことが英国として不利な立場であることを知らせる以外にその方法はないの

である。

その第一は「我々の」現地人との接触であろう。

英国は日本人の知識が現住民、特に共產黨員と結びつくことを極度に恐れている。もし「マレー」とシンガポールに存在する」十万の作業隊員の全域からしみ透るようにして現地人との接触が行れつつあると英国が感じたならば、彼らは戦慄し、吾々を当地に留め置くことを潔しとしないであろう。

だがこれが成功には、統率権のもとに上司の労働問題に対するあくまで慎重な考慮と、更に困難なことには、十万作業隊員のこの種の運動に対する真の理解と組織的訓練とを必要とする。そうして失敗するならば——恐らくは十中八九失敗を予想されるが——これまたおびただしい流血の惨事を惹起するであろう。「戦敗れたる今、一人の部下をも殺してはいけない。元氣な姿で皆それぞれを内地で待つ両親の、妻子のもとに帰還せしめることこそ最上の使命である。」ここに上司「である現地指揮陣営」の反省があるのである。

最後に残された内還運動の鍵は人道問題ただ一つである。今勝利者英国も世紀の苦悶の象徴として必死のあがきを続けている。この「かつての世界の王者である」英国の苦しみを吾々ほど強く五体に感じているものはないであろう。

「彼等は」人道の限度までギリギリに吾々を使おうとする。彼の苦しまぎれの方針は、多くの面において人権を超えて吾々を踏みにじりつつある。吾々は「まず祖国の」与論に訴えねばならない。与論に対しては英国もまた考えざるを得ないであろう。「いかに祖国が敗戦の苦痛の最中にあるとはいえ」吾々十万は内地八千万と直接連なっているものであり、八千万の恩讐は十万の作業隊残留の意義を抹殺してなおあまりあるものがある。「みなそれぞれ父が母が、妻が子が、兄弟姉妹が、親しき友人知

人がいるのである。吾々十万に関心を持つ人々は少なくとも幾百万を超えるはずである。大きく言えば吾々十万は内地八千万と直接つながっているものであり、八千万の真の理解と同情を得ることこそ、やがては英当局の態度を変更せしめる唯一の手段であろう。」

かく考えるとき、「終戦後比較的何も知らず」既に帰還した何も知らない六十万の南方「軍人の」体験によって語られ信じられている「比較的安易な吾々の生活」を、「目もあてられぬ惨状」として「内地の人々に」明らかにせねばならぬ。

たまたま内地より入港する復員官連中が表面「的に」、ラジオ、拡声器等、娯楽設備の整っているシンガポール方面を瞥見して伝えているに違いない見聞違えた南方生活「の觀念」を拭い去らなければならない。

この真実を伝える機関の活躍こそ内還促進運動の鍵であろう。

× × × × ×

R・キッチナーはタピオカ山の事件に関し、更に「上級機関の」マライ・コマンダーのもとに嚴重な抗議と処置を要求する文書を呈出した。

即ち——

「日本投降降軍によって荒されたタピオカ山の損害は三十二万ドルより五十五万ドルまで拡大し、これが損害賠償として無賃労働あるいは時間外労働をもって充当されたし。なお入殖当初比較的厳正な軍規を維持せられていたJ・S・P.も今やすっかり頹廢し、日本軍自隊によるこの種の「事件の」防止を期待することはできない。従って英軍武装隊の常時駐屯を願いたし。また、余は既に植付けられあるタピオカ山を荒らす如き労働者を好まず。労働力の切替えを要す。」

この文書と関連があるのか、エンダウ作業隊よりクアラランプール行きの一三〇名を二四時間以内に編成せしむべしと命令が来た。

苦しい忍従の生活の後によく自活態勢が整いかけた吾々にとって、移動ということは晴天霹靂であり、日本軍自体がこれに対して指命することは忍び難いことであり、「作業隊」本部はその銓衡に絶望的な苦しみを味わっていた。

そのとき、陸軍部隊の少年飛行兵出身の若者達は率先してその苦難を担って立ったのである。次に示す短歌は同隊のエンダウ出発の折、見送りの他隊の一兵士が詠んで渡した赤誠の詩である。

御諭をはかなき露の一年半 餓鬼に狂うやつわものども

人はみな かげにおのく吉隆坡「クアラランプール」へ

神風ひとり笑みてゆくや

東雲にまだいとまある月影を風の如くに去るやその君

積載の声に刺され夜半に起き、見送れば涙し止まず

艱難に向かい知るや人心 日の本いまだ道はすたれず

クアラランプールで彼らを待つものは暗い炭抗であった。

さてエンダウには英軍武装兵が常駐することになり、キャンプ内に自動拳銃が向けられた。点検の際は酒の匂いをプンプンさせながらとなり散らし、動作のキビキビしない者は体刑を科せられた。体刑は一定時間に一定量の穴を掘るか、あるいは駆け足である。

また、何も持たぬ吾々に対し靴やゲートルを強要した。彼らの命令はまるででたらめなものであった。

例えばDキャンプに行くためには自動車道路がないため歩かねばならない。そこで英軍の隊長は荷車を用意せよというのである。荷車に

乗って日本兵に挽かせるのだそうである。

あるいは兵隊達を整列させ、基礎教練をやらせ、興に乗ると日本士官を引き出し各個教練をやらせた。消灯は九時であり、それ以後は一言もしゃべってはならぬと厳命し、毎夜八時半前後にはキャンプに来た。九時十分前には点呼を行い、全員がキャンプ内にいることをたしかめ、一応何かがなり立てながら去っていく。

これが終戦一年半を経た英国人の日本人に対する姿である。

――――

これまで述べてきたものは吾々のエンダウにおける生活記録の瞥見であった。私は吾々の苦闘の日々を表現するために、いわゆる文芸的な能のないことを哀しく思う。

だが、文集『噴焔』に綴られている随筆の中に盛られている感慨は、若い二十才前後の兵隊達の純真な現生活の告白であり、これらを読み取ることによって十分その目的は達せられるのであろう。ただここに注意すべきは、冒頭に述べた組織的訓練の窮極的成果である。私が主張したこの内容は、文中表面に現れていないようである。

だが私は日本軍隊の強靱さと、そのものがはしなくも最終段階において噴出していることをすでに記述したつもりである。

哀しいことではあるが、吾々は歴戦の勇士の中から若干の発狂者を出した。それほど恐ろしい逆境の中に、もし世にいう権利と義務の亡者どもが雑居していたとしたならば、どのような惨憺たるありさまとなつたであろうか、おそらく伝え聞く満州方面の醜悪な野獣面をさらけ出し、弱肉強食が露呈されたであろう。

英国人の日本人に対する取扱いがソ連のそれよりもゆるやかである

とは思われない。また南方にも厳冬にかわる炎天がある。多数の婦女子も抑留されていた。だが我々は組織の力によって、まず婦女子や民間人を内還させ、「そして同僚の中の病弱者や高齢者を内還させ」、自ら炎天〔下の屈辱的作業隊生活〕にいどんだのである。

そうしてお互いに信じ合い、慰め合い、力になり合って暮してきた。

満州方面では組織を自ら破壊し、自ら墓穴を掘っているのである。

吾々はなお組織の中に生きている——。軍隊の窮極的精彩形態の描写は、終戦後の逆境と組織の中に忍従する同志的結合の赤裸々な告白によって明らかにはずである。

想いを祖国に馳せよ——。そこには吾々から見ればとるに足りないことがらによって兄弟同志が互いにいがみ合っているではないか。女学生が断髪を許可せよとストライキを起したり、チヨコレート欲しさのあまり闇の女に脱しざるなど、何と無様なわがままなことであろうか。吾々は祖国の人々の幾十倍もの苦しみを背負っている……。ともすればあたりかまわず怒鳴り立てたいような、男だけの惨めな生活なのである。その血達磨の生活の中から〔夜ともなれば〕リュウリュウと流れ出る尺八の音を、内地の人は何と見る〔聞く〕であろう。

しかも〔我々の仲間は〕この苦しい生活の中から、吾々の日常生活そのものが将来の〔日本人の〕南方発展の礎石となることを痛烈に反省し、例えばたった一枚の〔残った〕パンツを、ボロボロに破れていようと、またつくる糸や針がなくても、一応は腰にまとい、日本人の品位を保とうと務めたのである。

南方住民の日本人に対する真の理解は吾々によってなされておるのである。

さて、昭和二十二年二月十一日紀元節現在、日本作業隊によって遂行された開拓面積は次の表の如き数字を示している。



ドレイン完成[141]

区分	原始林	原始林伐採	灌木伐採清掃	植え付け
丘陵地帯	10,000	1,100	816	438
湿地帯		1,615	800	800
計	10,000	2,715	1,616	1,238

すなわち丘陵灌木地帯の伐採、焼却、清掃八一六エーカー、うち四三八エーカーの耕作並びに植付け完了。湿地灌木地帯の伐採、焼却、清掃八〇〇エーカー並びにその全面積にわたる稲の植付け完了、総計一六一六エーカーに及ぶ地域の伐採、焼却、清掃が作業隊員の手によって行われ、今や一二三八エーカーの面積の山の幸が生産されようとしている。

しからば、既に日本政府の計画の下に支那人の手によって切り拓かれた原始林の伐採面積総計二七二五エーカーのうち吾々の手によって概ね開墾されたものを除けば、一〇九九エーカーがなお吾々の前に横たわっているのである。

すなわちこの総計によれば、過去の一切の開墾地を入殖者に開放したとしても、原始林に手を伸ばすことなく本年度も昨年度と同様の労働力を注ぎ込むに充分のスペアが残されているわけである。

これをエンダウ地区開拓規模よりすれば、一〇、〇〇〇エーカーの地域中、人跡未踏の原始林は七二八五エーカーの膨大さである。エンダウ地区開拓の完成には、ブルドーザー等の機械化的開墾をもつてするも三千の労働力でもって十年の歳月を要するであろう。

エンダウ河畔全域の総合的見地より見た場合、五十年の歳月と延人員五千四百万の労働力（一日二米）が必要とされるのである。

英国人の殖民地的空想によって開始された広漠四万五千エーカーのエンダウ河畔開拓事業は、既述の如き戦争遂行という異常な環境のも

とに日本政府の強行な腹によって進められ、しかも気象に影響されて不成功に終わるかの如く思われたが、今や英国の帝国主義的殖民政策の野望のもとに、日本人の労働力により、未来を暗示する黎明の扉が開かれんとしている。

この開拓のために流された貴い血涙と汗は四万五千エーカーの豊かな地味としてマライの地に残るであろう。

知るべし——この開拓の人柱は「戦い敗れ祖国を恋うるに唯一の生き甲斐を求めつつ孜々として働き通した」日本三千の抑留作業隊員なることを。肝に銘ずべし——この血涙と汗の地味は日本帝国臣民の流したものであることを。

エンダウ開拓小史 終り

後記

エンダウ開拓小史には現住民について何ら語られてない。もし続噴
焰が発刊されるような場合、私はまず彼らを語りたい。

私は終戦後、現地人が吾々に示してくれた深い愛情を忘れることは
できない。戦争中、吾々が現地人に示したつもりの好意は、今から思え
ばあさましい代物であった。

吾々は感謝と反省の涙でもって五体を清め、あの純真なインドネシア、
マレーの天使達に、文化の翼に乗って、今度こそ彼らへふさわしい贈物
をしたく思う。

皇紀二千六百七年三月三日

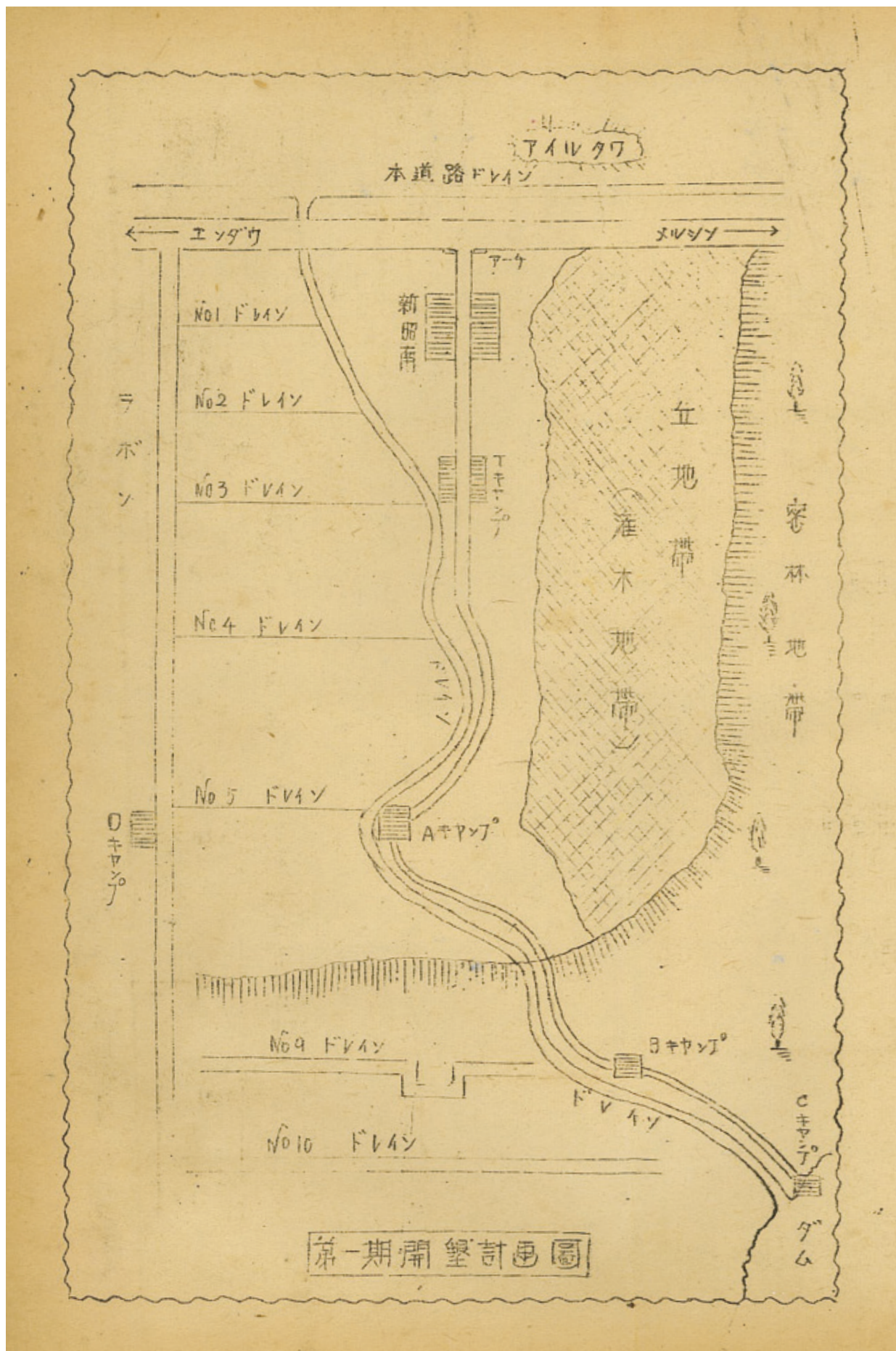


初収獲[122]

水田、土、ドレイン、熱量統計表

作業区分		水田作業		山作業		作業区分		ドレイン作業	
項目	カロリー	時間 (分)	カロリー	時間 (分)	カロリー	項目	カロリー	時間 (分)	カロリー
器具受取	304			2	10.1	器具受取	304	10	507.0
集合整列	236	10	39.3	10	39.3	集合整列	236	5	24.0
命令伝達注意	162	10	27.0	8	19.9	速歩	208	60	208.0
配置	289	10	48.2	3	14.4	命令伝達注意	162	5	134.0
作業	重	450				作業	重	450	(240) 360 (1000.0) 270.0
	中	300		340	1100.0		中	300	(60) 120 (300.0) 800
	軽	200	60	200.0			軽	200	
耕作	400	(180) 240	(1200.0) 1600.0			配置	289	5	24.1
雑談 坐	102	(30)	(51.0)			器具手入	170	10	28.3
雑談 立	104	(30)	(52.0)			器具返納	304		
休憩	102			74	125.8	昼食	114	30	57.0
ボンヤリ	100			19	32.3	雑談 坐	102	(66) 36	(109.0) 51.0
マンデー	100	10	16.7			雑談 立	106	(60) 30	(102.0) 51.0
器具手入	170	5	14.3	2	57.0	休憩	102	(60) 10	(102.0) 17.0
器具返納	304			2	10.1	除草	346		
昼食	114	20	38.0	12	22.8	排水	300		
雑談生	102	40	68.0	28	47.3	クスリ散布	300		
ボンヤリ	100	30	50.0			ボンヤリ	100	60	100.0
薪運搬	250					気ヲ付ケ	162	2	5.4
気ヲ付ケ	162	2	5.4	5	13.5	休メ	162		
諸注意	120	5	10.0	2		諸注意	120	3	6.0
命令伝達	162	5	13.5	5	13.5	命令伝達	162	5	13.5
食ウ時間	114	40	76.0	20	38.0	食ウ時間	114	30	57.0
配膳	153	20	51.0	9	22.9	配膳	153	10	25.5
後始末	110	20	36.7	4	7.3	後始末	110	10	18.3
被服手入	171	10	28.6	7	19.9	被服手入	171	5	12.6
整頓	248	5	20.7	5	20.7	整頓	248		
前後始末	110	5	9.2			前後始末	110		
掃除	143	5	11.9	2	4.7	掃除	143	10	23.8
床整理	250	5	20.8	4	16	床整理	250		
水浴	100	10	16.7	14	23.3	水浴	100	10	16.7
洗面	99	5	8.3	5	8.3	洗面	99	5	8.3
洗濯	144	10	24.0	15	36.0	洗タク	144	15	3.6
物干	182	5	15.2	3	9.1	物干	182	3	9.1
取入	111	5	9.2	2	3.7	取入	111	2	3.7
読書	102			24	41.0	読書	114	30	5.1
横タワル	80					坐談	102		
坐談	102	30	51.0	30	51.0	ボンヤリ	100	16	16.7
娛ラク	130	30	65.0	70	151.0	諸往復	170	20	56.7
ボンヤリ	100			60	100.0	散歩	161		
不シン番	196					治療	114		
勤務申送	162	5	13.5			自中	300		
被服着脱	158	5	13.2	7	17.8	活軽	200		
諸往復	170	20	56.7	22	62.0	薪割	444	15	111.0
薪割	444					薪拾	300		
薪拾	300	25	125.0			不シン番	196	60	196.0
散歩	161	20	53.7			勤務申送	162		
使役	194	10	32.3			被服着脱	158		
治療	114	10	14.0			使役	194		
向口	300					用便	94		
活軽	210					睡眠時間	60	450	450.0
小用	161					ボンヤリ	100		
用便	94			20	31.7	マンデー	100	10	16.7
睡眠時間	60	510	510.0	520	520.0	娯楽	130	60	130.0
休メ	162	3	8.1	12					
合計		1,440	(3,625.3) 4,025.2	1,440	3,449.7			1,440	(4,192) 5,288.0

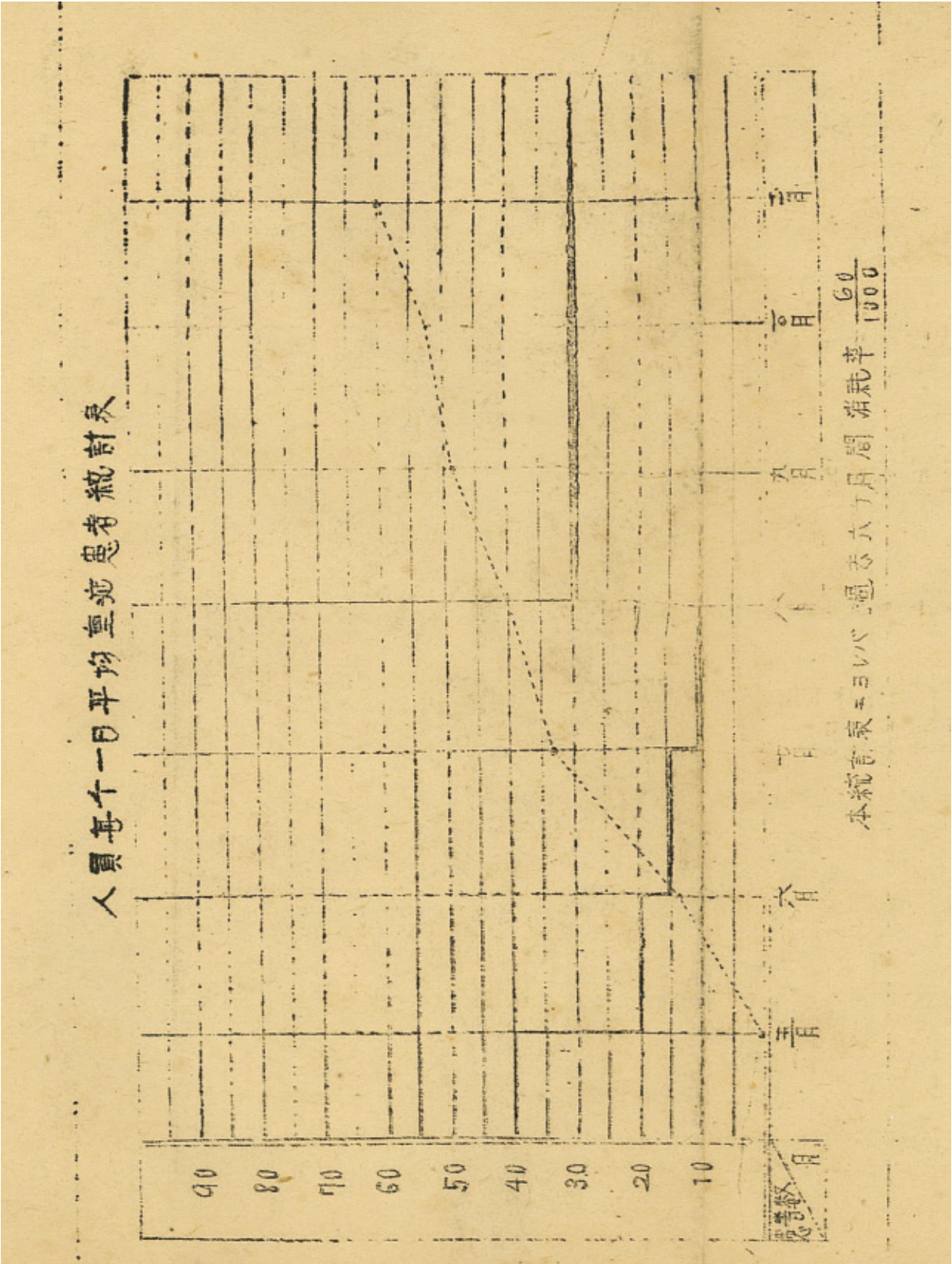
- 注
- (1) 「カロリー」の桁を揃えるため、小数点以下が0の場合に小数点以下1桁まで表記した。
 - (2) 項目によってはカロリーに時間を乗じた結果と「カロリー」に記されている値が食い違っているものもあり、特に「ドレイン作業」では桁数が明らかにおかしいものもあるが、食い違いを正さず原表記のまま記載している。
 - (3) 「水田作業」と「山作業」の21行目(諸注意)から29行目(掃除)までのデータは行がずれているために手書きで正しい数値が書き込まれている。ここでは手書きによる修正後の数値を記載した。その結果、「水田作業」と「山作業」の合計の値が合わなくなっている。



人員毎千一日平均重症患者統計表

患者数	0	14	33	40	49	53	60
月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月

本統計表によれば過去6ヶ月間消耗率は60/1000



短歌 俳句 自由詩 白冠河 川柳

短歌
俳句
自由詩
白冠河
川柳



短歌

旗とともに倒れ死ぬべき醜楯の

鍬はとるとも仇に生くべきか

綱島一三

きくだにも悲しき極み我国の

君召されてふ七分麦飯

志き島の大和雄心うち秘めて

ほぞえに歎きの日は去らむとす

めぐり来し落場〔落陽〕の勅の出でし朝

雄心たけび雄心嘆くも

よみ聞くや戦の終り明らかに

大御心の広きに泣さるるも

畏こけれ族等〔民等〕残さむとすめらぎの

こころ悲しき勅はいでにき

打ち折れし櫓弓〔はじゆみ〕の道うち秘めて

国に舳向かう日を待ち居なむ……………綱島一三

菊薫る今日の佳き日を南〔みんなみ〕に

田植すましてひとり寿ぐ……………横田若男

敗戦の痛手も深く胸に秘め

南十字の下にたつわれ〔明治節〕……………永田福治

生きて世に甲斐ある命一筋に

わが大御代の春を迎えん……………合田定雄

広くなりせまくなりつつ絶えざりし

わが敷島の大和島根は……………



鍬[073]

秋来れば亡き我が父が年々に

菊を愛でにし姿思ほゆ……………木下睦雄

背に負いし苗の重きやぬかる路に

鍬を杖にし汗の流る……………坂本清己

久方にどちと揃いて担う木の

癒えて間もなき肩にきしみぬ原清路

傷つける祖国背負いてますらおが

土に生きゆく姿尊き……………落人

新たなる年を迎うる抑留の

窓辺に椰子の風静か鳴る……………原清路

故里の伊那の谷にも秋たけて

軒場のもみじ我を待つらん……………

まどろみて目覚めし方に千切雲

流るる空の真青なるかも……………新一

堪え難く思いしことも起き臥に

馴れて心の今日は安けく¹……………木下睦雄

自活園の黍の葉末に露おきて

さしそ朝の光すがしく……………木下睦雄

海の辺に舟あやつりしジャワの子の

澄める瞳をふと思ひ出づ……………

かなしきはウインの女に似しという

大和女(おとめ)の誇りいずこに……………

はろばろとどきしくにの便り読む

ゆらぐ火影や虫の音流る……………野田明

群雲のさ明けゆ見ればほのほのと

己が心のなごみ行くなり……………大窪彦七

故郷の便り待ちつつ年暮れて

今宵は細き雨ぞ降りけり……………高橋正彌

月夜烏淋しく一羽夜もすがら

生の命の声あげて鳴く……………合田定雄

久方に渚に立てば在りし日の

勝鬨きこゆ潮騒のまに……………管登

己が植えし芋の畑を巡り来て

掘りて食いけりその細き芋……………綱島一三

去り行かばまた見んことのなからめや

ゆかりて来にし涯の山里……………木下睦雄

たまさかに海辺に出でて潮の香に

ひたれば晴るる憂き心はも……………

暗き床三尺あけり病友の

迎うる日々にあわれをおぼゆ……………綱島一三

歩みきし茨の道はけわしけれ

なお行く手には荒波ぞ待つ……………逸名

事々に自我の世界に生きむとて

顔色かえつ友のあわれに……………綱島一三

黄昏の野辺にあわれ山羊の子の

親を恋い啼く声ぞするなり……………合田定雄

▼1…『サバン会誌』では「堪えがたきことにも馴れて今日もまた起き臥しこころ安らけく」

秋の陽の光さやけき庭の辺に

主待つらむ鶏頭の花……………木下睦雄

わが前に舞う舞姫のその長き

黒髪匂え大和乙女よ……………合田定雄

父恋うる顔も見知らぬ吾子もまた

歳を迎えて五つとなりぬ……………楠香

しらじらと東の空明け初めて

心すがしく若水を汲む……………野田明

日々にして帰りまつてふ我が妻の

水茎のあとひたに恋いしも……………木下睦雄

五千籽潮の彼方に我を待つ

母安かれと祈る今宵も……………渡辺鉄蔵

我いでし淋し残家に老ゆ母の

世すぎの日々を思いかねつも……………綱島一三

白髪のいやましけると妹子より

母が消息せつなかり……………〃

父なくて十九年を過ぐる宵

留守の母の皴深み思う……………〃

音もなく朝霧に落つる一ひらの

木葉に動く東雲の色……………合田定雄

何鳥の声かは知らね高々と

夜明けの空にひびきゆくなり……………〃

糸月の細き光に今宵はも

地虫の声のいとどあわれに……………〃



馬来の子供たち [030]

あまざかる茅原の雲のあかねして

とばり静かに峯に迫りぬ……………福留貢

朝露の光りて花の如くもの

巢のあり草の間にまに……………斉藤茂雄

さざ波の打寄す浜の彼方より

雲つらぬきて明け初めにけり……………山田定治

風なきて波の静けく千鳥群れ

潮香かぐわし海の曙……………坂元清己

夕去りて淋しき野辺に蛙鳴く

飯屋に雨の音ぞ身に沁む……………永田福治

くにとおぼし空いとすみて白雲の

流れて消えぬ海の彼方に……………大窪彦七

南(みんなみ)に如何にあるかと寄せ来る

友の情の文独り読む……………小淵重信

病める身の我が枕辺に花一枝

さして去りにき君は静かに……………大野英太郎

術もなく故里を恋う身に層雲は

真昼の空に遠く静けし……………新一

ほとほと屋根うつ音を寝ねがての

夜半に小雨の故里をしぞ思う……………谷平茂春

ひとときと思ひしとま屋の住居にも

短かざりける日は過ぎにけり……………矢次貞雄

幾年か別離の里や明暮に

偲ぶ今宵の月のおぼろみ……………浜路龍男

木も草も吸われる如しこの空に

青き限りのはてもなき丘……………綱島一三

あずさゆみ引きて帰りぬ益良夫の

魂いかしめよ吾等つとめぞ……………合田定雄

いみじくも五百健児の魂燃ゆる

マライの大地に焰を噴おり……………

敗るるもわが日の本の益良夫ぞ

忠節忘るな昔しのべや……………

南溟に飛ぶ雲のあり幾歳か

茨の道を越えて来にしを……………

俳句

○枯木

小夜嵐枯木にかかる天乃川……………福留貢

初便り木蔭恋しき候とあり……………横田芳男

○朝

しめやかに狭霧に眠る枯野かな……………高木勇

今朝も晴友を見送る傷悲し……………村井健二

くもの巢朝霧重く降りかかり……………谷脇利男

▼2…『サバン会誌』では「すべもなく故郷遠し恋しかり層雲のみが空に遠く静かなり」
▼3…『サバン会誌』には掲載なし

▼4…『サバン会誌』には掲載なし

○汗

汗拭う椰子の木蔭や風薫る……………篠木勝
汗ふきて憩う田の面の広さかな……………木下陸雄

○道

仏桑華咲きいし野辺の小径かな……………
廃道のかたえに古し道しるべ……………
遠近の目路の限りの荒野かな……………
あの娘等に逢いし小道の野良がえり……………古賀菊雄

○雲

あかね雲輝き初めし御母星……………野田明
雲の峯くずれて早し雷雨かな……………福留貢
梢仰ぐ空の青さや雲の峯……………木下陸雄

○雨

スコールのうるおい嬉し自活園……………
ぬぎ捨てた草鞋雨だれ洗いとり……………増田春己
雨やみてカンナの花のいや赤き……………野田明
雨煙る黄昏近く野火の煙燃ゆ……………

○微風

白風かがよう曠野の微風かな……………木下陸雄
微風風薄霞去りて空青し……………谷平茂春
微風になびく少女の髪さびし……………野田明
水草のかぶり振り振り風渡る……………無名草

瑞穂句集

○早苗／雑詠

遅ましき手に植えてゆく早苗かな……………木村睦雄
青虫の一つころげる早苗取り……………野田明
早苗植う水面に淡し椰子の影……………矢次貞雄
朝霞濡れし早苗に露重し……………大窪彦七
馬來乙女早苗頭に川づたい……………
白露の宿りて早苗の新芽萌ゆ……………谷平茂春
大路沿い植えし早苗の列正し……………
露細く早苗取る手に露しとど……………福留貢
子子の舞うや温水の風日和……………
蚊遣火のけむ細々と小夜時雨……………
たそがるる柱の古りや抑留舎……………木下睦雄
夕風に白衣の裾や仏桑草……………原正勝
物干場雪残して雲散りぬ……………青木学
どんと投ぐ鍬や枕に日は高し……………池田勝三
田起しの鍬にあえなし亀の甲……………野村一雄
爆竹の音も乱れて児等の春……………篠木勝

炎天句集

ローリーのほこり舞い過ぐ暑さかな……………木下睦雄
ゴムの実のはじける音の暑さかな……………野田明
炎天や干潟に蟹の甲一つ……………篠木勝
枝折戸にへちまだらりの暑さかな……………

炎天の名残り留めて夕陽映ゆ……………小淵重信
 水田炎けて銚足ししみ泥の冷……………孫淡窓
 病葉の音なく散れる暑さかな……………齊藤茂雄
 物売りの重そうに行く暑さかな……………木下睦雄
 炎天や真帆の消え行く雲の峯……………福留貢
 草分の葉ずれにしみる暑さかな……………
 草かげに兵うだりぬる暑さかな……………木下睦雄
 炎天や水泡くまなく浮にけり……………綱島十三



ゆあみ [032]

○雨期句集

川風の身にひんやりと雨期の朝……………坂元清己
 今日もまた雨に煙りて灯の入りぬ……………野村一雄
 破れ靴の黴びたるままに雨期深み……………篠木勝
 雨だれの止むときもなき侘び寝かな……………木下睦雄
 雨近く梢鳴らして風立ちぬ……………坂本俊夫
 パバイヤの花に月あり雨期深し……………服部清
 雨晴れて夕陽に映ゆるカンナかな……………落陽
 うたたねのござのしめりや抑留舎……………齊藤茂雄
 こおろぎのソツととび来る宵時雨……………高木勇
 かび臭き衣裳虫干す日和かな……………林忠孝
 畦道の泥こねてゆく銚足かな……………木下睦雄
 雨季晴れの物干索に赤とんぼ……………向駒雄

○自活園

片すみに花も一輪自活園……………谷脇利男
 群れている蜂の羽音や豆の花……………服部清
 冷んやりと南瓜畑や月おぼろ……………齊藤茂雄
 甘根【カンコン】の真白き花やおぼろ月……………原正勝

○マンデー【水浴び】

マンデーやサロン【腰布】の掛かる仏桑華……………
 マンデする病友の背中の中うすきかな……………服部清
 元朝やゆあみに風の薫りけり……………坂元清己
 ゆあみ場のつるべしきりに西日かな……………村石法男

○虹

そほえ降る山なみ遠く虹のあり……………徳武清
雨一過虹のたもとの花芭蕉……………大野英太郎
連峯はまた時雨かや虹の見ゆ……………風車
鳶舞いて雲の峯あり虹の空……………斉藤茂雄

○鶏明

ときつくる声遠近に夜の白み……………
鶏なべて刻つくるかや夜の明け……………
残月の薄らぐ頃や鶏の声……………奥沢博
庇這う炊事の煙や鶏の鳴く……………服部清

詩 恐怖

野田明

敢闘も努力も
ついに！

悪魔は我が背後に襲いかかった
俺は昼も夜も

長時間にわたってこの悪辣な悪魔と
死物狂いの格闘を続けた

身も心もくたくたに疲れた

俺は齒をくいしばった

力の限り闘った

だが悪魔の力には到底及ぶ

力ではなかった

俺は悪魔のすきをねらって逃げた

一目散に逃げた

真暗な夜道を！

俺は恐ろしさに後を振り返った

悪魔は執念に追い駆けてくる

その顔・・・顔・・・

ア・・・ア・・・

全身の毛という毛は逆立った

冷水を浴びたような悪寒が

ガタガタと音を立てた

俺は気が遠くなった

バツタリと倒れた

焦燥と煩悶が全身を蔽った

いつの間にか悪魔は

馬乗りになつて

俺の喉をしめつけた

ウフ・・・ウ・・・

お前は俺様の顔が恐ろしいか！

俺様はお前のような

意志薄弱な一人一人に

つきまとっているのだ！

いざというとき

俺様の魔の力は

お前の言葉を封鎖してしまうのだ

お前を恐怖の淵に

追いやるのだ！

これが俺様の役目なのだ

焦る 焦る！

脂汗が

歪んだその醜体……

フ……フ……

俺様は

お前のその格好が面白いのだ

おかしいのだ

ウフ……フ……

よく聞け！

俺様が恐ろしいならなぜ

矯正に努力しないのだ

お前の努力を認めたとき

俺様はいつでも

お前の身辺を

離れるのだ！

わかったか！

俺は苦悶の内にはっきりと聞いた

魔の声！

急に体が軽くなった気がした

コツコツと肩を叩かれて

ハッ和我に返った

カンテラを下げた次直の衛兵の影が草葺の壁に

大きくうつっていた

ア……夢だったのか！

全身汗びっしょりになった俺は

机に打伏せていた

二直衛兵交代します！

グラグラとよろめきながら立ち上がった

二つの顔がニッコリと笑っていた

時間は十二時を指していた

椰子林の梢に

清らかな月が

皓々と輝いていた

終

内還近きエンダウの朝

森山幸晴

一　なだらかな　うみをのぞめる　さかみちを

口笛吹きつつ　われはゆく

二　くろかみの　さざりにぬるる　しなむすめ

手籠いだきて　あゆみくる

三　ひさびさに　かわすおとめの　ひとみには

運命(さだめ)わかるる　なげきあり

四　なだらかな　タピオカばたけの　さかみちを

小石けりつつ　われはゆく

雨の音

栗田三秋

冷たい風が

ほほをなでて過ぎる

やがて

驟雨が

ものすごい音を立てて

我々のキャン普を襲う

陋屋のひさしから

すき透った

美しい白い玉が

連なり並んで落ちてゆく

水たまりに落ちた

白い玉

軽快な

音をたて

泡となり

飛沫となって

心良く散ってゆく

私は

窓辺で

故郷の雨をしのびながら

うっとり

楽しく

雨の音を聞く

追憶のあの日

小淵重信

その思い出は

あの日だった

我々はあるとき聞いたのだ

しかし吾々の心には信じられなかった

現実の嵐は

遠慮もなく我々の周辺に寄せてきた

そのとき始めて解ったのだ

我々は泣いた

声を上げて慟哭した

築きし防空壕も

築きし砲台の陣地も

今は淋しく

我々の目に映じたのだ

去らねばならぬ兵舎に

雨は静かに屋根を叩いていた

敗戦を知った

兵の心を濡らすが如く

静かに静かに

降っていた

終

終



沖縄空襲を知る[090]

丘の想い

綱島一三

タピオカの丘

小高い青いうねり

サヤサヤと一葉一葉と動かし

黄昏の風が行く

汗と日熱けで過したこの丘

枯木の数が目に沁みる

よくもこんなに切り拓いたものだ

荒れ果てたこの丘と環境の中で

ふるさとの話に身の悲しみを数えながら

噴焔の日々が恨めしかった

渦巻く煙の中から

千切れ飛ぶ雲を見上げてみると

ジーンと胸の底を襲う

このさびしさはどうしたのだろう

父さん母さん弟妹達よ

お前達だけでも幸せでいておくれ

兄さん達は今本当に苦しいのだ

帰りたいなあ…… 早く…… 一刻も早く

この丘のような緑が故郷の土を蔽わぬ中に

青いタピオカの丘で追想は限りなく沸く

もう動くのも嫌だ

こうしていると

この頭の上を飛ぶ大きな雲が

私のからだを乗せてお国の空へ行ってくれそうだ



[125]

学ぼう

野田明

レコードにぜんまいをかけて
そつと左の手を放せば

お！ まわるまわる

美しきリズムも軽く

ああそうだ

今の内にしっかり

学ぼう

修養のぜんまいを

固く巻いておこう

そして

内地帰還の暁こそ

まちに待った

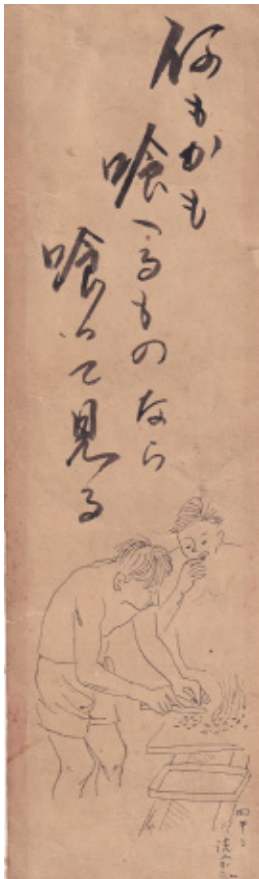
左の手を

そつと放そう

冠句

何もかも

食えるものなら食ってみる……………野田明
 軍部に罪をなすりつけ……………木下睦雄
 予算が狂った太平洋……………
 水に流して再出発……………M生
 敗戦の味忘れじ……………野田明
 歌にまぎらすつわものら……………M生
 やることだけは一ト通り……………
 何のそのこの汗ぐらいは笹の露……………木石
 白木と誓った身じゃないか……………青木学
 チョンガーの力の出どころ……………疋田四郎
 今度こそはと「孫」につぐ……………M生



今までは

「大」をつけた日本だが……………木村陸雄
 日の丸だったあの翼……………茨木平吉
 青春もなく国のため……………山本光利
 わんこ達にも睨みきき……………
 旗風高き赤道下……………福留貢
 勝ち抜くために頑張った……………岩水
 思いもよらない英語熟……………青木学
 顧りみられぬ民主主義……………K生

いかにせん

五千軒では泳がれず……………福留貢
 ちちの思いや身は異国……………青木学
 娑婆じゃ一家の主だが……………林忠孝
 二一天作(為天錯誤)太平洋……………福留貢
 物と量とは特攻も……………福本太郎
 還る声なく春は逝く……………



もろともに

背負え瑞穂の国柱……………林忠孝
泣くも笑うも分ち合い……………奥沢博
国の操を高く持て……………長田雅
試練の庭に振う鋏……………斉藤茂雄
嬉しさは吾等の腕で作りに出……………窪田軍治
破れたりとも国土あり……………渡辺鉄蔵

外国で

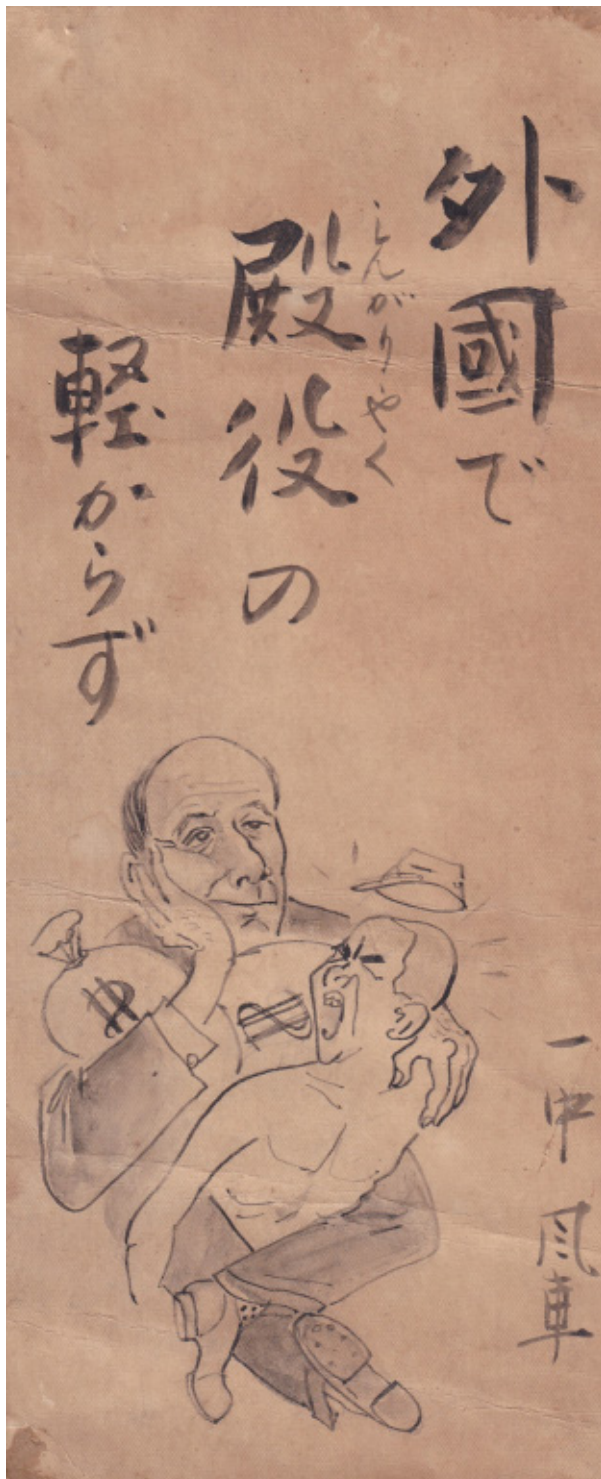
殿役の軽からず……………風車
君が代歌う健児あり……………俵信次

永久に

皇土とともに君はあり……………山田定次
揺ぎなき国築け若人……………斉藤茂雄
平和を願うこの国是……………細田源一
大詔り忘れじ……………M生

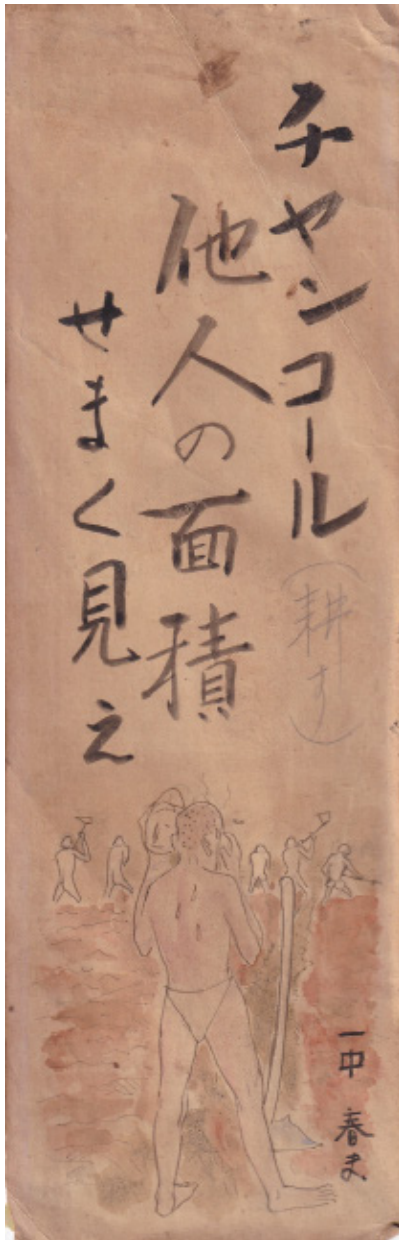
高らかに

我が世を春の民主主義……………細田源一
樹てよ作業の金字塔……………徳武清
掛声揃う田植えかな……………乗武
産声あげし新憲法……………呑助
春日を競うリーグ戦……………M生
日の丸あげん秋ぞ待つ……………原正勝

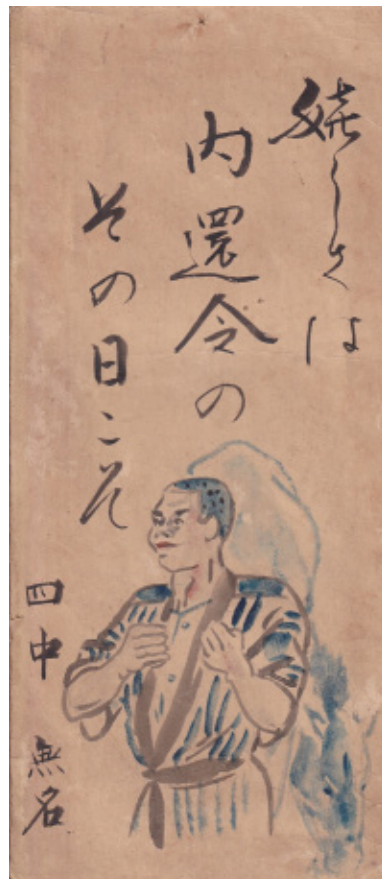


川柳

ままになりや渡つて帰らん虹の橋……………高木勇
 内還のデマも一掃初講義……………増田春己
 蚤をとる友の姿は猿に見え……………奥沢博
 ムツリやからから笑う睨めっこ……………憂子
 御気の良さ一人くるくるコック長……………細田源一
 立ち起きに日の長きこと白衣殿……………
 女の声どこから出るか不精ひげ……………林忠孝
 自惚れの鏡と櫛を手ばなさず……………池田勝一
 言い訳は南洋ぼけと頭かき……………野田明
 帰還靴磨いた後はいいてみる……………青木学
 チャンコール【耕作】他人の面積せまく見え……………
 スコールへけつから濡れて早苗植え……………福留貢
 かいぼりの水と魚に思案顔……………谷平茂春
 それ当り当りとへば碁石をませ……………池田勝己



(キャンプ祭にて)
 頬被り内輪にそつと踊りこみ……………野田明
 (キャンプ祭にて)
 なでられて袂で笑うも手練なり……………
 二膳入れニツコリ笑みて小指出し……………青木学
 釣の具はヘボな奴ほど数を持ち……………福留貢
 回しロコ【煙草】最後をくれとパイプ出し……………菅登
 ありし日の旗旒を思わす物乾場……………
 尺八の音の出ぬたび頸をふり……………一枝



雨の郷愁

作歌 森山幸晴 作曲 野口武
イ短調 4／4ブルース調で

(一)

ぬるるバナナの花
濃ゆ紫の花びらよ
静かにまぶたを閉づれば
思いは古里に
ああ妹の 妹の
好みの帯は
濃ゆ紫の花模様

(二)

沼の青み深く
淀みに沈みて淋し
南の愁を湛えて
母が胸に迫るよ
ああ母恋うる 母恋うる
悲しく叫べど
山■■■■に響くのみ

(三)

■■■■■
人は古里に帰る
祈る心に鈴ふれど
汗は目にしみて
ああ敗れたる 敗れたる
流転の旅は
どこまでつづくものじゃやら
(オワリ)

※誌面の一部が破損して文字が読めない箇所は■■で示した。

河童音頭

作歌 森山幸晴 作曲 野口武
4/4 C 元氣よく

(一)

キャンプファイヤが ゆらゆら燃える

月はやさしく ほほえみかけりゃ ホーイホーイ

南十字の さ霧の丘に

誰が鳴らすか 笛と太鼓がさえ渡る さえ渡る

ドンドンドンとな

ドンドンドンと舞え

ずんべら おはげも 踊り出す

ソレ 踊り出す

(二)

さあさお山の お猿よおいで

おいら海軍 河童でござる ホーイホーイ

丘にあがって やぐらをかこむ

見ろよ五百 おどる

ソレ

(以下囃子同じ)

(三)

鍬をかついだ 河童がいのる

日照りつづきに 田甫がかたい ホーイホーイ

おつむのお皿も 干上がっちゃかなわぬ

スコールじゃんとふれ やぐら太鼓で

ソレ 雨を呼ぶ 雨を呼ぶ

(以下同じ)

(四)

猿が出た出た 夢食うけもの

猿をとらえて 天プラ バクテキ ホーイホーイ

照焼 カツレツ もりもり

■

■

■

(五)

海をしと なぎさ

蝶々舞 浜昼 ホーイホーイ

やさしい し

風は吹 沖

ソレ

(六)

丘に上れば タピオカ畑

はるかのだめば 黒しおどる ホーイホーイ

潮にたくして

■

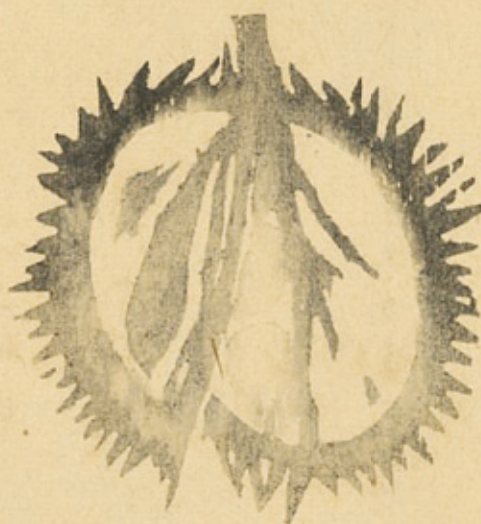
■

■

※誌面の一部が破損して文字が読めない箇所は■で示した。

隨筆

隨筆



泥の足あと

木下睦雄

一・不器用

苗取り作業があった頃、一人当り百十束の苗取り作業は比較的に楽な作業としてみんなに喜ばれていた。だのに私にとってはこの苗取りが一番苦手なのであった。というのは、私は実に不器用で、手早い人が百十束を取り終る頃、やっと三分の一くらいしか取れず、私がやっと三分の二くらい取った頃には、おそい人でも全部取り終って帰り仕度をしているくらいだったからである。恐らく大隊中で私より不器用な者はいないだろうと思うと、ちょっと情けなかった。

しかしそんな場合、誰か必ず余分に取って助けてくれる人がいて、お蔭で一人だけ後に取り残されるようなことはなかった。ほとんどの場合それは同じ小隊の人達であったが、時によっては今まで話し合ったこともない他の小隊の人であったりした。

こうして何度か行った苗取り作業で、私はただの一回も人の助けを借りなかったことはないという、まことに恥ずかしい記録を作ったのであるが、その代わりその都度暖かい人の情けをかみしめたのであった。

二・淋しがり屋

娑婆に在る時分から私は淋しがり屋で、身邊に大勢の友達がいないと淋しいのである。

ある時、勤めの都合で十里ほど隔たった土地へ転勤することになったとき、毎日同じように机を並べていた人達に別れるのが淋しくて、あまり心細がるので友達が笑って、

「会おうと思えば汽車で一時間も乗れば会えるじゃないか」

目次

泥の足あと……………	木下睦雄
お母さん……………	坂元清己
私の人生観……………	大野英太郎
黄昏のエンダウ……………	小淵重信
感動を持続せよ……………	綱島一三
小さな叫び……………	橋本好生
思いのままに……………	合田定雄
ゆとり……………	横田満男
雨……………	細田源一
煙……………	俵信次
エンダウの朝……………	古賀扇雄
愛の復活……………	岩城清
抑留閑話……………	青木学
血と文化……………	原善吉
非登録患者日誌……………	梶塚隆基

と慰めてくれたことがあった。

今、故里遠く雲遠万里の異境にあって、とにかくにも大して淋しからずにいられるのは、毎日顔を合わす大勢の友達のお蔭と思う。

内地へ帰ってからでも御指導を仰ぎたいと思う人、一度は訪ねて行きたいと思う人、長く文通をお願いしたいと思う人、エンダウを偲ぶ会でもやって一杯やりたいと思う人、

嫁さんの世話をしてあげたいと思う人、中には土地の名産品の送り合いっこをしようと思う人などといって、それが実行される日を想像することはなかなか楽しいことである。

三・勘違い

A キャンプへ行く途中にある灌木の繁みに覆われた小川の清掃作業に十名ばかりで行ったことがあった。

流れの中の水草を取ったり、両側の雑草を刈ったりして、作業は割合早く終ったので、足を洗って道路ばたで休んでいた。

すると、「鼻曲り」と私達が名付けている英人のマナージャーが一人テクテクやって来たが、私達が休んでいるのを怪訝そうに眺めると、小隊長に何やらペチャクチャと話しかけてから、またテクテクと歩いて行ってしまった。

小隊長はオーイエスと返事をしたものの、分ったような分らないような顔をして、今作業を終ったばかりの小川の流れをちよつと見ていたが、

「おいみんな。あの川の上に横倒しになっている大木をのけろというらしいから、御苦労だがもう一度やってくれ。」

と言われた。

で、一同はまた川の中へ入って、鋸で川の上に橋渡しに倒れている大木を切って小川の片側へ片付けて帰ったのであった。

それはそれで大した問題でもなく、約半時間ばかり帰るのがおそくなっただけのことであったが、後で考えてみると、あの大木は横倒しにはなつてはいたものの、別に流れの邪魔になるものでなし、「鼻曲り」が何と言ったのか私にも分らなかったが、ひよつとすると、「ヤー御苦労さん、もう作業は終ったのかね」とかなんとか何気なく話しかけたのではなかったかしら。

こちらは何か作業のアラでも拾われて注意でも受けやしないかとビクビクしているものだから、ペチャクチャと来ると、ソラ来たと思つてしなくてよいことまでしたような気がして可笑しくなった。

四・排水溝

メルシン街道と直角に兵舎の裏を流れてA キャンプに続く排水溝に沿って歩いて行くと、この溝を掘った頃の激しい作業が思い出されて、その時分の日記を一頁一頁読みかえしていくような気がする。

ふんどしかつぎが関取りにつかかっていくように必死な気持で作業に立ち向っていった、その頃が今では懐しい。

掘つても掘つても泥水が流れ込んで、日がとっぷり暮れてもできあがらず、応援に来てくれた隊の人達と一緒に、戦争のようなさわざをして、八時頃にどうやら曲りなりに掘り上げて、味のないボロボロのビスケットを噛みながら帰った沼地のあたり。

泥人形のような姿で昼休みをしたドリアンの大木。雨に降られて逃げ込んだ支那人の粗末な小屋と、その子供達。川底のボーキサイトが固くて泣きなくなったカーブのあたり。

サラサラ流れの交叉しているところでは土管を埋めるために溝を掘り下げながら、「細巻き」と綽名をつけている監督の黒ちゃんの悪口を言っていたら、上で黒ちゃんが聞いていたので泡を食ったことがあった。黒ちゃんには日本語が分かるのか分からないのか知らないけれど、何だかブンとして気嫌が悪そうだった。

水は涼々と流れている。働き甲斐があったような気がする。

しかし今見る溝の両側は、人の歩く細い道を残してラン草【チガヤ】が生い茂り、定規に合わせて掘った溝の斜面も崩れてしまったところが目につく。

狭すぎるの広すぎると七面倒くさい注文に悩まされて苦労したのが無駄だったような気もする。

五・天の邪鬼

上の人が計画することには何でも一応反対してみたくなる天の邪鬼が私の心の中にある。

朝の課業始めに皇居遥拝をやることになる、戦争に敗けてからそんな形式ばったことをやる必要はないじゃないかと思うし、大掃除と言われると大体こんなボロ兵舎を掃除してどれだけきれいになるんだいと反抗する気持が起る。

キャンプ祭だとか何だとか催し物の計画があると、誰も共鳴するものがなくて失敗すれば痛快だがなあと意地の悪いことを考えたりする。そんな気持を子供の頃にも味わったことがあると思つてよく考えてみると、母親の言うことにさからつて駄々をこねたときの気持と同じなのに気がつく。

駄々をこねるのが母親に甘える心であれば、私の天の邪鬼も上の人に甘える気持からくるのであろうか。



白兵戦 [071]

子供には無邪気な可愛さがあるけれども、ひげ面のいいおやじが甘えているのなぞ、傍から見れば滑稽以外の何ものでもないだろう。

終り

お母さん

坂元清己

「おっ母さん」 美しい十五夜の月が空に冴えれば、シトシトと心を憂ぐような雨の降りしづく晩等は、無性に母が恋しくなる。しかしそれは儚い夢想にすぎなかった。

「おっ母さん」 その人はここにはいない。遠く五千キロもはなれたマレーの地では切ない思いも浮枕。

迎春いくたびか転々として身は変境〔異境〕の地にありても、ただ朝に夕に恋い慕うは母なる人の面影である。父恋しくも我すでに父なく、父逝きて早や十三歳の際月〔歳月〕夢の如く流れ去り。今は年老いたる母にひたすら孝心の一志を捧げんとす。

年月変ずれば我が母はいかにおわすか、我が子はどこに暮らしているや、我が身たとえ流浪の旅にありても、母の愛情我が血につながるものぞ。激し歓呼のその中に小さな日の丸打振り、我が姿の消ゆるまで見送ってくれたる母のその瞳は涙でうるんでいた。

大君の御楯として〔国を〕いでは来たものの、はかなくも戦い敗れ身は労役に服するにやつれ、汗に土に明け暮れる生活の空しき。

荒茫千里の果てに落ちゆく夕日のやるせなく、空に照る星さえ涙にぬれて夜霧に虫の音も悲しい。

「お母さん」 心の奥に二度三度呼んでみた……。故郷は、母の国は、思いもどきはせぬはるかなる地平線のそのまた向こうであった。

「おっ母さん」と呼べど詮なし。ああそうだ、今頃は麦蒔く頃なりしや、ただ一人霜枯れの土にいそいそと母は麦を蒔いておられるであろう。そうしていつの日かあて知れぬ我が子の帰ってくる日を待ちあぐみつつ、母は土にまみれて寒風に鍬を振るっているではないか。

聖なるかな母の姿よ！

くじけることのなかれ、我よ。何びとの空しかるや、抑留の生活、悔ゆるべきこと、恥ずるべきことのあらんや。尊きは土に生きゆくに忍従の明け暮れ、満天に黄金の星座きらめき、どこまで静寂秘なるかな南国の夕べ、吹き上ぐる海風もいと快く我が頬を撫で去りゆく。恍惚として照る満月は冲天高く冴えてそぞろ寒氣身にしみるを覚ゆ。仲秋名月の空とは真にこのことならんや。ただ我一人ぼつねんとして荒茫の野にたてり。全く忘れられたる人のように立ち枯れたる巨木にかかる月青白く、我が影ながく地に横たわれり。ただジツとして月に見入れり……。

「おっ母さん」 小さな心の叫びは我が胸をかけめぐりぬ。

母よ、聖なる母よ、貴方は教えてくださった。

尊きは土に生きゆくぞ……。ゴムの花、いくたびか散り、また散りていく。南溟の地に母恋う子情の起こらむ人のなからんや。

「おっ母さん」…… やがて月西山に傾きて抑舎の灯しまた細し。

終り



マライ [106]

私の人生観

大野英太郎

私は尊皇倒幕の血を引く水戸の僻地に育ち、少年期より少年共通の権力ある地位への立身出世を空想に抱いていた。

そうして青年期に及んでもその夢を脱却することができなかった。

そのうち、八紘一字の大理想の下に大東亜戦争勃発して、太平洋及び南域〔南方〕一帯に戦果拡大、先輩同胞相次いで前線へ前線へ出征するとき、甲種合格であった私は今までの迷夢を払除し自己本来の使命に醒め、十七年九月勇躍海兵団入団、峻厳なる薫陶を受け、前線から前線へと生死を顧みず三ヶ年間大過なく職責を果たしてきた。

二十年八月十五日、終戦の大詔喚発せられ、夢想だにしなかった敗戦の現実の中に一時は絶望のドン底にまでつき落され、厭世的感情にまで狩り立てられたが、意志の薄弱なる故に大君に不忠を詫びて死することもできず、月日は流れるに従ってようやく我にかえり自分を生かす道はと毎夜椰子の木蔭に生死を誓った戦友と論じ考え、敗れし祖国の再建はどこにあるか、その大道を探索せんと悩んだ。

ある時、応召の一先輩が私らに爆弾的示唆をもたらした。

「衣食足りて礼節を知る。」祖国は今、衣食住が大欠乏している。その上敗戦の打撃に放心状態に陥り、飢餓の線上に立ち、同胞互いに相剋し、ついに国民の道義、地に堕ちた。

周知の如く日本は国内で食糧を賄うことはできない。輸入するには代償(代価)がいる。国内資源、物資のほとんどを費やした今、頼みとする工業力は賠償にとられ、非常に貧弱なものになり、その復活には相当の年月を要する故に頼りにならない。しからば解決の鍵はどこにあるか。どうしても国内自給自足の建前で行かなくてはならない。その方法と

して農業法の大改革と未開地の開拓である。国土狭しいえども、この二つの懸案が解決した暁には一億の人民を賄つて余りある」と(先輩が)語ったとき、そうだ、自分は百姓の子ではないか、人生を通じて確かりと土に立脚し、先輩や戦友とともに皇国の再建に微力を捧げよう。これを自分を活かす道だと悟り、暗黒の世界から光明の世界へと救われた。

その後コタラジャを引き上げ、バトパハ、エンダウと宿命的な作業隊生活は始まり、ここへきて急激に日常生活は変化した。

しかし幾多の戦友は既にこうした悲惨な形容することのできない苦しい作業隊生活に数ヶ月も耐えてくるのだ。

自分だけではない。日本民族の宿命的な試練だとあきらめて、二ヶ月の期限付の希望に幾多の苦しみに打ち克つてきた。いつしか二ヶ月の月日は流れて、次々と待望の内還は始まった。

先輩や戦友も相次いで憧れの故国へ新しい希望にもえて内還していく。しかし何と惨酷にも、「作業隊優先帰国の約束は次々と反古とされ」唯一の期待を裏切つて作業隊は英軍の指令によりそのまま残留と発表されたとき、ただただ茫然自失、その結果は不平不満となつて現われ、「既に」還りし戦友を羨み、バトパハの上官を憎んだことであつた。

当時私は全てを宿命と諦めて冷静を保たんとしたが、ややもすれば焦燥にかられ、自暴自棄の気持ちになりがちであつた。

こんなとき、強く脳裏に映るのは夢にも忘れることのできない故郷の父母と、ともに戦場を馳駆した戦友のおもかげであつた。嬉しいとき悲しいときの思い出が蘇り、強く自分を制してくれた。

そうして、いつかは来る内還の希望を胸に苦役忍従の生活に耐えてきた。

山作業をやっている頃は、英人の目をかすめてエネルギーの消耗をさけ、空腹を感じればタピオカを煮て友と分ち合い、幾分ゆとりのある

日が過ぎたが、水田作業となつてから給与は減少する。懐かしの山には一本の「タピオカ」芋もなく、作業場の悪いときなぞ泥まみれの顔を見合せて意気地なくも泣きたいような気持ちになつてきたこともたびたびであつた。

しかし「夜のとばりが降りて」毛布にくるまつて冷静に反省するとき、自分には心に誓つた内還後の大きな仕事があるではないか、こんな意気地なしでどうするかと自分の心を叱るのであつた。

こうして十ヶ月に近い日が流れ過ぎた。

長い作業隊生活の結果はお互いの心に次第に倦怠を感じ、うるおいをなくしつつあるように思われる。

しかし今こそ各人の自覚と反省が強く要求されるのではないだろうか。私はこうした逆境の中にも理性的に良心的に強く生きる道はあるに違いないと思う。

現在の苦い体験は内還後にどんな逆境に処しても毅然として乗り切る強い力を我々に与えてくれると思う。

故人の言に曰く「苦の窮極するところより光明出づ」と。

私は現在の忍従の生活を明日の茨の人生の糧としたい。否、苦しいとき、悲しいとき、強い自覚の鏡となることを信じて疑わない。

故に現在を有意義に過したいと念じ、読書を漁り識者の言に傾聴し、生きる真理を探究せんと努めている。

現今のような未曾有の過渡期に正しい信念をもつて言行一致の歩としてこそ、己を活かし、ともに人倫の大道に進むことができると確信する。これが大君への大悲願に副い奉らんとする私が人生の念願である。

終り

黄昏のエンダウ

小淵重信

夕食を終つて私はキャンプの外に出た。外には涼しい風が吹き渡つていた。

黄昏るるエンダウの野に茜さす雲が沈みゆく夕陽の上をゆるく西へ流れている。

夕日が野草に映え、風が木々の葉を心地よく揺すぶる小道を、私の方へと歩みを移した。

赤い夕空に黒々として聳える大枯木の姿はまるで故郷の秋の季節を偲ぶようだ。

私の足は真つ直ぐ山の方へと向かつて行つた。

小道を曲つて山の作物の緑葉が私の目に映じた。

顧みれば八ヶ月前、あのうつ蒼たるジャングルを見て、これを征服すべき前途の不安に慄いた我々であつた。

しかしこの不安の裡にも作業は進められた。

ジャングルを払い、草を刈り、斧を握つて、炎熱に耐え、強い陽差しのさし込む木立の蔭にてしばしの憩いを求める兵等の背には、いつしか汗の跡が白く筋を引き、その顔には敗戦国の兵として味わねばならぬ苦痛に歪んでいた。

あちこちに散在せる枯木を集め、また伐採せるジャングルの跡を焼いた。

およそ我々としてこの山作業の雄大さを強く心に印象づけられたのはこの焔であつた。

炎として燃えさかる焔、風になびく黒煙はもうもうとしてエンダウの天を焦がした。

この焔は三千の兵の心を舐め、虜人としての苦しさを心底に映ぜしめたものであった。

焼野もあらわなこの大地に木の根は掘られ、鋤は入れられ、播種されていった。半歳を経た今日、山の作物は緑の色を増し、青々として風にそよいでいた。私はふと橋の下の溝を流れる水の音に心をひかれ思いを転じた。

水はちろちろとかすかな音を残してララン草の交叉せる下を潜って山の彼方へと流れて行く。「この水の流れもまた我々の苦闘の生み出したものである。」

私は歩みを止めて赤い夕陽を見つめた。

私の心は今日までの困苦に耐えて働いてきた嬉しさと人の合して発揮された偉大な力に対する喜びにひたっていた。

そうだ、もろともに合す力の前には「障害は」何ものもないのだ。我々は更に更に天の下し給える試練の嵐にぶつかっていかねばならぬ。この南溟の地には我々と運命をともにする十万の同胞が働いているのではないか。我々が作業隊としてこのエンドウ【エンダウ】に足を踏み入れた当時の原地（現地）の人達の「生活の」状況と現在は全然変っている。

当時の「廃墟のように」淋しかったカンボンの人達の心も、今では新しい気分には漲っている。

我々がこの地を去ってから再び南国の大地を踏むことはまずないであろう。

四季のない常夏の国の香りも味わうことはないであろう。

一抹の哀愁が私の脳裡をかすめた。

夕陽は下界にその名残りを留めて沈んでいく。

映ゆる群雲を見つめつつ、私はキャンプの方へと踵を返した。

キャンプの彼方にある椰子の木立も紫色に煙り、夕闇が迫っている。

キャンプには灯火が点いたようだ。
灯の下で語り合う戦友のざわめきの声が、吹く微風に乗ってかすかにかすかに私の耳に聞えてきた。

終り



鍊成班において[147]

感動を持続せよ

綱島一三

感動の世界からくる私達の日常生活への影響は、心の琴線に触れる一瞬一瞬の絶え間なき持続によって自己の持つ精神の方向さえも左右せられるのである。感動の世界は日常茶飯事の中にもまた大きな組織の中にも数限りなく存在する。私達が何かの銚子でふっと泪ぐましくなったり、平凡な所為の中から大きな真実を見付けて自分自身に指導的な暗示を与えられたり、あるいは過去の生活の中から養って上げた信念に対して合致点を見出したり、信仰の極地から来る無我的な感動は人間としての生活に一大変換と進歩をもたらすものであらう。

なぜなれば感動により止揚せらるべき精神的肉体的苦悩と努力が生み出す練磨が人格の向上に資するが故である。

感奮した人間の本能は平常の何倍かにも増した成果をもたらすものである。

維新の諸志士は信仰の極地からくる感動によりかくも偉大にしてまた限りなき躍動の生命を持つ一貫した思想を現在の吾等が肉体に血潮として残したのである。

現在故国は敗戦国である。私達もまた虜囚である。日本本来の伝統から言えば明らかに土道の落伍者である。しかしながら、我等は八月十五日の御降勅により、小乗的、形式的武士を捨てることによって大乗不変の日本精神に生き抜く道を知った。

雲上の御下詔が臣民たる我等の胸奥に点火した民族滅亡を守らんが為の大悲願が、限りなき草莽の流涕慟哭の中から再建に立上るべき希望と将来を把握し得たのであらう、君臣間における感動の相対が真鏡に写した二者の誠に介在する何ものもなく相互に触れ合ったからに外

ならないのである。

現神の大慈悲心が我々の感情を超越せしめ喜悅服従の世界に至らしめたからであらう。

感動こそ全てを理解する根本的なものである。考えれば私達は今、現在の環境にあまりにも絶望的な自己放棄の観念しか持っていないのではないか。

自身の希望を戦敗という二字によってのみ欺瞞し、墮落していく日常生活への批判さえも心からは正しようなどとは誰も思わない。

否、考えてはいるかもしれないのだ。しかし己にのみ寛大な心の悪魔は生きる力に対する自身の正義に何の感動をも催さしめ得ないほど暴れまわっているであらう。

現在の作業隊員としての我々には、強圧的な艱苦が俱えば俱うほど、これを克服することによって戦敗を償う民族的な祖国再建への進発に湧き上がる希望と感動とを体験として築き上げていかねばならないはずであらう。

終戦当初、私達はどんな考えの下に、またいかなる祖国将来の希望のために血涙を流したことであらう。そうして現在の自分の若さを喜び、永久に変わらぬところの魂を戦勝中の日本人としての実際より更に働き甲斐があると感じたことか。

我々の身体には今純潔な民族的特質が減退しつつあることは否めない。空虚な生活は楽しみの多いものではない。千万言の不平はたった一言の喜ぶ言葉に匹敵し得ないであらう。喜ぶこと、それは精神の感動を意味するものであらう。

今に至って、人によっては戦争に参加したかの狂熱も献身も欺瞞に満ちた指導層から利用されたに過ぎないと言う。しかしそんなことは

言い得べき何者があるか？

当時の狂熱も献身も皆我々の魂の叫びから出た大なる感動であり喜
悦であつたではないか。民族の本質を限りなく示現しその感動の中に
没入し得ることを誇りとしたことを忘れるはすまいと思う。

過去の誠を否定するものは現在の己の心にも安心立命の境地を得る
ことはできない。

我々は青春を失つたには違ひないが、その失つた青春に比較する大
きな体験を築き上げたではないか。その体験は現在を過去として批判
し得る環境に立つたとき、新たな感動をもつて自己の総ゆる方面に
向つてその豊富さを活用せしめ得るに違ひないのだ。

我々は一事が万事新たな感動を求めながら寸刻を送ることに専念
しようではないか。

希望に連がる現在の感動を養い上げていくことによつて精神の健全
を持続して行こう。

終り

小さな叫び

橋本好生

急激な時の流れに老舗は多大なる借財を残して■に流され、譜代の
番頭はその責を負い追放隠棲しつつある。

自由を表看板に明朗なデパートを開店した自由党、保守党の合資会
社は敗戦のドン底から象牙の塔を築き、その営みを続け、社会党、共産
党等の屋台店は敗戦の混乱した社会に一獲千金を夢見、「天皇制」だ「人
民管理」だ「ゼネスト」だとスローガンを掲げて、師走の大安売りのよ
うに大童である。

政府の諸施政方針は政治、経済、文化にあらゆる分野に着々と題目だ
けを唱えながらも日本民主化に努力しつつあるが、しかし敗戦の悲惨
な事実の中に道義を失墜した国民はその依るところを知らず、夢遊病
者の、傍観的生活を続け、虚脱状態にあるが母国の現状だ。

我々の現在が母国の縮図であるとき、それを眺めたならば、いかに宿
命的な運命を辿っているとはいへ、それで良いだろうかと寒心の念を
抱かざるを得ぬ。

追憶を辿れば、雄々しくたくましく作業隊としての精神的、肉体的困
苦に耐えてきた我々は、今ここで倒れていいだろうか。今我々が倒れた
ならば、今後の母国の再建は誰が荷なっていくか。それを思うとき、新
しい日本建設の礎石たらしめる我々の使命は重かつ大なるものがあ
る。

現在は大なる革命への忍従の生活だ！ 異郷の空（の下）にあり、やや
もすればデカダンな生活に流れ、小さな闘争のみを繰返している秋で
あるはずはない。

現在の宿命的な試練の生活が内還により一時的には現実から解放さ

れるかもしれないが、今後の社会はまだまだより以上の荒波が待機しているのだ。

かつて英米蘭の桎梏の下に劣等民族視され、奴隷視されてきた亜細亜民族が、日本の警鐘によって忍従の生活から「独立」へ「独立」へと、たくましく「死」の闘争を続けている民族の雄叫びを聞き、亜細亜の指導者、いや世界の指導者たらんとした我々が日本民族としてプライドを保持するならば、武士道に生き、武士道に死んでいった特攻隊員かつ戦犯者の戦友、先輩等のことども想起し、

毎日の焦燥した灰色の生活の中に自覚と反省を要求される。

「俺は日本人だ」という意識があるならば、今からでもよい、現在の試練の生活を有意義化して、現実から偉大な何ものかを掴むことに努力し、ガッチリとチームワークの取れた民族のスクラムを組んで、日本民主化の革命の真只中に道義的国家観念をもって突入すべきだ。

終り

思いのままに

合田定雄

生きて世に甲斐ある命一筋に

わが大御代の春を迎えむ

私は今どきほど生き甲斐のあることを深く感じたことはない。

終戦当時は日本はどうなるだろうかと思った不安の中におののいた自分ではあったが、ようやく「何か自分を」取り戻した。

そのうち「新しい」憲法も定まり、日本の行くべき国是も定まった。

闇夜から黎明にたどりついた。

日本の夜明けだ。

「夜の後には必ず」太陽も出ることだ。大御代の春を待とう。

大らかな心

吾人は、ややもすれば僅なことに喜び、僅かなことに怒り悲しみ、果ては自暴自棄になって身を誤る者が少くない。

「人間とは」全く浅ましい存在だ。

大磐石の如くどっしりとして、動かずしかも高ぶらず、天を相手とする人も人を軽んぜず、悠々乎「ゆっくり」としてしかも渋滞せず、段々乎としてしかも渋滞せず、駸々乎として進まざるも敢えて退歩せず、大地にどっしりと両足を踏んばって確実に一步一步、正しい強い信念と新しい知識と希望をもって建設へ光明へと……「かくありたきもの」。

司令官

私は○月○日、連絡としてバトパハに出張したとき、ちょうど広瀬司令官は官舎の前の庭園に「育った」花を見ておられた。通りかかった私は

「エンタウから」連絡に来たことを申し述べた。

司令官は何の屈託もなく、慈愛に満ちたやさしい面持ちで労を勞つてくれた。

そして作業隊員のことに関しては非常に心配し、心を砕かれている様子であった。

特に病気に關して、マラリヤやそういう方面に非常に關心を持っておられた。

私は部下をこれほど思う司令官は他にないと思った。

慈愛(あい)満ちしその言の葉の今もなお

心に深く沁みているなり

かつては西方(南西海域)の牙城サバン島の名司令官として(全生命をかけ決戦に備えて)天下に響いた驍將軍広瀬司令官のやさしい姿であった。

すぐる日のわが三軍を叱咤せし

人と思えじそのやさしさは

その司令官も今は内地に還られて活躍しておられるのである。

私はサバン島時代から司令官の風格、人物を注意深く見ていた。

三人の司令官の下に仕えていた私は、この司令官こそ偉大なる人であると思った。

サバン島の防備に關しては正に鉄壁であった。ジャングルを押し分け押し分け、率先して「陣地構築に」突進する姿、「我々」若人達はとても後についていけない。壯者を凌ぐほどの元氣のある艶々した体軀、見るからに偉丈夫であった。

「司令官は」私の心の歴史に深く「刻まれ」、永遠に離れないであろう。

終り

ゆとり

横田満男

人は道連れ世は情けとか。

私達はお互いに持ちつ持たれつの世渡りによって、平凡なる中にもまた楽しい生活が保たれてゆくものであります。

私達は現在の作業隊生活が長びくにつれ、人心焦燥として荒びがちな傾向に走りつつあることは否まれません、それはやるせなく仕事に張合いのない今の境遇に置かれている現在、反動的に生まれたる一現象に過ぎないものと思いますが、このことは一事が万事という一応振り返ってみるべき問題ではないかと思ひます。

よく私達は「お蔭様」という言葉を使いますが、このお蔭様という言葉の気持は、全てのものが有難くできているという豊かな心から生まれるものであつて、お蔭様の気持、有難いという気持がもしも失われたときには、私達の日常生活は殺氣立つて義理も人情もなくなつてしまい、自然破滅の生活に導かれて行つてしまうことでしょう。

ある人はお蔭様も有難いも、くそもへつたくれもないと言ふかもしれませんが、しかし今までこうして生活してきた日常を考へてみると、自分一個人にどれだけの力があるかということに氣がつくだろうと思ひます。ましてや私達のような団体生活を維持していくには、吾人の理性ある心一つに俟つより外に道はないと思ひます。

人という文字の通り、私達は知らず知らずのうちにお互いが助け合つて毎日を過しているものです。

私達は戦に敗れ、身は「俘虜に」落ちぶれても、心の中には日本人であるという自覺を持つております。

今のように束縛された私達の生活を和やかに導いてくれるものは、

自我を殺したゆとりにあると思います。

ゆとりという和一応むづかしく考えるかもしれません。しかし、ゆとりというものは、自分で気がつかずに持つております。

美しい風景に見とれたとき、綺麗だなあという気持ちが湧いてきたときに、ああ松島や松島やというような詩情的な閃きが起こつて参ります。俳句とか短歌とかは、こうした自然の内にできたゆとりの中から生まれてくるものです。

床に就いて眠る前に大概の人はいろいろなことがぐるぐると心の中を駆けめぐることでしょう。

過去の反省とか、今後の空想とか、一刻の間、思いに更けることがあると思います。

たとえ優雅なゆとりでなくても、どつしりと落ちついた心、しかも遅鈍でなく明るく朗らかなゆとりをもって、私達の住むアタップ兵舎の雰囲気と和氣藹々とさせて毎日の作業を愉快にやっていきたいものです。

終り

雨

細田源一

「総員起し」の声にねむい目をこすりながら起き出た私達がとたんに「いいぞ」と叫んだのは、アタップ屋根の低い軒から小止みもなく降り続く雨足が目に入ったからであつた。

雨さえふれば作業は休める。そう思うと何だかホッとした気持ちで、軽い朝食をすますと、作業に行けるだけの準備だけしておいて一服つけた。どんよりと低く垂れ込めた空はなかなか晴れそうもなく、降りしきる雨は兵舎の外に自分達が拓いた畑の甘藷やタピオカの葉をぬらししている。

「なるべく止まないように……」と勝手なことを考えながらねころんでいると、

「雨々降れ降れ母さんが……」と童謡を歌う者がいるかと思うと、

「雨が静かに降るう……」とブルースをやり出す者もいる。

片方ではもう休業のつもりで碁盤を持ち出してパチリパチリと名人碁が始まっている。労働はいやでも石運びはお好きらしい。

「おいK、お前ゆうべ寝言を言っていたぜ、ブラパ【いくら】、ブラパつて、寝ててもトツカール【交換】してやがる」とAが言うのと、みんながどうつと笑つた。

「Kは駄目だよ、秘密なことでも寝言で言うからバレちゃうよ、ハハハ……。」

「トツカールの寝言も言いたくなるだろうよ。」

「どうだい、あのチャイナーの店に並んでいるロテー【パン】と煙草の山【を交換するの】は。」

実際、ここの淋しかったこの部落にこの頃目立って増してきたチャ

イナーの店に並べられている煙草や缶詰や果物は、作業の行き帰りの私達をどれほど羨ましがらせることだろう。

雨はまだ止まない。十時頃になると、思い思いの場所で飯盒を開けて早い目の昼食が始まる。やがて「本日休業……」と号令がかかった。予期はしていたものの、はっきり休業と決まると、また「ワーッ」と歓声が上がった。早速毛布を敷いて昼寝に取り掛かる者もあれば、「早く雨が止まねえかな……」と勝手なことを言っただけで恨めしげに空を見上げている釣り士もいる。

早い目に食った飯盒飯はしばらくすると腹の中で消えてしまったようだ。

外へ出られぬうすぐらい兵舎の中のつれづれ話は、自然と食い物話へ落ちていく。

あのチャイナーの店頭に並んでいるロテーが目の前にちらつく。

「おい、何とかしようじゃないか。」Sが堪らないような声で言い出すと、「ウン、やろう」「よからう」とAやCやKがすぐ応じた。

しかしそれからがなかなか問題なのだ。まずトツカルすべき品物の供出に頭を悩まさねばならない。長い抑留生活の間に、誰のリユックも皆やせてしまった。

結局「俺は胂下を出すよ」とCが情けない声を出す、

「仕方がねえ、俺は内還用のタオルだ」とAがあきらめたような顔でタオルを出してくるという具合で、ともかく軍用金は集まった。

そこで「誰が仕入れに行くか」というのが次の問題で、みんな依然として降りしきる雨を眺めていたが、これは結局くじ引きでFがあたった。「どうもゆうべの夢見が悪かったよ。」

Fは仕方なさそうに雨衣をかぶって出かけて行った。

さつき少し小降りになって止むかと思った空から、またもや一しき

り大粒の雨がどつと地を打って降りだした。

サーッとしめっぽい風がうす暗い兵舎を吹き抜けて、「アタップ」の軒の雨垂れの音が繁くなった。

そのとき、アタップを打つ雨の音に混じって尺八の音が流れてきた。小隊長の手すさびであろう。さらでだに侘しい雨の兵舎に流れる尺八の音は、鎮めようとする郷愁をかき立てるようであった。

終り



馴染みのトツカル婆を描く [036]

煙

俵信次

今晩はいやに暑苦しい。

何回となく寝返りを打っている中に、いつかウトウトと寝入ってしまった。と、

「時間です、時間です……。当直、当直時間になりましたよ」と呼んでいるのが夢うつつに聞えた。

が、またすぐに眠りこんでしまった。すると、今度は前よりも大きな声で「時間ですよ、当直」と呼ぶのがはつきり聞えた。ハッと思つて、

「ウ、ウ、ウ、……ハイ、御苦勞さん」と返事をしながら起き上ると、闇の中に提灯を片手に当直番兵が立っているのが蚊張越しに見えた。

「アーア」と大きな欠伸をして、「ヤー御苦勞さん」と今度ははつきりした声で言う、当直兵はやつと安心したらしく立去っていった。身体中がいやにだるくて、まだ眠い。

ゴソゴソと寝具を片付けて、今朝の当直の者だけ主計料の兵舎を出ると、サーツと薄寒い朝の空氣が五体にしみる。月がぼっかり浮いて、南十字星が烹炊場の上に見える。と、急に風が出てきた。

釜の下を炊きつける。

煙は濛々と立ち上つて、たちまち烹炊場の中には煙が立ちこめる。

薪は思うように燃えない。

油をかけるとバーツと燃え立つが、また油が燃えてしまうと燻り出す。煙に巻かれながら飯に混ぜる豆をチンケースに入れて持つてくると、危うくMにぶつつかりそうになった。両方ともけむくて満足に前が見えないからマゴマゴしている。

「早く退かんか。」いらいらしているから自然と声が尖ってくる。あた

りにある物を投げつけない氣持だ。

やがて薪も順調に燃え出した。

ホッとして汗を拭く。

まだ夜は明けない。

東天が白々と明け始めて鶏の聲が聞こえ出す頃、ヤツと飯もできあがつた。

風も休んで静かな朝である。

まだ眠り覚めぬ兵舎から一人二人と朝起きの良い人が起き出て散歩しているのが見えた。

終り



湯沸し [143]

エンダウの朝

古賀菊雄

辛棒せよ、内還まで！

強く生きるのだ。そう思つて働く。

内還！

その声はジョンピョンと彼方に去つて、ここまでおいでと招く。

一度―二度―三度。そのたびごとに崩れる心に鞭打つて働く。

嗚呼 祖国よ！

懐かしき故郷よ！ 伐り開かれてゆくジャングル。赤銅色の兵の姿。

汗が光る。鍬が光る。

乏しき物と闘い、苦しき境遇に生きていく作業隊。いつしか態度は荒く、心荒びゆく。

苦しい現在から逃れたい気持ち。

いらいらした心。その果ては指揮官に抗う気持ちになるのをどうすることもできない。胸のうつぶんのはけ口を見出し、「自らを」慰めようとする哀れな自分の姿に外ならない。

しかし指揮官は我々を責めようとも叱ろうともしない。

——これもみな宿命だ。誰かは背負わねばならぬこの仕事なのだ。

無理をするな。内還までは我々の身体は大切だ。

家庭に待つ父母、妻子へのたった一つの土産だから。

そろそろ「と」やれよ――

何と優しい言葉であろう。ジーンとして身体がふるえる。

済まない、

許して下さい。そう心に託びつつ働く。この気持、この心は小隊長より中隊長、副長、大隊長となるに従つて兵とともに生きる心を心とする情愛の度が濃くなっていることが感じられる。これは私のみが感ずるものであろうか。

厳しい抑留生活の現実の中に流れる美しい何ものかがある。

〔いまや〕命令服従によつて無理矢理に統一された団体ではなく、この指揮官を中心とする精神と精神の結合した一つの家庭、そうした形ではあるまいか。

不自由な団体生活の中にお互いが助け合い慰め合い、喜びを頒ち、苦しい作業に何かを求め生きようとする力は、そうしたところから生れてくるものであろう。

その現れの一つとして、英軍側の目に映じた我々の作業振り、彼が洩らしたという我が海軍作業隊に対する好感。それは大隊長始め大隊全員の喜びでなければならぬ。

顧みれば、大叢林の開墾に引き続き、膝を没する湿地帯の開拓。

実に汗と泥にまみれた言語に絶する労苦であった。その労苦によつて驚異〔驚嘆〕に価するエンドウの平原は美田化された。

そうして作業はまだ続けられる。

私は考える。

我々は大地を耕すとともに、我が心も耕さねばならない。

日本の芽生えに鍬を取つて立つ責任がある。使命がある。

労役を終えてキャンプに光がつく頃、文化講習室では講習が始められる。暗い今までの生活の中にほんのりと灯りが流れ始めた。

我々の抑留生活にほのぼのと清々しい光が射してきた。

そうだ、エンドウの朝だ！

見よ！

見渡す限り耕地整理された水田は、我等が〔かつて〕隊列を組み進んだ練兵場のように広々として、稲の穂がサラサラと風にゆらいでいる。

かくして作業隊として有終の美を飾ることができ得るであらう。

私はこのエンドウに幸あれと祈る。

終り

愛の復活

岩城清

人間の本性は愛である。愛は喜怒哀楽、善悪美醜、全てを包容する。

言いかえれば、全であり、円であり、神の如く完全にして絶対なものである。

無味乾燥、何の希望も光明もなく、連日作業に心身ともに疲れ果て、不安と絶望と焦燥、獣の如く猛々しく狂的な心理状態の日々を送り迎えている我々にとっては、明日の希望と平和とを取り戻す心の糧が絶対に必要である。

この意味で、忘れられていた愛の復活こそ、荒み切った我々の作業隊生活にお互いの信頼と尊敬とを増し、相互扶助の精神を植え付けて日々の作業と日常生活を円滑に運営する源泉となるのである。

キリストの説いた愛の教えは、大日本帝国の剣と力と富の全てをもつてする迫害にも拘らず、キリスト自身暴帝ネロのため十字架の露と消えましたが、その教えは彼の死後、高弟パウロその他によりまして今日の如く世界を風靡する隆盛を見るに至りました。

このキリストの教えは言うに及ばず、愛の福音と絶対性を説いた世界幾多の文豪の作品は枚挙に暇がないのであります。

トルストイの『復活』、ドストエフスキーの『罪と罰』、シェクスピアの『ベニスの商人』等、皆それであります。

一例を『ベニスの商人』にとってみましょう。彼はこの戯曲の中で、キリスト教と猶太「ユダヤ」教とを比較し、愛の絶対性と正義の相対性を説き、キリスト教の猶太教に勝れるゆえんを力説しているのであります。キリスト教は愛であり、猶太教のそれは正義であります。『ベニスの商人』のアントニオは金に窮しまして、猶太人であるシャイロックから金

を借り受けたのです。

その証文が頗る変っております。即ち約束の期限が来ても金の返却ができないときは、アントニオ〔の身体〕から肉一ポンドを切りとるということです。約束の期限が来ましたが、アントニオは金を返却することができません。友人は彼を救うべく種々奔走するのですが、どうすることもできません。シャイロックは約束通りアントニオに肉一ポンドを要求します。

彼はこれが約束に基づく正義であると確信しているのです。

アントニオと友人は遂に一計を案じ、自分の婚約者を裁判官に扮装させまして、次のように宣言させます。

「汝は約束通りアントニオから肉一ポンドを切り取れ。しかしながら約束には肉一ポンドの外には一片の肉たりとも、一滴の血たりとも余分に流すことは記されてない。汝は約束通り正確に肉一ポンドを切り取り得るや否や。もし汝が肉一ポンドの外に一滴の血たりともこの神聖な法廷に流すならば、約束に悖るものは汝なるぞ。汝は神の御前に重き罪科に罰せられるであらう。」

と。ここにおいて、彼〔シャイロック〕は自己の信ずる正義の行われざるを知って嘆くのであります。友を救わんとする厚き友情は、遂に〔片よれる〕正義に勝ったのであります。

愛とは求めるものでなく、与うるものであります。

外からのものでなく、内からのものであります。我々には父母、妻子、兄弟〔姉妹〕があり、この温い血のつながりによる強い愛情に結ばれております。

我々は肉身の一人が迫害され、虐待されているのを見ますれば、限らない義憤を感じます。

しかして我々の周囲を見ましょう。そこにいる人々は皆同じ日本人

であり、同じ皮膚の色をしております。髪の毛も目の玉〔の色〕も、言葉も食べ物も、みな同じです。

その我々が何のために反目し、憎悪し、猜疑の眼で睨み合わなければならぬでしょう。

ときには狂人の如く〔怒り〕殴り合うことさえあるのです。我々をかくの如く悲惨な境遇に押しやったものは果たして誰でしょうか。

それは連合国であり、今日我々を酷使している英吉利「イギリス」である。我々は迷わされてはなりません。

我々は我々どうして慰め合い励し合って、ともにこの苦しみを切り抜けなければならない立場にあります。お互いにいがみ合うなんて愚の骨頂です。悪魔は自分の〔仕掛けた〕罠におちた獲物を見て、陰で手を打って喜んでいるでしょう。

かく感ずるとき。

我々の心の中にある愛の発見こそ、全てを解決する鍵なのです。

作業隊として〔優先内還どころか〕残留を宣告されたとき、我々の心は真暗な狂的に近いものでした。

それが日が経つにつれて、悲しい諦観的な気持と、土の生活から醸し出される自然の愛情とを身に感じ、仄かな明るさと和やかさを取り戻しつつあります。

作業のちょっとした余暇を利用して皆セッセと農耕にいそしんでおります。

猫額大の土地の隅々までも綺麗に耕され、種子が蒔かれ、苗が植えられました。作物は我々の愛情に応えて大地の恵みと太陽の愛とによってスクスク延びております。

喜んで無心に眺める農夫の心境こそ愛の極致であり、人間本然の姿でもあり、神の境地ということが出来ます。我々がこの心境に目醒めた

とき、この苦しい暗い生活も明るい希望のものとなり、単なる夢のユーピアでなく、現実に第七天国が誕生するでしょう。

全てのものに祈り、全てのものに感謝し、全てのものに祈りましょう。愛こそは人間究極の姿であります。

終り



灯影 [46]

抑留閑話

青木学

●雨宿り

やあ俄か雨だ。

これァ！ 物凄い。

畜生、今少し待ってくれば良いのに。あそこの空家でも借りて、雨の晴れるのを待って帰ろう。雨のしたたれ落ちるアタップの軒へ二人、三人、続いてドヤドヤととびこんだ。

誰も住んでいないと思った家の中から急に喊高いわめき声が耳をついた。

首を伸ばして見ると、盛んに手を振っている。

外に出ろという意味らしい。知らぬ顔でジッとしてみると、この家の主らしいのが出てきた。

「タボレー【だめ】。タボレー。」

ここはお前達の雨宿りに造った軒ではない、とんでもない、と言わぬばかりの変な目付き。とうとう雨の中に追い出された。

シブシブ鍬を肩……無理もない、敗けた国の兵隊だ。

戦争に勝っていたなら、追われるどころか茶の一杯も出さすのに。ああ！ 昔が懐かしい。

雨宿り支那人達にも断わられ

今までは支那人達にもにらみきき

●スコール

サア！ もう少して請取【請負】も終るぞ。

アッ！ 入道雲が出てきた。

早く植付けないと雨が降るかもしれないぞ、と誰かが叫んでいる。

二粒、三粒、顔をなぐつたと思つたら、ザワアッと降ってきた。

畜生、人の気も知らないで、なんと憎らしい雨だ。それでも植え綱はきまりよく張られている。

くの字に曲った腰がしめっぽくなってきたと思つたら、もう首すじから雫がたれはじめた。

スコールや尻から濡れる田植かな

●チャンコール

昨夜寝つきが悪かったと思つたら、なんだか今朝は体がきつい。今日はファストチャンコールだ。

なに、皆に負けてたまるものか。

張り切って鍬を肩に、現場について作業の要領を教えられ、チャンコールがはじまった。

一人一米【幅】の百米が受持で、約二十名が一组となっている。いっせいにスタートをするのだから敗けられない。鍬の先がきらりと光るたびに怪しい黒い土【の塊】が足もとに転げる。

昨日に比べて今日の場所は一般によくはない。木の株が多く、雑草が根強く張っている。おまけに、えたいの知れない蔦がばかにニユウニユウとはいまわっている。

▼1…第一チャンコール。英軍の役務として行う鍬作業。作業隊の自活園のための作業を第二チャンコール、収容所外の民間人から請け負う規則違反の作業を第三チャ

ンコールと呼んだ。

陽は容赦なく照りつける。汗が目にしみてしょうがない。

しかし誰一人として文句を言う者はない。バタバタやる。受取りだからといって無茶苦茶な燥弾〔的〕チャンコールはできない。気が許さない。

一鍬、二鍬、後ろの黒みがだんだんと広がっていく。

草が少なくなってきたと思ったら、例の蒿がばかに増えてきた。なおやりにくい。どこが根でどこが頭やら、まるで獲物を血祭りにあげた蜘蛛の巣のようだ。よし、心臓から真二つにしてくれんと、大上段に鍬を中ほど目がけていやというほど打ちおろした。切れたと思ったら、急に右の目がかすんで痛み出した。

泥がはねたらしい。涙がボロボロ出てきた。手首で二、三度こすって二鍬ばかり振ってみたが、目がゴロゴロゴロついてしょうがない。まだとれないらしい。仕方なく手を休め、腰の泥手拭の先をちよつとなめて、「まぶたの」皮を引張り開け、そつとなでてみた。とれたらしいが、あたりが馬鹿にかすんでる。

隣はと見れば、もう六、七米も先へ出ている。これはいけない、負けてたまるか。遮二無二鍬を振ってみたが、なかなか追いつけない。なんだか足もとがいやに悪くなってきた。そうして足もとの線が馬鹿に広くなって見える。みんなドンドンと進んでいる。一人遅々として残されていくような気がしてならない。たこの上にできた豆がつぶれたのか、振り上げるたびに掌がヒリヒリしてきた。

空には雲一つ見受けない。

陽は容赦なくカンカンと照っている。

溜り水がキラキラと反射して目にしみた。暑いな、風を呼んでみよう

……。

鍬の柄を握ったままジッと瞼を閉じた……。

丘のゴムの実が落ちたのだろう。パツンと音のみ聞えた……。
握りしめた柄がいつか汗ばんでいた。

チャンコール他人の面積せまく見え

●食い気

「腹が減っては戦ができません。おい、まだ飯にらんかな。」

「なんだ、作業から帰ってマンデーも終わってるのに……戦ができませんって。」

「昼食を十時頃やってしまったんだよ。それはそうと、何時頃だい……。」

「さつき一点鐘打ったばかりだ。」

「エーッ、まだ三十分も間があるのか、しょうがないな。」

「オーイ、いい話を聞かせてやろうか。」

「内還か。」

「ウン、うまい話だよ。」

「いつもの食ったつもりでか、止せやい。」

「夕食には確かにある筈だ。作業も順調良くいつているし、この分で張りきつてもらわなくちゃならないって、主計科では特に力のいれたまんじゅうが作ってある筈だ。今に号令がかかるよ。」

「それ本当か。」

「本当だとも、ウソなんか言うものか。」

「デコレーション付きで、一人宛三個つつあるって誰かが言っていたよ。」

「なんだ、誰かがか。ハッハッハッハッ……」

「甘味品を渡す。各中隊敷物を持って主計科に取りに来たれ。」

「ウハッ！ 本当だ。いいぞ、本当だ本当だ。」

大きな爆笑が兵舎をゆすぶった。敷物を持った作業員が各中隊〔宿舎〕

の軒からニコニコと馳け出していった。

中味はどうか！

「行って手伝ってこようか。」

「あわてるない、おっつけ食えるよ。」

重そうにまんじゅうを乗せた敷物が甲板に運ばれてきた。

「ウハッ！ これゃあ物凄い、葉っぱの敷板がひいてあらあ……。」

「こっっているな。」

「烹炊員も骨が折れたろうな。」

暑い日中の作業のこともどこへやら、ニコニコとまんじゅうのまわりに集う男ばかりの和やかないつときが……。

「大きな子供さん。早くマンマなさい。」

行儀よく並んでいる板の上のまんじゅうが笑っているようだ。

嬉しさは週に一度の甘味品

芋だんご凄いと集う大童

デコレーション中味はどうかと期待され

● 休日の朝

七時起しの朝なのに、いつもより早く目が覚めた。

友の寢息が微かに聞こえる。今日は休業だ。毛布を抱えて床をそつと離れた。

まだ明けやらぬ空は、淡い二ツ三ツの雲が残月を名残り惜しげに浮べている。

心地よい風がほほをそつとなでて過ぎた。ドラム缶の茶も沸いたらしい、湯煙が盛んに立っている。

なんとスガスガしい朝だ。今日は何をしようか。まず洗濯をして、洗



湯沸かし当番[111]

濯を終えたら寝るとしようか。寝るのいいが、何だか惜しい気がする。釣りに出かけようか、釣りもよい。しかしあれ以来御無沙汰がちの内田君（同県人）のところへも顔を出したい。

干綱に引つ懸けておいた毛布を広げながら……大きく胸を張ってみた。丘のマンデー場に頭が二ツ三ツ、タピオカ畠の中に見えかくれしている。洗面をしているらしい。兵舎のドレンに面した西側の畠にくの字の腰が浮いて見える。ハゼランでもつんでいるのか、手にチンケースを持ってゐる。肥しをやっているのかもしれない。

休業だというのに早く起き出している。アチコチで「お早よう」の聲が連発してきた。まだ五分前の号令もないのに総員がホトンド起きてゐる。休みの日に限って早く目があく。

人間って変なものだ。きつと嬉しくて寝ていられないのかもしれない。子供の頃、先生に連れられて行つた遠足の朝が今朝のように思い出された。

汁一杯にパン四枚の軽い朝食はすぐ片付け、まずポケットに残しておいた煙草に火をつけた。煙はユツタリと窓辺をはいながら、大気の中に吸いこまれていく。

窓越しを青い帽子と二、三本の竹竿が動いていった。釣りに行くのだろう。

もう洗濯をしたのか、軒越しに雫が垂れている。

例の思案にくれてゐると、さつきから横になつて何か書いていた峯田が、急に何を思ったか、ニッコリと笑つてのつそりと立ち上つた。

そうして頭の上の棚から重そうにリュックを抱えておろした。物の王者と言われている（峯田の）リュックだけあつて太い。うらやましいくらいふくらんでいる。

「天気が良いから、一ツ干してやろうか。」ニコニコしながら一包みず

つ大事に（中味を）出しはじめた。平素はムツツリ屋の峯田だが、リュックをいじりはじめると他愛もなくいつもニコニコしている。

今日は特に楽しい休業だからかもしれない。そうだ、俺も被服整理をやるう、長らく開けなかったから黴がきていないとも限らない。兵舎（の広さ）の割に人員の多い関係で……。したがって棚が狭く、リュックも窮屈そうだ。それでも行儀よく並んでいる。たまにしかおろしてやらない自分のリュックだけに、いつも下敷きの体である。無理もない、やせてゐるから、殊に峯田の隣だからたまらない。今日は幸い先におろしてくれたからいいようなものの、内還用ばかりで無用なものが入つてないリュックだけに、中は綺麗である。きてゐるかと思つた黴はぜんぜん見えない。出したついでだから干してやろう、物干場はどこもいっぱい、殊に毛布が大きく陣取つてゐる。さつき峯田が干したサイドの網が少し見えるくらいで、外はいっぱいであつた。持つていつて一枚ずつかけはじめたがとても間に合わない。峯田のワイシャツや袴下、下着等はまんべんに広げて綺麗に干してある。

特にコットンのシャツがよく目について見えた。

「チェッ！ ただ広くひろげやがつて、まるで自分の干場みたいに。」

いやというほど押しやつたが、まだ（自分のものは）干しきれない。

「しよがないな！」

峯田の（干し物の）上に重ねるようになってようやく干した。コットンのシャツがちよつとおのいたように見えて可笑しくなつた。

「ちよつとばかり損をしたが欲しくて求めた品物はいつ見てもいい」と（峯田が）口ぐせのように言つてゐる内還用の略装も干してある。

「なんだこれか、いつも言つてゐるのは」と思いながら近よつて見ると、生地や色合はそう悪くないが、しかし自分の略装がはるかによく見えた。ポケットの格好からが変に見える。

「なんだ、竹ボタンじゃないか。」フフン……牛ころしを一ついれてやった……。ちょうどそのとき、「オイ！ お前も干すんだったのか、なんだ俺のばかりひろげてすまんすまん」とニコニコ笑いながら峯田は自分の干し物をサイドに押して中ほどの綱を空けてくれた。

何か言うと思ったが、口が変にもつれて「言葉が出ない」……。洗濯に行くのか、チンケースを抱えながらチラツと笑いを残してサツサと坂を下りていった。

峯田の姿が消えたと思ったら、なんだか急にわだかまった。

艦上が怪しく胸を打った。(嫉妬心?)

いつもの俺にも似合わない……。

今やっていた仕草！

変にねじれた心！

自分ながら憎らしく憎らしく、なんだか情けなくなってきた。

そうだ、峯田のようなあの大きな心を持ちたいものだ。

大らかな心！

今朝の空のように広々とした心！ 略装の袖が静かにゆれていた。

嬉しさは七時起こしの休業日

デカリユック抱えて笑みし友の顔

終り

血と文化

原善吉

血朱き一滴が集いであり、民族の血流は東洋、西洋、米州の血流となつて、分流して最高峰の文化を築き上げたことを誰が否定し得るであらうか。血は文化を崩壊しまた新生させるものである。

世紀の戦勝国米国は南北戦争に革命の流血の惨を喫し、革命王リンカーンはここに米血流を根[■]く民族に植付け、今日のニューヨークおよび諸都市に雲を突く摩天楼文化の白亜館「ホワイトハウス」を築き上げたのだ。

東洋においては大和血流が高潔な幾千年の伝統を保持し、幾度かの流血を見て、中世期に優美なる五層の天守閣を有する城郭を築き、大和独特の文化を創造し、世界文化に冠たるものとなった。

これとて流血のため破壊され、さらに建設された血の文化の結晶である。

隣国の支那を見ると、始皇帝の築きしかの雄大なる万里の長城は何といつても支那血流の世界に示す大なる文化の誇りである。

転じて西洋を見れば、ローマ大帝国の巨大なる大架高樓、櫛枇せる大建築物、数万人を収容するという大演舞場、高陵水道等々……。

かつまた西洋文化の始源地アラビア、エジプト文化。幾千万人、幾千万ドルかの、高等数学によらざれば算出できざるほどの費用を費やして完成されたピラミッド、スフィンクス等、エジプト王国の墳墓は残れども、幾度か血の洗礼を受けて両者ともに西洋文化の殿堂を築き上げたのだ。

東洋文化の始源地印度ガンジス河河畔に発生した王宮文化の感化を受けた文化は幾多流血の惨をなめながら東洋全般に流布されたので

あつて、血なくして文化は榮えざるのであろう。

かくしてローマ、エジプト、印度文化は、幾多の迫害と闘いながらも、いつしか大陸をはなれて島国によつて闘争は活発化してきた。

その分野は西洋にあつてはイギリス、東洋にありては日本即ち大和血流である。ナイル河畔の文化はイギリスへ流れ、騎士的血流となつて王国を形成したのだ。

そうして船舶を創造し、武装を整備して、遂に近隣諸国の侵略を開始して充分なる成果を収めたのだが、更に彼等は遠洋に冒險的な探検を始めて、遂にかのアメリカ大陸を発見、凱歌を掲げたのだ。

それからイギリスはこの新大陸に囚役者を続々と流罪あるいは移民の形式にて送つたのであるが、彼等囚役者は強大なる団結を保ち、前記の如き民族の革命を起こし近代文化の殿堂を新大陸に打ち建てたのである。

かくして欧州諸国においても次第次第に文化の殿堂を築きあげてきたが、血流の闘争はますます激しくなつて各民族に文化革命の警鐘は乱打された。

遂に東洋においては大和血流と支那血流は衝突し多大の犠牲を出し、しかして大和民族の勝利となつたが、それも束の間、露国を主嵬〔首魁〕とする欧米諸邦は再び大和民族に圧迫を加えてきて、東洋血流と西洋血流が日露により干戈を交へたるも、英米の仲裁により東洋文化と西洋文化の婚姻を見て世界文化の新生となつてたん生した。

欧州においては独逸が遂に一発の拳銃により火の手を挙げたが、英仏その他の連合軍によりもろくも敗れ、独逸帝国は崩壊せるも、文化は更に一步科学文化へと移行してきたのであるが、また露国にありてはレーニンが革命を起こし帝政を倒しスターリンによつて赤色旗の下に完全な蘇連〔ソ連〕文化を建設せり。

かくして世界文化は最高峰に達してきたのである。

英国は地中海、紅海の南海に通ずる運河の発掘貫通に成功し、世界を驚嘆させり。

これに対して米国は大西、太平洋の両洋貫通に見事成功し、我が日本は世界最初の試みたるシールドをもつて関門海底貫通に見事成功し、我が文化に凱歌をあげり。

かくの如く近代に到り各民族の血流は狂奔を続け、遂に近代文化は万里の長城に匹敵する文化の粹を集めた海の巨城六万数千屯の巨艦を大和血流が造り、米血流は空に浮かぶ要塞たる巨大なる飛行機を造り、欧州血流は超砲口ケット弾等を造り、各文化はますます向上して一触即発の形勢を示せり。

かくして再び欧州においてはヒットラーを中心とする独逸文化の新生の烽火はあげられ、相次いで東洋においては日本が大和文化の新生の烽火の火蓋は切られたが、再度独逸血流は完膚なきまでに粉碎され、大和血流もまた同じく東洋文化の殿堂六万屯の海の巨城を海底深くほうむり去られ、悲惨なる敗戦の淵に落とされたのである。

この民族の闘争は血流の相違によつて永久に絶えることなく繰り返されるであらうが、原子力！の発生は更に民族の血と文化に偉大なる革命を与えた。

しかして大和血流が再び文化の金色塔を打ち建て世界に君臨するのはいつの日であらうか。

血は文化を速進させる推進力である。

終り

広野

俵信次

微風の吹く広野に立てば
吾が住む家の荒廃に心を痛める
バナナの葉陰ある兵舎
そしてその中に住む明朗さ
どこからか若人の唄が
微かに流れてくる
太陽はサンとして
吾が五体にそそぐ
広野は涯しもなく続いている

非登録患者日誌

梶塚隆基

昭和十三年医学部入学以来いつの間にか既に十年近く閲し、同級生の大学院に残った者は恐らく博士号も獲得した頃、乗組隊付作業隊とノラリクラリの軍医生活で職責を糊塗するに汲々として自信がないままのその日暮しに、我ながら顧みて空虚な過去現在が嘆かわしい。

以下小生の思い出、失敗を順序なく書き綴り、紙片を汚す次第である。杜撰な点をご寛容を乞う。

一、現病歴

今不眠と倦怠に毎日悩むのは香しからざる医者志願の発足に遠く病因があるらしい。N高等学校願書提出時、科目選定の際考えた。文筆はもとより国漢、英語に自信がないから理科系統にしよう。さて理科、独逸語科で三年間、おおよそ当時の一般高校生の風潮通りデカダンな内容のない生活をおでん屋と珈琲店でデカンショデカンショで過ごし、いよいよ一生の方向を決定すべき大学まで来てしまった。

振り返ってみるに、文化系統のみならず数学、物理、化学も及第点ガツガツで過ごしている。これじゃ理学、工学は駄目と、残るところ生物学だけで、農科、稗物に一生を打ち込むには金はなし、頭はなし、さりとて月俸五十円也の副手で象牙の塔に頑張る殊勝さもない。

全く意欲なしに全く仕様事なしに曾祖父以来の医者をついでしまっただけである。

ときどき医学の本質を考え、医学徒のあり方を熟視するとき、微かに良心に咎め、何とかせざるまい、とこれでも稀には発憤、地に爪跡を残すべく決意するのであるが、己の能力と意志に悲観させられ、啼か

ず飛ばず逼塞してしまうのである。

夜、寢床の中で目の冴えるまま沈思、作業隊付軍医官に意義を感じ、恐らくは今後何ら変哲なかるべき後半生の中、今が最もプラスな人生の一部だろうと、あれやこれや生活のあり方考え方を馳せまわるのであるが、翌朝離床すれば、天気清朗にして綺麗さっぱり念頭に止めず、惰性診療生活を反復しているのである。

二、臨床講義初講話

医学部二年の終り、いよいよ初の内科臨床講義が開けることになり、最も聴き甲斐のある講座と、さぼった基礎医学の分も取り返すべく、Y教授の臨床講義に入った。

講師の腹腔内科の権威たるY博士は、多数の教室員を率きつて患者とともに間もなく現れた。

教授自ら得意とする直腸癌を患い、お手のものの早期診断で摘出術を受け、造られた人工肛門のところを服の上から左手で押え、一、二年内に十中八九再発の運命にある苦悩を耐え、温顔壇上から理路整然たる分析的な講義をされた。医者己の死病を自覚、これほど惨酷なものはない。死刑囚が受刑直前、死を客観するのと同じである。

紹介された教材の患者は三十八才の男子で、小ザッパリとした和服で沈鬱な顔貌で引き出された。病歴によれば入院数日前、軽い眩暈と頭痛の後、突然言葉を発生せなくなってしまう、主訴は発話不能ただ一つである。

教授の示された患者の手記には達筆に常識豊かな筆致で言葉だけ出せない奇病をるる綴ってある。

身体の他の部分は全く健全で、読書不自由なし、また他人の話も字も良く理解でき、耳発声器官も犯されていないのに拘らず、人に話しかけ

ることとか人の言葉を真似することができないのである。一体談話を営むためには大脳皮質に次の中枢が存在している。

(イ)運動性言語中枢⇨次の中枢の監督下に言葉を音響として発すべく言語筋に運動命令を出す中枢

(ロ)感覚性言語中枢⇨言語を理解する中枢で幼時から習得した言語記憶像の貯蔵所である

(ハ)読書中枢⇨文字了解の中枢

(ニ)書字中枢⇨書字運動を支配する中枢

これらが相互に、また概念中枢やその他高等な精神の中枢と連絡し、読み書きや会話が可能となる。この患者はその中運動性言語中枢から命令が言語筋に伝達される連絡経路が途中で破壊されてしまったという帰納法推定である。

両言語中枢自体並びに書字中枢、読書中枢は犯されていないので、黙読、書き取り、作文、他人の話の理解には事欠かず、言葉を知っているくせに口に出して言えないのである。下された病名は「皮質下性運動性失語症」(言語症)と。

判り易く講義して頂き、四百四病中の一奇病を覚え、また前記中枢の選択的な犯され方によつては失書症、失読症も事実上存在することを知り、神の悪戯に溜息をついてしまった。

なおY教授はご自身推定通り、翌年我々が四年生のとき癌が再発、他界された。ほとんど腹腔全体に転移する死の一ヶ月前まで冷静な臨床講義を続けられたことを附言しておく。

三、猫いらず自殺(同じく臨床講義より)

子供の頃から自殺といえは猫いらずが頭に浮び、きな臭いチューブが思い出される。が、近頃は苦痛の甚だしい猫(いらず)を飲む馬鹿はおらぬ、

冬期投身の少ないのと同じで、楽な催眠剤や速効の青酸カリを選ぶ。

大東亜戦直前、緊張した世間の中でその愚を決行した不心得者は聴講二百の学生の前に招き出された。

日誌に曰く、当年二十才、男子、S市のさる歴とした神官の御曹司である。もう燐中毒の症状は緩解し、ピンピンして頭をかきかき出てきた。ちよつと気障な服装の小生意気な若僧で、態度のひょうきんさに講堂の慎みを忘れ一同思わず失笑してしまった。

動機は連日お賽銭をごまかしてはカフェー漁りで遂に父、神官の大目玉を食い、申し訳に猫を飲んで一芝居を打ち、すんでのところで神様の御許に行きかけ、御霊頭によつてか、あるいは医学の適応加療によつてか一命をとりとめ、かくの如く学生の前に不孝の愚と急性燐中毒の臨床例を示した次第である。

K教授はもう一ツK大学医学生の毒薬自殺の一例を紹介してくれた。医学生でありながら自殺の毒物の選定を誤り、服用した毒物を全部嘔吐して未遂に終わり、駆けつけた先生にその無知をからかわれ、発憤して数日後、理想毒薬を服用、目的を達成したと。

更にこの教材には後日譚がある。この講義の約一ヶ月後、悪友連と連れだちS市の俗称ハーモニカ長屋にて電気ブランを傾けていると、スタンドの端に酔眼朦朧と性懲りもなく猫患者が管をまいていいる。それを友人が気付き、つい声をかけると、こちらを医学部学生と見てとり喰つてかかってきた。

「俺は先だって恥を忍んで皆のため医学の教材になってやったんだ。それなのになぜ俺が講堂に入ったとき不謹慎にも笑ったか。」

と今度は急性アルコール中毒の症状を示現してくれた。

四、現地産科診療

思いもかけず陸上勤務を命ぜられ、S島(サバン島)に着任したところ、兵員のみならず一週二回の現地人市民病院の診療を命ぜられた。現地語は皆目知らず、ドレッサーの片言の日本語を介し、小児科、婦人科、精神科、はては産科まで押しつけられ、禄に聞かなかった大学時代の講義のウロ覚えを唯一の頼りに強心臓でやつてのけた。判らぬものは言葉のせいに、治らぬものは薬品不足のせいに、放任は多忙のせいにして局面を糊塗してきた。

ある日医員病室で数十名のマラリヤ患者を診察していると、現地人助産婦が真黒い団子鼻の頭に汗をにじませて難産の急報である。たいていのものはごまかす自信はあるが、お産だけは苦手である。

だいたい、大学時代、産科の講義なんか、どうせ我々は戦争行きとばかり全然聴かなかった。これだけは子供を母子ともに健全に取り出さぬことには面子が立たぬ。しようがない、軍医長に押しつけようと恐る恐る申出ると、軍医長も自信がないと見えて、髭をひねりひねり悠然とお前の職務だと簡単にはねつけられた。

ええい、ままよ、この島に一万近く人間がいて医者は軍医長と小生一人である。行かざるばなるまいと決心の臍を固め、屠所に引かれる思いで助産婦と自動車に乗った。途中あれやこれや数年前大学で聴いた記憶を辿りさぐったが名案がない。落着かぬまま、手でうまく出なかったら帝王切開でもやろうと度胸を決め、さり気なく患者の前に出た。

一族郎党十数人の付き添いに囲まれて、三十才前後の経産婦が氣息奄々として目の玉だけ動かして視線が小生の顔に縋り付き、切なげな顔色が小生の無能な心を喰いさいなむ。ややもすれば怯む心に鞭うって診察を始めた。

胎盤早期剥離により胎児は既に死亡数日を経過し、内診してみると

おまけに逆産である。

母体も衰弱甚だしく一刻の猶予も許されず、かつ産褥熱の疑いでもある。

小生も初めてのお産のこととしてしばし呆然としてしまった。放置すれば母体は今晚まで持つまい。大勇猛心を奮い起し、袖をまくり上げ長靴を穿って、既に皮膚が糜爛した死亡胎児の取り出しにかかった。

刻々に知らせる呼吸脈性の警報に対処してドレッサーに処置を下命した。学生時代一度だけやった逆産の模型演習を唯一の頼りに、精魂を打ち込んで一心不乱、全くこの母とともに神に祈りながら手術を開始した。言葉の通じぬ助産婦の気の利かなさを罵り罵り「産婦を」手術台上架せしめ、消毒を終り、ゴム手袋もない現地人病院の応急手術を長く

長く感じたが、恐らく約五分くらいなものであったろう。

ヌルヌルめくれて来る死皮、生臭い脂肪が肘のところまでこびり着き、すべててなかなかできない。産道の隘路と胎児の回転を考え考え、窒息しそうな悪臭を放つ糜爛死児をどうやら肩まで引きずり出した。最も大きな頭が産道にひっかかってどうしても出ない。

産婦は呻く！

ドレッサーは脈の衰弱を連呼する。脂汗が長靴の中を流れて、頭は火がついたようにカーツとなる。どうしても頭が出ない。万止むを得ぬ首を切断、穿頭を行い、脳実質を抜き取って頭を小さくして出すことに決心した。なにしろ泡を食った素人産科軍医大尉のこととて、気ばかり焦って首が切れない。手先が震えて頸椎じゃなくて自分の手を切断しそうである。首は半切断のままこの方法を断念して、熟考数秒の後、指を胎児の下顎にひっかけて頭部の産道内回転をやり直すことが一瞬閃いた。気を取り直してやってみると、やっと出てきた。取り出した胎児は全くグロテスクそのもので、皮は殆んどなく、首は小生の鈍刀にかかり半分千切れてぶら下っている。母体はどうやら持ちそうである。半分放心の体でやれやれと腰を下ろし、これで万事成功と目を細めていると、助産婦が何か盛んに喚いている。

ハッと気がついてみると、まだ胎盤を弛緩した子宮に忘れて置き去りにしている。あわてて再度手で取り出し、子宮緊縮剤、リンドル強心剤を与えて手術を終った。

なんとか現地人の期待に副い得、綿のように疲れた身と気だるい満足感を持って帰隊後、詳細を軍医長に報告、窮すれば通ずるの感を深くしたのである。数日後、患者の夫君が正装して日本語で「ドモ、アリガトウ」と一揖してパイヤを置いていった。



診察室 [037]

五、恩賜の煙草

昭和十八年七月二十日、S島の病舎にて英印度洋艦隊の数千発の艦砲射撃を受けたときの手記である。

二年前は未だ我が連合艦隊は軒昂として活躍、軍艦Hに乘組み、艦橋の戦闘配置に胸をふくらまし、ガ島米飛行場の主砲一千発の斉射を眼のあたりに見、三斉射にして既に炎々として燃え盛る敵陣を眺め快哉を叫んだこの身が、逆に英軍の主砲を身边に受けながら患者とともに病舎を奥地に移動するときの気持は何ともいえない。

海上の敵には手が届かず、敵弾に撟られるまま二時間にわたりトボトボと新応急治療所に行軍した。天蓋のないM陣地に到着すると衛生兵は全部無事である。早速治療所を開設すると、間もなく濛々とした砲煙と砂塵の中から最初の患者が担がれてきた。

陸軍飛行場大隊の若い一等兵で、左下腿の貫通砲弾弾片創でふくら脛が鶏卵大に刳り抜かれ、肱骨がザクザクになり、創面は赤黒く哆開、創底の壊死がひどい。

後から後から搬入される戦傷患者に追いかけられながら、創面を大きく切除し、洗浄の上予防血清を打ち次に移った。

早朝よりの砲撃も、正午には英艦隊隊列を組み悠々と引揚げてしまった。午後数十名の戦傷患者をつれ、散乱する弾片、千切れた電線を踏み越え、倒れた椰子林の中に無事残った病舎に帰り、一通りの一次処置を完了した。病舎は森閑として、時折重傷者の呻きと、鎮痛剤を譚言のように叫んで軍医官の名前を呼ぶ声だけである。

一段落のついた気易さが出て、巡検にまわった後、血なまぐさい手を洗い寝室に入ると、戸外の食用蛙が不気味に吠え、血の臭いが鼻につき、殆んど一晩まんぢりともせぬ。翌日より戦線の二次処置に取りかかり、一人一人、今度は念入りに後送できるばかりに診てまわり、前記陸軍の

傷者の前に来ると、受傷後三十時間にして三メートルはなれて既に嘔吐の出そうな腐敗臭がする。愕然として織帯を開くと石榴のように緑面が口を開き、周囲は膝のところまで蒼紫色を呈し、ムクんだ紫の皮膚を押すと腐敗で生じたガスがピピチと不気味に触れる。脈も呼吸も悪く、陸戦に最も恐れられているガス壊疽の合併することは一目で明らかである。

ノモンハン事件、漢口作戦、前欧州大戦等におけるガス壊疽の惨害は幾度か聞き、また読み知ってはいたが、始めての自験例の前に佇立、慰むべき言葉もな

が目を苛責する軍医長とともに

あらゆる措置

視するため灯

下して看守つ

深更二時す

も拘らず生き

下肢の毒素は

一両日で顔は蒼黄色に光沢を失い、彫刻のように光っている。視線を空間の一点にドンヨリと固着させ、星一ツない膜のような暗い戸外に譚言を這わせるように洩しつづける。他の患者の呻とともに、地に吸い込まれるような鬼気をかもし、腐敗臭は妖気をかり立てる。

「軍医殿！ 軍医殿！ 俺の襦袢に恩賜の煙草がある。恩賜の煙草があるウウ……。」

「軍医殿！ 軍医殿！ 死ぬもんか、治ったら恩賜の煙草を差上げましょう。」

「ああ、この映画はつまらん。ウーン息が苦しい。あっちの映画館

宿舎祭
木下睦雄
鼓音鑿々和歌
炬火燄々賀庭酣
辛苦半歲克得耐
乱舞尽今夕散鬱

い。荊が刺すように我る。一分の余裕もなくに大腿高位より切断、を行い、術後病勢を監をかけた枕頭に腰をた。

ぎ、早期の高位切断にながら腐敗し続ける既に全身に及び、僅か

に行こう……。ああ母さん。ポケットに恩賜の煙草がある。これを上げよう……。」

「軍医殿！ 軍医殿！ 大丈夫ですか。俺のいうことを聞いているか、大丈夫だ、恩賜の煙草があるぞ……。恩賜の煙草が……。これがあつたら大丈夫だ。ウーン……。俺は死なんぞ……。」

譫言状態を翌昼頃まで続け、「恩賜の煙草」を終始口にして永眠した。兵隊にしてはやせ過ぎた体を整えてやり、合掌させながら、彼の魂のよりどころとして、汗まみれの恐らく一年以上も肌身はなさず大切にしていたに違いない煙草の一箱をしつかりと胸に包んでやりながら、死に方の綺麗さに御霊安かれと黙祷……。

面を上げ得なかった。

六、マラリヤ脳症状

マラリヤ脳症は主として熱帯熱に合併し、あらゆる精神病の形態とか神経脳膜症状を呈し得る。

その恐るべき死亡率はS島在勤中終始小生の神経を責んだ。今まで朗らかに話していた患者が数十分後、突然昏睡状態に陥り敢えなくなつたり、「敵機三百B島沖通過、N度方向よりS向飛行中 終り」と当直軍医官をして深夜「配置に付け」をかけさせたり、そうかと思うと「敵C地区に上陸」と絶叫、武装して窓から飛び出し椰子林に昏倒、総員を捜査に狩り出したりする。

その幻想、幻覚は思わず失笑させるもの、鬼気迫るもの、涙を絞らせるもの、千変万化である。

ある日、その日もG〔後藤〕銃隊は未明よりジャングル戦闘訓練である。戦死した前任のY〔吉沢〕大尉の遺志を継ぎ、新大隊長G〔後藤〕大尉は漢口作戦の体験の粹を傾注、陸戦の神様の噂に違わず砲術学校以上の練

度を積むのだと猛演習を展開している。

もう四時をまわっている。「今日も十二時まで」かなとウカウカ藤椅子の上で珈琲をなめながら相済みぬ気持でたると、当直衛生兵が急患を駆け知らせてきた。

御輿をあげて行ってみると、節度の正しさから一目してG隊と判る数名の武装兵に取り巻かれて、顔見知りのS一水が装具にしめつけられて、汗を外衣まで透し痴呆のように横たわっている。すぐ武装を外し、身体をふいて強心剤を打って診察すると四十度の高熱で、意識は若干混濁している。心音も不純で、脈の緊張悪く、肝臓は肥大し、脾臓も明瞭に触れる。更に軽い項（ウナジ）の硬直と嘔吐等の脳膜の刺激症状も出ている。重症熱帯熱マラリヤの疑い充分である。

検血を急がせ病室に搬入、バグノン、食塩水、高張葡萄糖、強心剤を矢つぎ早に与え、今夜は徹夜だなど覚悟して委細を衛生兵に託し夕食に引き上げた。間もなく検血員が熱帯熱マラリヤ原虫の催熱帯が無数に見えると結果を知らしてきたので、「彼の所属する」銃隊に重症診定を電話すると、大隊長は付添いの兵隊二人とともに薄暮の中を戦闘服装を取りかえもせず様子を見にきた。

今演習を終ったばかりで食事もまだといいながら、「Sを伝令に出したところが帰らぬので捜したら蛸壺に〔落ちて〕昏倒している。物凄く熱なのですぐ車で御願いました。今日は少しやり過ぎたかな」と言葉少なに溜息をついている。Sは十九才、精悍な頬骨の間に未だ幼い澄んだ眼をした、G大尉秘蔵の伝令には持つてこいの志願兵である。

都々逸

福留貢

何のこれしき

苦勞にやならぬ

伸びる真竹にや

ふしがある

Sのため診なかった午後の要注意患者を巡った後、まだ気懸りで巡検後と二回Sを診察したが、小康を得、脈搏、呼吸確実にすやすやと、戦友二人に護られながら眠っている。これなら大丈夫と安心して就床してしまった。

病勢急変は夜中が多い。二時、泥のように眠っているところを揺り起こされ、夢現の耳に危篤を知らせてきた。ハッと「Sだな」と反射的に閃き、跳び起きて病棟に行くと、既に衛生兵が三名、蒼い眠り足らぬ顔で酸素吸入器やリンゲルを持って待っている。

蚊帳の列をかき分けSの枕頭に来ると、周囲の患者はただならぬ空気にSの叫声のため片唾をのんで起きている。

「ワーツ、葬式が見える、葬式の行列だ！　グルグルチャイナが走る、あそこだあそこだ。」

ぎょっとしてSの指を辿ると、十二時頃より降り出した豪雨の中に厠の薄暗い電灯が物の怪のように霞んで見える。

次の瞬間、蒼黒い硬直した顔をグイと挙げて、厠の灯へ鰯のような感情のない視線を貼りつけ、壁の存在さえ気がつかぬらしく、とび付こうと身構えている。

床の中で走ったり、空を翔ったり、空間を掴んだりする。周囲の事象に一切無関心な相貌で妖気を孕んだ銜氣的な姿態。彼は今現実と全然別個な彼だけの世界に生きている。

マラリヤの脳症だ。マラリヤの幻覚とたわむれているのだ。肉体だけが単調な雨声の中の我々の世界にいるのだ。

ともすれば彼の世界に引きずり込まれそんな恐怖を払い、衛生兵と力一杯、彼をベッドに押えつけた。この脈搏でどこから出てくるかと思う物凄い力だ。彼の胸は焼けるように熱いくせに手足は冷たく、脂でまるで魚にさわった感じだ。顔は高熱にも拘らず蒼黄くくすみ、腐敗尿臭

を発している。心ならずも寝台にくくりつけ、喰いしばる齒列を開口器でこじ開け、脊髓液放出、高張糖、強心剤等を喧嘩腰で処置し様子を見つめた。

衰弱する心臓とは別に狂暴な挙動は一向に止まず、油断をすると紐を切って酸素吸入瓶をはねつける。モヒに心臓が負けるか、モヒの鎮静作用が患者を安静にし心臓を保護するか、モヒの力と心臓の力を睨み合せ懸命の手段を尽した。

在庫少ない薬品を注ぎ込み、これでもかこれでもかと約二時間の死闘にも拘わらず、数回のチェーンストック代呼吸を最後に、火のような熱のまま心臓は停止した。

これで本当の安楽な別世界に行ったのだ。戦友は泣き咽び、「弾で死ぬならジャンゲルで蛆にまみれても本望だ」と昂然としていたSの裏切りを責めながら、まだ熱い瞳孔の拡大した屍体の処置をもう少し待ってくれと。

今は穏やかに眠るSの顔を手拭で自分の目尻と交互に拭いていた。

七、内地の風

昭和十九年七月下旬、S島は爆撃と艦砲射撃の試練を経ていよいよ落着きを見せ、水際撃滅の陣地整備に外出を止め、昼夜兼行で奔走。各自護りは堅しと、たとえ内地が占領されてもS島は残ると張切っていた。ところが病舎は逆で、軍医長必死の予防工作も及ばずマラリヤ患者は激増、遂に六百を突破、更に薬品の払底のため医務科員の心痛は深刻であった。防備前哨戦は病舎で既に開始された形で、我々(軍医官)も一人で「二日に」二百人以上を診療、毎夜あの部屋でもこの部屋でも重症を注進してくる。

夕刻、当直衛生兵は五十枚以上の高熱患者日誌を届け出、先任下士官

はS島全部で葡萄糖七十本、バグノン六十本、食塩水百本だけですと泣きそうな顔で言ってきた。これで常識通り処置したのではただ一晚で使い尽してしまう。戦争は常識ではない。

更に「マラリヤ」予防硫錠〔錠硫酸キニーネ〕も、いくら切りつめても一ヶ月半分しかなく、折も折、軍医長は心労の余り臥床してしまった。こうなると診療は実に惨酷で苦痛である。薬さえあつたら身体が続くかぎりいくらでも頑張れる。

銃隊の兵隊は夜の二時すぎまで戦車壕を掘っているのだが……。薬がない……。

錠りつく重症患者の視線を冷たくはずし、一本の葡萄糖を節約する軍医の心は、半分鬼にならざるを得ぬ。

司令部に出頭、T〔多田〕少佐に補給便の前途を伺ったところ、P市より薬品満載のK丸、E丸は我々の祈りに反し相次いで撃沈され、内地より長途廻航された徴用機帆船があるらしいが、それに分散搭載したから一隻くらい届くだろうから早速手配する、と一縷の望を与えてくれた。

その頃S島より更に遠隔のK. A.〔アンダマン・ニコバル〕列島の〔海軍部隊の〕陸戦隊は更に凄惨で、逆にS島に治療品、補給を懇電し、「六ヶ月間薬品の補給なし、マラリヤ八〇〇、脚気重症四〇〇、飛行便にて御援助を乞う」に、またリレー式にA〔アンダマン〕からSに後送される患者は正に幽霊で、悪疫質の標本みたいな者ばかり、我々が前線の離島を自負していたS島に上陸するや、涙を流してここは天国ですと言う。

こんな窒息しそうな一ヶ月、我々の骨を削る焦心の中を六ノットの鯉船団はS O島の接岸夜航行をつづけ、敵機にも敵潜にも出合わず、棧橋出迎の医務科作業員歓呼裡にヨロヨロと入港してきた。

硫規百万錠、のどから手の出るようなバグノン一〇〇〇本、真物の煙草まで包んである。十年前に見た「フランス」映画『地の果てを行く』の一

場面に、長い断水包囲攻撃を受けた一外人部隊兵が水一滴と生命の取りかえつこをすべく、餓鬼の如くトーチカより忍び出て、水を口に含んだ刹那一弾を受け、ゴクリと水を飲みこむと莞爾として果てる、あの感激に満ちた場面が目につぶ。

話が横にそれたが、この感謝の的の機帆船は薬とマラリヤ船員を三名揚陸して、休む暇なく敵潜の海へ再び新補給任務に出港した。

翌日診察を始めようと思つて室に入ると、患者椅子に今まで見かけぬ十二、三〔才〕の日本の子供がチョココンと前番の兵隊さんのやった通り、一人前に手を腰に頭に左に向け乗っかっている。

昨日の船のマラリヤ船員というのはこの子供のことだった。

丸二年半、戦地の兵隊以外に日本人というものを見たことのない我々には、この可愛い日本の子供の出現は、長いこと味あわぬ内地のふくよかな梅の蕾を掌にした感触であつた。

ほんとうにこのFという名の子供は故郷の磯の香さえただよわせている。おまけに後に二人の兄らしい漁師が、世の中に戦争も悪もありません、村と舟から一步も出たことはありません、という善良そのものの風貌で、恐る恐る「わいども三人、お手数をかけます」とびよこんと頭を下げた。

夢に見る内地の人情濃やかな家庭をそっくりそのまま陰惨な病室に春風駘蕩として運び込んできた感じである。

これに母親でもついていたら満点だ。

神経衰弱に硬直した「私の」顔が思わず綻び、まわりのマラリヤ貧血のひげ面達も、珍しいものでも見るように眺めまわし愛しんでいる。

「なんだマラリヤか？ 坊主！」

「そうです、熱が出てかなわんです！」

「年令は？」

対孤灯

矢次貞雄

欲払雑念風動灯
欲執筆煩虫迷卓
心気不定遠道夜
向学勤々対孤灯

「十二です。」

忙しいのを構わず、しばらく鹿児島弁のF坊に話しかけて聞いてみると、彼等の一家は戦争で油も漁具もなく、一族で編成の乗組員は舟もろとも海軍に望んで徴用され、(祖国から遠く数千キロ離れたS島に補給任務のため挺身して来たのであった。

数日の間、兵隊達の中につくねんとしている内に「マラリヤも」全治してしまったが、帰るべき舟がない。止むを得ず二人は烹炊所勤務、F坊は小生の従兵Iが世話することになった。眼差しが故里に残した弟に似ているF坊は、その後毎日注文のうるさい小生の珈琲を気軽に運んでは机の側で家(舟)に帰してくれとせがむ。舟の者は舟、陸の者は陸が極楽、彼の恋うる家は長途敵潜の海を乗り切り再度入港、お礼のバナナを山のように持つて父親の船長が子供達を引きとりにきた。

彼等が船に乗って去ってしまうと、しばらくはうつろな気持ちで、従のIとともにF坊の鹿児島弁を懐かしんでは人知れぬ地味な徴用補給品の武運長久を祈り合った

戦争が終ってバトパハにいたとき、船長やF坊達も元気でバトパハに来ておって、甲地区診療所の軍医長のところへ会いにやって来たということを聞いた。

今頃F坊達は「我々より先に」内地に帰って九州の沿岸で鰹の漁業に活躍していることだろう。

終り

自由詩

足

奥沢博

朝露は

しっとり落ちて

この足を

心地よく濡らす

今朝もまた

この畦道

この足で渡りゆく

若草は

そよそよと

この足に戯れる

今日もまた新生の業に

この足で励みゆく

戦記



レイテ沖海戦記

塩谷勝

昭和十九年十月十四日

その年の三月三十一日長崎造船所で竣工した対空駆逐艦霜月は僚艦と離れ、単独鹿児島湾内で台湾沖の戦況如何と作戦内にて即時待機の状態にあった。

レイテ〔沖〕海戦記……………塩谷勝

搭乗記断抄……………松本晴雄

ハワイ奇襲記……………高橋平四

パラワン遭難記……………阿部幸輔

レイテ突入記……………中内加寿雄

就役して未だ日の浅い霜月もすでにその頃までにマリアナ作戦を初陣に数度の作戦にも参加して、乗員の訓練度も度々の経験にて満々たる自信振りであった。

時しも台湾沖で久し振りに陸海の空軍によって挙げられた戦果は今までに苦い思いを重ねておった矢先で、誰しもの留飲を下げたのであった。

しかし乗員の気持ちは刻々に入る無電情報に刺激されてひたすら即刻の出撃を願っておった。

ギリギリと迫るものを感じながらも、戦闘訓練の間を利用しては対潜見張法は潜水艦乗組であった水雷長により繰返し教育され、長路の出撃を予想された。

一方台湾沖においては航空兵力の少ないため遂に長砲を逸し敵主力を撃滅することを得ず、「艦隊はこれを追撃南下中」との報あり、同時に霜月にも待ちに待った出撃命令は来た。

十月十五日錨鎖は巻かれ、遊撃部隊に合同すべく内海西部に回航した。

出撃準備

内海西部(柱島)に投錨した霜月は直ちに僚艦に伍して燃料や真水が補強され、呉軍港より派遣された汽艇曳船ランチ等は兵器の点検整備

を行うため忙しく各艦の間を往来していた。

艦長畑野少佐は旗艦に集合して夕刻作戦命令を受けて帰艦した。艦内は今までの出撃と違い燃焼物ならびに戦闘に不要な物件の取外して大童であり、中部甲板には文庫、蓄音機、藁蒲団その他の■が山積され、ホーサー、ワイヤー釣床によるマンドレッドは更に嚴重に艦橋、電探、電信室、砲塔等の主要部に施行された。

翌日も朝から多忙を極め、物件揚陸のため第二廠沖に回航。艦は微速で進みながら汽艇に物件を移乗、そのまま速力は増加され豊後水道に向いた。

水道で本隊に合流、指定の外輪配備につき始めて忙しい出撃準備は完了した思いだった。

しかしこれからがまた見えざる敵との長い戦いを続けねばならぬ航海だ。

陣型を見渡すと中央に航空戦艦の伊勢、日向が並航し、その後方空母の瑞鶴、千歳、千代田、神鷹、先導は大淀、主力の左右は五十鈴、矢矧に従う駆逐艦で護衛されている。

霜月は伊勢の左後方、刻々に遠ざかる母国の夕陽に染んだ姿は出撃の感動とともにひとしお深く胸に沁み渡る十月十七日の夕刻であった。

出撃

旗艦から指令される命令は時日の過ぎるに従って多くなり、遊撃部隊は逐次作戦の本域に近づいていく。

任務の都合で空母に搭載された飛行機は合計で百機にも足らず、広い飛行甲板を波に躍らせながら随行していく。

ジグザグ運動に欺瞞進路に敵潜の鋭い目を潜って艦隊は南下した。夜半の緊急バザーは毎夜数回繰返され、乗員の浅い夢を破った。

南下五日の二十二日の薄暮警戒は作戦中最後の訓練をして遅くまで警戒裡に行われ、南海の夜は更けていった。

翌二十三日の朝は明けて、目的の地点まで残すところはあと一日の航程となるのまま総員集合は令せられた。艦長より錨地で受領した作戦の内容が示され、企図の壮大とその実施の困難が指摘された。

最後に明早朝よりの戦闘準備に関し細かい注意があり、乗員一同の善戦と武運を祈る言葉で結ばれて解散。当日は夕方まで各部ごとに戦闘準備が行われて、ネッチングには海水が張られ、ホースは引き出せるばかりとなり、兵員室の片づけ、応急器材の準備、防火砂の配置、甲板の滑り止め等、万般の用意は整えられた。

警戒航行最終の夜は訪れ、先任将校の心尽くしで洗面器に一杯の水を戴き、その夜は総員身体を清めた。

レイテ沖対空戦！

明ければ十月二十四日

予定の時刻より早く起床して前夜の中に準備した戦闘服に着換える。禪を替え新しい略装を着けると気持ちまでさっぱりと落ち付いて感ぜられた。

止血棒、急救囊、軍手を腰に下げ、防毒面を背負い、砲員十七名を伴い霜月神社に参拝する。神酒を供え、必勝を期して一同作戦の成功を祈願して神前に供えておいた香取神社の御守りを封じた鉢巻を締める。

やがて予定の時刻午前五時。勇ましい「戦闘用意」のラッパは拡声器から流れ、バザーは鳴る、双眼鏡を掲げてデッキを飛び出す、砲員は追われるように狭いラッタルを駆け上がり砲塔内の配置につく。直ちに「艦内哨戒第一配備」となり、水測部は水中の敵を求めて耳の戦闘を始め、電探は急しく夜明けを待って来襲するのであろう敵機を捕捉せんと懸

命に動いている。

機銃砲台トップにも残月の光を受けて白い鉢巻が力強く眺められた。母艦の飛行機は離艦も重々しく爆弾を抱いて飛立ち、上空を一周、乗員の振る鉢巻に送られて南の空に消えていった。

色鮮やかな戦闘旗は各艦の前檣に掲げられ、陽動部隊の任務を秘めて日本艦隊ここにありとばかりに翻翻と仰がれた。

果たして敵は我が行動を察知して陽動に乗じて来るか、時間の経つにつれて不安な気持ちに襲われる。もし陽動作戦が失敗したらレイテ湾に突入する連合艦隊は必然大損害を被ることが頷かれる。何としても敵の航空兵力を我が部隊に引き寄せねば作戦は失敗となる。こんな我々の気持ち以上に指揮所では艦長が旗艦から次から次と来る指令信号や突入部隊からの情報を周囲の幹部に示しながら盛んにピンと跳ねた髭を捻っている。待機の中に南海の赤い太陽は昇った。

午前七時、遂に電探は敵大編隊を右後方で捕捉した。砲塔内は期せず歓声が上がリ、砲員の士気は溢れた。「距離二〇〇。」秒分と見守る中に時は過ぎ、敵機見ゆ、双眼鏡を当てて見ると約二〇〇機近い編隊が太陽の光線でキラッと映ずる。直ちに塔内および弾薬庫に伝える。「対空戦闘」のラッパは各艦に起こり、新威力を誇る十糧砲は八門一斉に右舷に旋回して敵機に擬せられた。機銃も五〇門に近い黒い銃口を後尾に向け、すでに敵機の動きとともに軽快に動き始めた。

「H三〇。」間もなく射程内、伊勢、日向の主砲も重々しい砲身を向け、艦は速力を増して激しく波を潜る。敵の爆撃機が九機で空母の後方に急降下の態勢で迫る。「H二〇、R六〇。」絶好の射撃角度、大淀射撃開始。続いて機を失せず各艦の斉射編隊は解かれ、爆撃機、雷撃機入り乱れて襲いかかる。本艦上空の三機が急角度にて瑞鶴に突っ込む。また三機六機、伊勢、日向を挟撃する。

水柱を潜って回避。艦は激しく蛇行して左右に傾斜する。斉射爆発の噴煙濛々たる水柱で僚艦も判然とせず、百雷の落ちる如き轟々とした戦闘はレイテの海上を圧した。塔内は整々落ち着いた。射撃を続行している敵の乱舞する空はまた一面に黄紫赤等の各艦の識別の煙を開き、弾幕は正に天日を覆う如き間を機銃の曳根が交差する。

突然「左不発」、寸秒を競う時に故障発生、「後扉開ケ弾丸ヲ抜ケ。」一番砲手は小気味良いほど落ち着いた操作を見せる。待つ間もどかく右砲に呼応して射撃を続行、再度天蓋に乗り出す……。

と瑞鶴の後部が大水柱で覆われた。やられたか……。一瞬また悠々と艦体が水柱を蹴って現れる。だがこれと同時に伊勢遂に一弾を艦カタバルト付近に受けて黒煙を上げ始めた。

攻撃は更に執拗猛烈に反復され、第一次の編隊が散を乱して波の引くように去ったときは既に軽駆逐艦(二)、本艦の姉妹艦一隻が南海に吞まれて姿を見せず、千歳また艦煙突付近に至近弾を受けたらしく左に傾斜、盛んに煙を上げているのが臨めた。

「その場に休め」で直ちに注油、各部の点検、砲鞍下打殻室に山積している葉莢を前甲板に整理、塔外に出て休む。甲板は機銃の葉莢でまた足の踏み場もない状況だ。敵機が去って八時半、主計科より戦闘配食の握り飯を渡されて朝からの空腹を充たす。艦列は傷つきながらも元の隊型になり、更に距離が開かれた。食事半ばで二次の来襲機は来た。少ない今度は百機に充たない編隊だ。「よし今度こそは一機も還さぬぞ。」機数は少ないが前回よりも激しい攻撃ぶりであった。塔外には無関心の如く砲員はただ無我で射撃速度を増すことに努力している。敵機は盛んに空母群を襲う。特に千歳は傷ついた艦隊を傾斜させながら回避に努力しているのが涙ぐましく瞥見された。砲は千歳を突く編隊を追って盛んに火を吐く。

伊勢のロケット弾幕に引き掛かった二機が同時に空中爆発を起こして火の玉となるのが見える。「ざまを見る。」思わず快哉を叫ぶ。

千歳が弱い傾斜は高速のためか目に見えて多くなり、運動も逐次に鈍りが見えてきた。

頑張れ千歳、じりじりした気持ちで塔内を見ると、砲尾は逆風を受けて射撃のたびに凄火を噴く。

九時過ぎ、疲労が見え始めた頃艦雲間から三機本艦を突くのが発見され、艦長の大声がひびいた。砲は千歳を守っていたために合わず、機銃群の自衛がまた後れ、面舵転艦と同時に艦前部並びに四塔側に至近弾を受けて水柱上り、敵機もまた一塔■の海中に突っ込む。艦は大きく二、三、四跳ね上げられて激しい振動は艦を傾けた。後部士官室浸水、左に五度傾きながらなおも応戦は衰えない。遂に「高射故障分火砲側照準」の電話は伝えられ忙しい双眼鏡で目標を選諸元調定して独立射撃に移る。もう戦況の観測などは不能、ただ懸命に眼鏡で敵を観測、追い撃つ弾扉からの伝言管はまたも至近弾のため下部揚弾機の故障を報じてきた。万事休す。

揚弾は主計科員の応援で人力をもつて行われたが、射撃速度は低下、遂に千歳はまた至近弾を受けて急傾斜、既に左に飛行甲板を見せて航行不能、戦列を離脱す。なおも千歳に付き添って応射、戦闘一時間、敵機を三分の一くらいにして撃退す。また前と同じく各部の処置をして揚弾機の状態調査、トップに復旧不能を報告して砲員を休ませる。

高射器の復旧は電路長の努力で見込みが付きホッとした思いだった。敵機が去り来襲のないままに時は過ぎ、十二時近く遂に千歳の最後が来た。乗員は疲れた身体で上甲板に並び千歳を見守る。傾斜は増して海中に入り、急にガクンと大きく傾いて■に寄った人間を振るい落としながら後部を先にして一瞬直立、全員の敬礼の中に多くの人とともに浪に吞まれていった。

に浪に吞まれていった。

救助作業は五十鈴によって行われた。この頃レイテ湾に突入した巨艦武蔵の沈没が伝えられた。黙然となる。午後になり敵機の来襲は十機くらい宛で波状的に行われたが、空母■に向かうので我々の方は隣の奮戦を応援するかの如き観であった。高射器がしばらくして復旧し射撃はまたも快適に行われた。しかしまた千代田は数次の攻撃で舵機故障して戦列を抜ける。日没を願う気持ちは切で、このままではまた千代田も犠牲になる噂が誰にもわかる。敵の攻撃が少なくなり■時間も多くなった。砲員は疲労で目ばかり光り、顔は硝煙で黒くなって、綿のような身体を塔内で横たえている。長い一日はようやく終わりがけ、待望の日没は来た。警戒は続行されたが重荷を卸した気持ちで怏々と戦の後を見渡す。

母艦は日没とともに主隊に別れ、二隻の駆逐艦に護衛されて戦場を去っていく。千代田は航行不能で取り残された。

夕闇が迫ったが遭難した各艦の乗員はいまだ全部救助されず、黒い頭が波間に点々として見え隠れして流れていく。隊型を整える頃信号は夜襲を知らせてきた。傷ついた艦隊は最後の勇を鼓して立ち上った。応急食、水樽を積んだカッターは漂流者の付近に流され、救助は中止されて昼の戦場を後に速力を増した。

夜襲！

夜襲は十二時月出を機として突入と報ぜられた。敵の兵力は戦艦三、空母三、他に巡洋艦等も数隻、それに昼に味方の攻撃を免れた無傷の精鋭との情報、これに反し我は傷ついた伊勢、日向、大淀、矢矧、五十鈴、それに本艦外三隻の駆逐艦という編成、突入隊型は成り警戒裡に一路レイテ湾口を目指す。信管の装着換えに終わり、塔内給薬室には全弾が

上げられた。水雷部でも忙しい襲撃用意が実施されている。砲員は夜襲も知らぬ如く、見張以外は弾丸を抱いて眠りこける。怵々と彼等の寝姿を見ている中に眠りに落ち「突撃隊型につけ」のバザーの鳴った時にはすでに月出近く時刻は迫っていた。

レイテ湾口の最後そんな考えもフツと頭を走る。黒く油の染んだ鉢巻を締め直して砲員の調査を行う。塔外を覗くと海上は月出を前に明るくなった。まもなく予定の時刻午前零時、月は静かにレイテの海を照らし始めた。「全艦出撃せよ。」信号が旗艦から伝えられ、乾坤一擲の殴り込みは遂に降る。

砲塔は動き黒い不気味な頭部を見せて、発射管は両舷に旋回をして魚雷戦は令せられた。緊張の時間は過ぎて行く。艦隊は全速で突つ込む。だが目的地点に至るも敵影はなく、いたずらに波が月の光で輝いているばかりだった。早くも我が来襲を恐れた敵は状況を察知してか退避したらしい。搜索は続けられたが敵艦は遂に発見されない。決断の指令は各艦に打たれた。「夜襲中止、全速をもって明早朝までに敵機の制空圏内を脱出せよ。」突撃隊型のまま艦隊は反転北上、帰路に就く。「魚雷戦用具収め。」砲塔は艦首に向いて電動機は停止した。がっかりしたような、またホツとしたような変な気持ちがある。翌二十五日の朝、遂に敵機の追撃もなく制空圏を脱出することに成功、遊撃部隊は警戒航行の隊列に復し、速力は落されて北上、傷つきながらも内地に進路を向けた。戦は終わった。昼近くになり味方の被害が一部判明した。湾内に突入した主力は武蔵、山城をはじめ利根、筑摩、能代、駆逐隊の全滅数隊、更に突入前に重巡の摩耶、鳥海、愛宕、高雄と艦隊の至宝を失う。

遊撃部隊の方は夜襲に出発後千代田がやられ、日没後別れた瑞鶴、神鷹は護衛の駆逐艦一とともに大編隊に襲撃されて沈没。これで母艦は四隻全滅、駆逐艦三が失われ、伊勢、本艦また損傷、作戦は利あらず、遂

に一敗地に塗れた感である。

傷つき破れた帰還は行きと違い、艦列は歯の欠けた如く淋しい引揚げであった。

遊撃部隊は戦の跡に心を残しながら涙を呑んで呉軍港に帰投、全作戦はここに終結を告げた。

レイテ湾頭今なお恨み深く、カッターを流して戦場に残して来た戦友よ今いずこ。

還らぬ友を幾多呑んだレイテの海は今も変わらず波うつっているであろう。

月清い抑留舎で天上にある英霊の冥福を祈りつつ拙い文をとじる。

終

今もなおありありとあり
火だるまの艦に残りて叫びけむ友

永田福治

搭乗記断抄

松本晴雄

○月○日（ポートプレヤ基地）

英機動部隊インド洋上出沒との報に接し我が索敵機は本朝未明直ちに暗雲を衝いて出動、試運転の響は静寂を破って海面をどよもし暁闇の中に排気ガスが紫紅色の尾を長く引く。燃料満載、試運転良好、出発機は白い軌線を引いて瀬頭を乗り切る。心地よいジャンプ離水、ぐつと突上げた機首の真向かいに夜明けの明星がチラチラと目を射る。針路二九〇度、発動機快調、計器盤の夜光文字に指針が震う。

西へ西へ順風に乗って索敵任務続行……。日輪は水平線の彼方を真紅に染めて洋上に躍る断雲が飛ぶ。高度五〇〇。

予定線上到達、旋回索敵するも更に敵影なし、零時二〇分任務を終え帰投の途につく。

○月○日（ポートプレヤ基地）

未明断雲を衝いて昨日の地域索敵任務続行。高度五〇〇、夜は白々と明け始める。南海の島々がくつきりと朝日に映えて美しい。人類の間に繰り拡げられている戦雲の入り乱れも知らぬ氣に安らかな息吹が続けている景色にうっとりとして見とれる。あたかもそのとき、基地よりモスキート一機飛来の報に接し、最早眼中には島もなければ美も悪も更がない。全神経を集中して見張りをなす。

八時十五分、左前方海上に黒点を認む。雲か？ 島か？ チャードの経緯線上島嶼なし、ウェーキーが細く見える黒点と見えしは瞬く間に胡麻粒大に、豆粒大に、笹の葉大になる。艦だ、スーッとウェーキーを引いて二列縦隊の陣型、敵か？ 否か？ 一隻、二隻……。視界の十数

隻、進路をスマトラに取って南下しつつある。正しく敵何を狙わんと欲するか、握りしめた拳に汗がにじむ。高度一〇〇低空にて肉迫、機は左に旋回。八時二〇分無線封鎖を解く。

「八時二〇分敵機動部隊見ユ、方位三二〇度、一八〇籽。」心なしか電鍵を打つ電信員の手が興奮に震うように感ずる。上昇三〇〇……五〇〇。高度計はぐんぐん上る。機は敵陣衛上空通過、中央に空母二、戦艦二、巡洋艦三、駆逐艦八、進路三二〇度速力一五節、上空護衛の敵機なし、索敵任務終了、触接任務に就く。九時十分敵大きく右変針風に立つ。次直機帰還せず。

○月○日（於コタバル基地）

早朝より船団直衛任務につく。

船団異状なし。十時二三分デングル沖通過敵潜敵機を見ず。

○月○日（於コタバル基地）

トレンガス沖にて船団発見、護衛任務に就く。異状なし。八時五分発動機不調……停止。高度五〇〇ー三〇〇ー二〇〇。機は功みな滑空を続ける。すべての努力も効を奏せず、しかし最後の一瞬まで善処せんとす。「ス」連送。「我不時着ス。」高度五〇〇ー三〇。波頭の白さがチカチカと視野に入った瞬間、猛烈なショック。続いて二度三度、洋上接水飛沫がドンと頭からかかる。電信器破損。尾部注水。再び大きな衝撃。奇蹟！発動機、起動を始める。「発動機始動」と操縦員の声が伝声管一ぱいに響く。次第に回転を増す。おぼつかないままで滑走離水五〇〇ー一〇〇。白波がぐつと小さくなる。右尾翼破損。フロート使用困難。飛行差支えなく、再び任務に就く。

○月○日（於ペナン基地）

敵潜情報により対潜攻撃に向かう。ぐつと抱き上げた二十五番爆弾に地整員が祈っている姿が見える。離水、発動機快調。高度二〇〇。予定地点到達、一番器油紋発見、バンクを行う。攻撃開始、ぐつと突っ込んだ。さつと投弾、水柱が上がる。ややそれめ、機からクツと左反転、急速降下。見る眼前に目標がせまる。息づまる一瞬、高度一五〇。「ヨイ」「テー」。心中の信念に燃えたつ手と心に投下策がぐつと応える。機はぐつと右旋回して引き起こす。果たして成果は？ 沈黙、凝視。海水が一面にボカアツと盛り上がる。爆発、重油噴出、油紋移動停止、旋回十五分、撃沈確実だ。操電ともども快哉を叫ぶ。黄昏の迫るマラッカ海を編隊くんで基地に向かう。

○月○日（於カムラ湾）

点々と味方の船舶の残骸あり。憤怒の情鬱勃なるを感ず。ナトラン地上にて船団と会合、護衛任務に就く。高度三〇〇、基地より敵機空襲の報受領。対空戦闘準備、時おかずして右前方黒点を認む。四発―B 24、高度一〇〇。海面を這うようにして向かって来る。

船団対空戦闘開始。上空P 38数機あり。敵機爆弾投下。船団の右側に大きな水柱、異常なし。我―敵機との距離一五〇〇、敵弾機の周辺に炸裂、全速反撃開始、二〇耗が連続に火を吐く。ブルブルと振動を感ずる。「アッ……敵弾。」電信員の悲声。電信器命中破損、交戦〇分、他に異常を認めない。二番機B 25と交戦中。味方戦闘帰隊到着……。戦闘機の本領に容赦せずに出巴の空戦を後に退避、基地に向かう。

○月○日（於カットラ基地）

■■惨大高度五〇、任地に向かう。

十時二十七分突然左後方よりP 38の奇襲を受く。卑怯とか何とか言っても戦場では通用しない。まして広い空の上では……。ピシリとぶい音がしたと思ったら無念、タンクに敵弾命中、発火。我が機銃猛烈に反撃、全力消火に努む。第二弾またもや命中、下駄履の悲しさ、無念を切歯反撃あるのみ。

機はくるり反転、全速のまま不時着体制。全てが切れたフィルムのように脳裏を過ぎていく。高度三〇―二〇―一〇。フロートが水田の畦に激突、飛散そのまま機は安南民家に突入。眼前は黒煙濛々、気も混沌。ハツとして目を開くと熱い。ほほが焼けるようだ。生きていたのだと思ったら不思議な念に掩われる。バンドを外して外に飛び出す。操縦員も軽傷、電信員の姿は見当たらない。急いで機の傍に引き返す。機も民家も一面の紅蓮の焔の海。ようやくにして電信員を発見。機銃を握ったまま腹部に敵弾を受け、壮烈な機上戦死。翼下の爆弾が気になる。合掌して安全地帯に退避。ものの二、三〇米も来ぬ中に突如大爆発、火柱は天に沖する。サツと地上に這伏するとパラパラと各種の粉砕物が頭上に落ちてくる。愛機も民家も粉々に空中に吹き飛んでしまった。心はうつろに傷が急に疼き出した。

追記 文中チャートとは搭乗員の用いる海図の縮図。ウェーキーとは艦船の航行後尾部に立つ白波。

終

ハワイ奇襲記

高橋平四

十一月十七日

臨戦準備第一作業終了。この日、艦内戦に不要の物件全部、手箱、鏡、外舷艇の一部を卸す。どこに行くか全く不明。ある者は防暑服を積んだり、また従兵の兵の話で士官は一種軍装を家に持ち帰ったゆえ南方だと言い、またある者は防寒服および飛行機の発動機用覆口を積んだゆえ北方だといひ、噂は噂を生んで我々には五里霧中。午前八時呉を出港。同日佐伯に入港、遙かに町の灯を臨みつつ仮泊の夢を結ぶ。

〳 十八日

佐伯出港午前六時三十分大分入港。直ちに大分空に基地訓練のため出張していた搭乗員、整備員、飛行機ともども帰艦。目の回るような忙しさ。ホッと一息ついたときは既に茜の雲が艦の上を西へ流れていく頃だった。

〳 十九日

午前零時。星のみがまたたく大分を出港。波を蹴って謎のまま南下の航程を取る。日は海上に出て海上に没していった。一日青海原の航海、後で聞けば艦隊行動を不明に付するため商船航路を避けたのであったと。

〳 二十二日

うねりの中を艦は乗り切っていく。防寒被服を着用したが寒さを覚える。午後三時千島列島のエトロフ島単冠湾に入港。湾内には既に空母二隻、戦艦二隻、その他巡洋艦、駆逐艦、油船等多数の艦船が集結している。小山のような波がうねる。四万頓余の空母が投錨してがふるのだから駆逐艦等小さい艦は可愛想なようである。陸上を覗けば白雲皚々、寒気は膚を射す。さすがは千島だ、内地では小春日和の暖かさを感じる頃なのに！

〳 二十五日

総員集合あり。「我が機動部隊は明早朝世界洋上戦史いまだかつてなき企図をもってハワイを攻撃、敵米国を一刀両断にせんとし出港す。全員一致協力もってこの戦いに向わんことを」(中略)と南司令官および城島艦長の訓示であった。前日搭乗員は旗艦赤城に集合、航空艦隊司令長官南雲中尉の訓示があった。投錨以来感づいてはいたが、直接司令官、艦長の訓示を聞き全乗員の瞳は燃えた。

攻撃の時を思い血湧き肉躍るということを実に身を感じた。

〳 二十六日

午前八時単冠湾を出港。この朝無敵を誇る艦隊の陣容は航空母艦六、戦艦四、その他巡洋艦、駆逐艦、潜水艦、特務艦(泊船)合わせて二十数隻。堂々の陣型は北海を圧して抜錨。遠く消えゆく白雪よ千島よ、さらばうたた感無量を覚える。

〳 二十七日

「本日天気晴朗なれども波高し」と史上に燦と輝く名電文を髣髴せしめるような天気。そしてうねりも大きい。我々の居住区最下甲板のデッキは空気が悪い。「体操用意」および「配置につけ」(訓練)で喜んで発着甲板に駆け上がる。昼休みに副長からこの度の作戦について詳細に聞き、ますます身の引き緊るのを覚えた。

午後本艦最悪の場合を仮想して応急処置の訓練等を行う。我々は内地の各世界の誰もが憶測もしない中にこの破天荒な攻撃を敢行し、史上にない大きな戦果を挙げるのかと思うと何とも言えない痛快さを感じ、異状な興奮にかられてなかなか寝付かれなかった。

〳 二十八日

朝より薄曇りでやや暖味を覚える。陣型は崩れることなく波濤を蹴って進む。昼に副長より「ソ連の商船がサンフランシスコを去る十三日と十四日の二度に分けて出港、約三千噸くらいの船だそうである。ウラチオストックか上海に向って北上中とのニュースがあった。見張員ばかりでなく総員が注意の眼で見張るように」との話があった。

撃つに安い敵ながら大事の前の小事、客気は禁物と思つて見張をなす。

〳 二十九日

今朝は少し風があるが海は風いである。曳船給油をして東へ東へと航行を続ける。昨日副長の話のソ連の商船の影も見当たらず、夕方より濃霧にとざされてしまった。

〳 三十日

朝霧深く曇。昨日のニュースでは味方の大巡が比島とハワイの中間ほどのところで国籍不明の戦艦、巡洋艦と行き違いになったとのこと。もしや真珠湾の米艦隊は既に出港したのではないかと我々さえ一通りの心配でない、いよいよ今日からダッチハーバーおよびパールハーバー、ミッドウェイの哨戒圏内に入ったので、ますます上空見張りを厳にする。今朝はもう四時には明るくなり、昼食は十時、夕食は三時、巡検は六時となった。毎日の日課が早くなる。

十二月一日

相変わらず今日も曇で風がある。単冠湾出港以来毎日午後は「酒の外酒保開け」「武技体技許す」の号令が掛かる。相撲、銃剣術等の肉弾相撃つ戦が繰り広げられる。出港以来「はけ口」のない若い血潮が、息吹が、

闘魂が爆発される唯一のときだ。我々整備員も飛行作業もない搭乗員はもちろん毎日退屈で時々敵艦船の型や攻撃の講義があった。戦闘を目前に控えて体が「なま」になると言つて飛行機の拭き取りおよび操縦席の掃除に余念もなく愛機の傍らを離れない。食事のとき等もわざわざ握飯を作つてこれを格納庫の飛行機の中へ持ち込んで操縦桿を握りながら食っている。

〳 二日

天気も良く波も穏やかである。敵飛行艇基地の哨戒圏内も今日がいよいよ頂上、今日発見されなければまず一安心である。

〳 三日

朝より雨風烈しく白い波頭は狂わしいように吠えている。視界は一寸先もきかない濃霧で艦隊の行動を暗黙裡に運ぶには上々の吉、とざされた中で敵に悟られる恐れもない。航程は時のたつにつれて進む、濃霧は我々に与えられた天祐であった。昨夜本国よりの電報でいよいよ十二月八日午前一時半を期して日米開戦の火蓋を切るとの報に接した。

〳 四日

本日より一路南下、ハワイに向かう。昨日までは哨戒圏内を避けたために東上したのであったが、遂に今まで無事に通過できた。これからはさほどの心配もない。ただあるのは撃滅の燃ゆる二字のみだ。

〳 五日

今日も無事航行を続ける。米艦隊はほとんど真珠湾に集結しているとの情報があつて、全乗員快哉を叫ぶ。

〱 六日

航程余すところ僅か、今日も渺々の海原を一条乱れぬ艦隊は白波を蹴立てる。総員起床一時、朝食三時、昼食八時、夕食一時、巡検は四時(日本時間)という型破りの日課も珍しくなく、八日を鶴首する。

〱 七日

いよいよ待ちに待った攻撃を明早朝に迎えて艦内は異常な雰囲気を得ている。午前飛行機は全機飛行甲板に出し試運転を行う。久方振りに昼食は戦闘配食、愛機の翼の下で食事をすます。夕食は赤飯に祝酒。午後二時眠りに就く。未曾有の大事を前にして搭乗員等はぐっすり眠っている。十時半起床。飛行機を出し試運転後、艦爆、艦攻機にそれぞれ爆弾搭載、戦闘機は機銃弾満載、全く準備完了、そのまま待期。なお念のため細部にわたって点検を行う。

〱 八日！

試運転後、午前一時三十分各艦戦闘機、艦爆機、艦攻の順序にて一斉に発艦、艦隊上空にて大編隊を組み、全員見送りの中に堂々四百余機で一路ハワイに向け進発！

月の出近い空に機影を没して行つた。飛行機発艦前旗艦赤城の檣頭高くZ旗が朝風にはためいた。

拡声器は「皇国の荒廃この一戦にあり、各員一層奮励努力せよ」と艦内いっぱいに夢寝にも忘れ得ない感激の言葉を響かした。続いて「艦内哨戒第一配置」が令せられた。高角砲員機銃員は一種軍装に脚絆を着用、防毒面を背負い、後鉢巻も凛々しく、各々配置につく。整備員は作業衣に防毒面、懐中電灯を携行、それぞれの応急配置につく。

艦は一路ハワイとミッドウェイの中間を北上する。全員配置に就い

て言の葉もなく、今敵機の来襲あるか、そこに艦艇現わるかと手ぐすね引いて待ったが、一向に気配もなく時はうつつた。六時少し前、微かに爆音が聞こえる。「敵機ごさんなれ」と待つこと二、三分！ 味方機帰還とわかる。戦闘機を先導に艦爆、艦攻の順に帰還、双手を上げて出迎う中に旋回して降着コースに入る。短時間内に着艦してくる飛行機を収容の忙しいこと。

ちょうど風がハワイの方向から吹いていたので飛行機を着艦させるにはどうしても艦を風上に向けねばならない。収容が遅れると遅れるほどなき訓練は効を奏し、たちまち収容が終わる。

我が艦の攻撃機も爆撃機もみな爆弾を抱いて出掛けた。攻撃機は八百疋、爆撃機は二百五十疋の巨弾の雨をヒッカムの飛行場に降らしたのであった。

艦での被害は艦爆が一機、左翼端の日の丸のところが敵高角砲のため吹き飛ばされていたが操縦員の不断の練磨は無事着艦した。

また蒼龍の艦攻は一回目雷撃の機を逸したため二度三度と繰り返し、翼端に電線を引っ掛けたまま帰艦した。

宣戦の大詔喚発後時おかずして軍艦マーチ入りの臨時特報ニュースを伝え、銃後一億の血を沸かした戦果は一日にして築き上げたものではなかった。

終

真珠湾には桜はないが
花と散つたる荒鷺の
これぞ誠の桜花

パラワン遭難記

阿部幸輔

昭和十九年十一月二十二日

沃雲孕むマニラ港の朝は狭霧の中に明け、遠くキャビテ軍港の灯が見え、右手にアメリカの牙城と言われしコレヒドール島が静かに横たわっていた。港内は九月二十四日、敵の初空襲において沈められた大小艦艇の残骸が真つ赤に錆びた艦首や横腹を突出して朝日を受け、鈍い光を出している。

静かな朝の空気を破って海岸通りを滑走路にし、特攻機が二機：三機、爆音も勇ましく大地を蹴って飛揚し、レイテの敵戦地を目指すのか、大空高く旋回して高層ビルの方々に消え去った。

出港用意のラッパを合図に艦は静かに青白く水泡を残して航行を始めた。洒脱なマニラ市街の建物がグングン我々の瞳から薄らいでいく。しばらくして眼前にコレヒドール島が開けてきた。幾多の将兵の血によつて彩られた要塞は不気味な静けさを続けている。

やがていくつかの小島を通って洋上たる海上に出た。我々の便乗した特務艇は定員一五〇名、便乗者二〇〇余名を乗せて針路を東南に向けて航行した。便乗者は総員戦車庫の蒸暑い中に入れられ航路を続けなければならなかった。上甲板で波と雲に飽きた我々はデッキで雑誌を見たり雑談に耽って無聊の日を送った。夕方から南方特有のスコールで滲み出る汗を拭き取り戦車庫で眠りについた。けたたましいバザーの響きに夢路破られて飛び起きると、上甲板は騒然となり「配置に就け」の号令が我々の頭上で交叉している。降りしきる雨の中をいち早く上甲板に飛び出し、暗夜に海上に瞳を向けた。行き詰まるような数分……。しかし間もなく「要具収め」の号令が我々の胸をほつと撫で下ろさした。

時に十時四十五分、興奮から覚めた兵達は細いラッタルを降りていく。私もしとどに濡れた防暑服を着替えようと中に入った。

蒸せ返るようないきれがムツと体を覆う。かしましかった艦内もようやくで鳴りをひそめ、少しうとうとした頃轟然たる音響とともに私の体は内壁に叩きつけられた。アツと思う間もなく何かわからない物が落下して、いやというほど叩きのめされた。真つ黒闇の艦内はたちまちにして阿鼻地獄と化した。私は自分の左手の異状な劇痛を意識しながら細いラッタルを手探りで息もつかず駆け上がった。上甲板は叫喚の埒塙の中で兵隊の白い作業服が若鮎のような敏捷さで応急処置に左右する。船は左舷に大きく傾き始めた。

「前甲板に行けッ！誰かが大きな声で怒鳴った。

前甲板ではカッターと内火艇を下ろそうと大童であった。雨は風と交じって一暇と激しく横殴りに降りしきる。退艦命令が下り内火艇には主計科倉庫から糧食を運んで積み込んでいる。時々懷中電灯の光芒がピカピカと雨脚を斜に照らしながら走る。

「オイ阿部、大丈夫だったかッ？」と背後から声を掛けられた。振り返ると同年兵の金田がこの騒然たる中で笑顔を向けていた。「ウン、左腕を少し打ったらしい。」「ソウか、お前もずいぶん悪運が強いな。」私これで四回目の遭難であることを彼は知っていた。

「オイ飛び込もう。」「うん、救命具を取って来よう。」と私達は素早く砲塔に上がり、救命具を取って下へ降りて来た。

私達が救命具をつけているとき再び脚下に大音響がして艦体はぐらぐらと揺れた。私は猿のように烹炊所に飛び込んだ。と、また地獄に叩き込まれるような音響で、艦はググツと前よりも傾いた。私が烹炊所から甲板に出た前に二人の兵隊が斃れていた。「オイッオイッ」と耳近く口を寄せて呼んだが、二人は息が絶えているのか返事はなかった。右舷

に走りよつて見ると、今のショックで放り出されたものかカッターが怒涛の中に漂っていた。私は無意識に海中に飛び込み、カッターに掴まって這い上がった。

「オーイ、カッターがあるぞッ！」艦上に向かって声を限りに私が叫ぶが早いか、海水が足を洗うほどのデッキにいた兵隊が大声で喚きながら海中に飛び込む音がした。しばらくしてカッターは乗り切れぬほどの人が満載され、力強い声と橈によって艦から離れようとしたが、荒れ狂う波は我々を自由にさせなかった。艦上から小箱が二つ落された。

「機銃だ」と誰かが囁くのが聞こえた。艦上にはいまだ何やら怒鳴っている声が風雨の間に聞える。

しかしそれも束の間、黒い巨体はいくらかの人命とともに我々の瞳から水泡のように消えていった。大きな波がカッターを覆そうと猛り狂う中に、兵隊の逞しい腕が生きんがために闘争を続けた。寒さが身に沁み嘔吐をたびたび催す。「左舷潜望鏡ッ」と声がした。二十米くらい先を水飛沫を立てて棒杭のようなものが走り去った。「砲撃。」次の瞬間爪先から頭の先までズシ！とくるような冷感がした。しかし悪寒裡に二十分経つても三十分過ぎても潜水艦は姿を現さなかった。小山のような三角波は無情に襲いかかる。誰も口をきく者もない。

悲憤と焦燥の夜が明け、朝を迎えた。波は相変わらず大きなうねりを見せている。「誰か一人泳いでいるぞ。」右舷で声がした。酒樽のようなものが波間に浮かんでいた。カッターを近づけると救命具を着けた金田が片手を振りながら助けを呼んでいた。

救助された彼は案外元気で皆をびつくりさせた。彼の話により、糧食を積み込んだ内火艇は艦の沈没の渦のためにそのまま艦とともに海底深く沈んだことがわかった。当てにしていた糧食はもはや得ることができなくなってしまった。昼近くなった頃、東の空から微かな爆音が聞

こえてきた。皆の瞳は一縷の望みをかけて青い空に機影を探し求めた。「二式大艇。」その声とともに歓声が上がリ、タオルや褥を外して我を忘れて頭上に打ち振った。しかし徐々に近づいた飛行機の方向舵は二枚であった。「コンソリーだ。」一難去つてまた一難、敵の銃声に身を曝そうとは！しかしこんな小船は取るに足らないのか、それとも発見しなかったのか、敵機は機体をピカピカ光らせて雲間に消え去った。

我々が小さな島を発見したのは四日目の朝である。

憔悴していた我々は疲れた身体に鞭打って水平線に黒雲のように浮いている島影を目指して昼夜力漕を続けた。三日経つても四日経つてもその島は自分の影を追いかけているように近づけず、餓と喉を引き裂かれるような渴を覚え、気が狂いそうになってきた。毎日続く焼きつくような炎天の下で橈を漕ぐのは生き地獄の苦刑に等しかった。指揮官は「もうこれ以上漕いでも潮流の関係で島に着くことは不可能だ」と無然として長嘆息した。ある上等下士官が「でもあの島に着かなければもう一週間とこの体は保つまい、皆最後まで頑張ってくれ」と皆を力づけた。

十日近く何も飲食せずこれだけよく頑張れるものと思われるほど大きな声を出しても再び島に向けて漕ぎ出した。意地と精神のみで目ばかりが苦痛に歪んだ顔に光っていた。

しかし不幸にして体力……精神力の弱い者は次から次へと倒れていった。

気狂いのようになり海面に飛び込む者が続いた、それを目の前に見てどうすることもできず、ただ涙を流して見送るほかに術もなかった。私も眼前に湯気の立つ飯を幾度夢みたことであろう。十日目の朝、島によりやく近づくことができた！青々とした草木がはつきり網膜に映る。

「もう一息で土の香を嗅ぐことができる、助かるのだ」と兵隊達は渾

心の力を入れて漕ぎ通した。椰子の木らしいものが見え、岩石も苔もわかり見えてきた。カッターは静かに、そそり立つ岩石の間をさけながら砂浜にのし上げた。亀が驚いて泳ぎまわっている。フラフラした腰を上げて砂浜に這い上がり、我先にと水をもとめて歩きまわったが、清水一滴発見することができない。しばらくして塩分が三〇%くらいしか含まれていない水を一人の兵隊が発見して知らした。私もそこで無中になり息もつかずに喉をうるおした。「助かった」と、その水が臓腑を充たしたとき始めて意識した。居合わせた誰もが遭難以来の硬直した蒼白の顔に正気が甦ったように思えた。

やがて糧食集めに三、四人宛付近を歩き始めた。全くの無人島であり岩石と雑草と灌木だけで何も食べる物はなかった。島に着く前に椰子の木だと思ったのは檳榔樹だった。海岸には無数のヤドカリがいるのでそれを帽子の中に集めて歩き、誰が持ってきたのか乏しいマッチで火を焚いて焼いて食べた。

私はポケットの中に海水でグシャグシャになった煙草の粉をかき集めて乾燥させて木の葉で巻いて吸った。もう誰も歩く気力もなくなつて砂浜でゴロゴロ寝ころんでいる。その夜、岩石と岩石の間で火を焚きながら来し方と行く末を案じ、なかなか寝つかれなかった。

翌朝総員集合があつて種々の話の後、「この島では糧食となるものがない、元氣のある者を選抜して我々の糧食に心配ない島を探さねばならぬ」と元氣な者が選ばれた。

私もその一員に加わり、再びカッターの人となった。島の裏側に漕いで行ってみるとすぐ近くに大きな島が思いがけなく見えた。今まで島の陰で見えなかったらしい。掉させば届くほどのところであるが潮の流れが急でカッターは思うように進まない。聳え立つ岩石の間を縫うようにしていくつも越して、目的の島に到着するまで数時間を費やし

た。島には美しい小鳥が無数に飛びまわっている。椰子の木も林立している。さつそくフラつく体に勇を鼓して椰子の実を取り始めた。舌にしみ透るような冷たい感触を味わいながら腹一杯飲んでコブラも悉く食った。飢えをいやしてから島の様子を見て歩いた。以前人間が住んでいたことは椰子の木にパランか何かで疵をつけ上まで昇るようにしてあるのでわかる。海岸をだいて歩いた頃人家を二軒発見した。しかし荒廃して見る影もない。火を焚いた形跡があり食器が一つ砂の中から頭を出している。もしかしたら人間が未だほかに住んでいるかもしれないと随分探しまわったが、それらしい様子は見ることができなかった。私達は無人島で待っている戦友等にこの喜びを早く知らせようと、もぎ取った実を取れるだけ積んでその島を離れた。無人島に帰り着いたのは夜も更けてからであつた。

待ちあぐんでいた彼らに我々のもたらした報告は狂気せしめた。一人に二個宛の椰子の木をむさぼるように飲食した後、移動は明日と決定した。その夜はあちらこちらで焚火を囲みながら珍しい笑話に花が咲いた。

翌朝移動が開始され、島と島の間まで来たとき、突然島影からコンソリーが一機低空で飛んできた。そのときは予期しなかっただけに警がが大きかった。敵機は我々を発見したらしく旋回して機銃弾の雨を降らせてきた。海中に飛び込む者、カッターの中に這い込む者、大混乱であつた。敵機は三回反復銃撃を御見舞して、こんなのを相手にしてもしかたがないと思つたのか、島の陰へ飛び去っていった。

海中に飛び込んだものを救助するのに三、四時間を要した。幸い死傷者は一名もなく、無事に島に着くことができた。その日から我々は一日に二個の椰子の実の配給を受け生活していかなければならなかった。

しかし椰子の実にも限りがある。六日経ち七日過ぎる頃、何とかして

人の住む島に移りたいと焦り出した。

再び人選をして十五名の者は翌日島を出発するようになった。日暮時見張りの声に驚かされて海に出ると、命綱とも頼むカッターが潮に流され大きな岩にぶつかり、頭ぐらいの穴を開けて漂っている。ようやくにして引揚げ、機銃の部品や櫂座栓のビスを外して、帆替わりに使用してきたケンバスを切り、応急修理が行われ、どうにか浸水を防ぐことができた。ホツと安堵の胸を撫で下ろしたとき、最初上陸した無人島の上空に三座水偵が二機旋回しているのを見出した。友軍機だ、零式水偵だと歓声を上げた我々は、地獄で仏に会ったような嬉しさで両手を振ったり火を焚いたり機銃を撃って救をもとめた。しかし我々を発見せずに薄暮の中に機影を没して去っていった。

このときほど無心に運命の神を呪ったことはなかった。翌日といっても出発したのは午前一時か二時頃であつたらう、真黒い海面を我々は静かに漕いですべり出した。それから数時間、進路も方位もわからぬままに鳥影を求めて歩いた。夜のとりも白々と明けそめようとした海面に灰黒色の船舶らしい影を発見した。上甲板では器物を洗っているような音がかすかに聞こえてくる。よく見ると外に数隻の船影が見える。敵か味方か。一抹の危惧を抱きながら接近した。耳をすまして聴き入っていると確かに日本語が聞こえる。嬉しさのあまり全員が「オーイオーイ」と叫んだ。しばらく上板の物音が途絶えて静かになったが、「誰か」と声が掛かった。外舷にカッターを寄せて、遭難してから今までの概略を話して救助を求めた。近くにいた護衛艦に連絡され、回航してその艦で救助されることになった。十五名の者は上甲板まで艦の兵隊に助けられて上った。

疲労と安堵と嬉しさの交錯した涙がとめどもなく流れた。薬と食事を与えられる中、一名が水先案内として艦の兵隊とともに島に残して

来た戦友を救助に内火艇で出発した。

四時間後に総員は救助されて帰艦した。船団は直に喜びに胸溢れている我々を乗せてマニラ湾を向け出発した。

この船団はボルネオ方面から来たのであるが、昨日敵潜水艦に追跡され仮泊したもので、夕暮の三窪水偵はその上空哨戒を行っていたのだった。艦長の話では恐らく今後ここを航行する船はあるまい。お前達は運の強い者ばかりだと言われたが……。「事実は小説よりも奇なり」という譬もあるが、その日の午前一時二時頃あの島を出発してなかったら……潜水艦が出なくて船団が仮泊しなかったら……一つ一つが悪感を覚えるくらいの偶然の一致だ。夢の中をさまよい歩いたような十五日、船は静かに懐かしいマニラ港へ入って投錨した。市街の建物は何ごととも知らない顔で聳えている。

突如けたたましい空襲警報が響き渡った。今日もまたマニラ上空は爆音に明けて弾幕に掩われて暮れていくのだった。

寝ねがて潮騒をききつつありし日を偲びて……

終

レイテ突入記

軍艦羽黒 中内加寿雄

昭和十九年に入ると敵米英の反撃は次第次第に猛烈を極めてきた。サイパン島を攻落した敵はサイパンを基地に本土空襲を敢行、日に追し本土は敵の空襲下にさらされた。中部太平洋の制海空権を得た敵は十月初旬ついに台湾沖の航空戦となり、我が忠勇なる将兵の特別攻撃隊に多大の犠牲を出した。にもかかわらず敵は反撃の手をゆるめずに強引に失地回復、中支那海の輸送中絶を期して比島に上陸作戦を開始してきたのであるが、当時敵のデマ報道は日本連合艦隊いずこにあるやを報じていた。

内地にあっても国民は等しく日本海軍には無敵連合艦隊あると固く信じ、日に追しつゝの本土爆撃にいつときも早く連合艦隊の出動と敵撃破を希っていたが、国民のある一部にはまだ連合艦隊は健全でいるだろうか、敵の近代科学の粹になるB29の好餌としてやられてしまったのではないかと疑惧の念を持っていた。

では当時連合艦隊はどこで何をしていたか！ その頃艦隊は昭南の南方リンガ泊地で毎日毎日戦闘訓練、月月火水木金と寧日なき猛訓練を重ね、将兵は一日千秋の思いでその日の来るのを首を長くして待っていたのだった。

憶！ ついに待望のその日は来た。「連合艦隊出動命令」発令され、艦隊は目だたぬように隊を組んでリンガ泊地を抜錨した。

私の乗艦していた一万噸巡洋艦羽黒もそのうちに加わっていたが、羽黒は五戦隊に属し旗艦はやはり重巡の妙高であった。

五戦隊がブルネイに入港したときはほとんど全艦隊集結していて、一戦隊の超弩級姉妹艦大和、武蔵、それに長門の巨大な姿も見えて、将

兵一同の意気天を衝くものがあつた。ここに集結してからは旗艦の大和において毎日のように作戦会議は開かれ、羽黒の艦長も再三再四出席され、そのたびごとに明日は出撃する！ 明後日は出撃するんだ！ といろいろのデマが飛び、その間数秒も忽かせにせず猛訓練に腕を磨き、いざ鎌倉に備えていた。その時分、敵は比島周辺に続々と輸送船団を送りレイテに上陸を開始した。我が陸上部隊は最後の切込戦法をもつて敵を撃退せんものと策したが、量を頼む敵のために次第次第に圧迫され、敵は遂にレイテの飛行場三ヶ所とも手中に収め、この飛行場を盛んに戦爆機の発着に利用し、我が陸上軍並びに艦隊の攻撃を始めた。この悲報一度伝わると、時を同じくして待ちに待った連合艦隊出撃の命令は発令せられたのだ！

将兵一同の喜びは爆発し戦友先輩の恩仇報復を固く誓ったのだった。その日の夕食後総員集合があり、副長から本作戦のだいたいの模様を話された。それによると「本艦羽黒は第一遊撃隊に編入され明日出港、ミンダナオ島とルソン島の間を通過して十月二十五日〇一〇〇頃レイテ湾に突入の予定にして、本艦と行動を同じくするのに一、二、三、四、五、七戦隊それに軽巡矢矧を旗艦とする一〇戦隊と第二水戦隊の一部が参加し、第二遊撃隊は戦艦扶桑、山城を主力に軽巡洋艦最上、それに二水戦隊の駆逐艦数隻が加わり、ミンダナオ島を出港した那智、足柄の重巡洋艦に沖縄の中城湾を出港した千歳、千代田、瑞鶴、瑞鳳等の航空母艦より編成された機動部隊にてこれも同日同時にレイテ湾に突入とのこと、これに呼応して比島の各陸上航空基地から一斉に攻撃を開始し陸海空軍の協同作戦を以って一挙に敵を全滅する作戦である」と、咳一つしない聞き入る全員の瞳は輝き拳は震えた。最後に「本日はこれより酒保開きを許可する、皆充分の栄気を養って今度の戦闘に活躍するように」との達示があつて、一同ドッと喊声を上げ副長の赭顔も莞爾とした。

明けて二十二日、一五三〇水兵員整列、それより直に私らは分隊受持ちも出港準備に駆けた。今日の出港準備はいつもより心身ともに軽く入念迅速となる。やつと準備完了したと思う頃突然嚙喰として勇ましい出港用意のラッパが令達器を通して艦内の隅々までに響き渡る。号笛を吹いて号令をかける伝令の声までが澄んだ張りをもつて聞こえる。一六〇〇艦は静かに動き出した。各艦とも前部の錨を洗う。水が真白に散り美しく見える。左舷を駆逐艦が二戦速(24)くらいで本艦を追い越して前進していく。明日出港の第二遊撃隊は各艦とも総員上甲板に整列して盛んに帽子を振って見送ってくれた。

鹿島立つ胸に一閃会者定離の情に打たれ感慨また無量！

ブルネイ港外に出ると「第二警戒配備」が発令され、間もなく海面に薄暗くなり、夕陽は渺茫の水平線の彼方へ真紅に燃えて落ちていった。

間もなく闇の帳は海面を這い、砲塔を黒々と包んでしまった。敵潜見張は厳になり、艦隊は編隊で「の」の字運動を取り、一路北へ北へと進路を取って航行して行く。明ければ二十三日、未だ敵潜に発見されることなくレイテヘレイテへと波濤を蹴って行く。本朝も相変わらずの猛訓練に全員は張り切っている。私は訓練が終わったいときを後甲板の煙草盆に行くと、右前方を一〇戦隊、本艦の五戦隊の左方を四戦隊、その後方を七戦隊が続行し、本艦の後方は大和、武蔵、金剛、榛名、長門の戦艦戦隊が「の」字運動をなしつつ続行してくる。堂々舳艫相衝いて波を乗り切る浮城の姿に胸は一種異常の感に満たされた。全艦とも対潜対空見張を厳にして一路目的地のレイテに向かう。その夜ミンダナオ島とルソン島との間の海峡に入る。敵潜横行の激しい魔峡だけに対潜見張はなお一層嚴重になる。間もなく艦橋見張員より「右前方灯りの点滅するを認む」との報告があり、艦橋の者は一瞬サッと緊張する。次に「今の灯は民家の灯らしい」との報告によりホッと安堵の胸

をなでおろす。長い長い緊張の夜はようやく静かに明け始めた。

二十四日の朝は「総員起し」に引き続き煙草盆引けの号令で朝の猛訓練と化した。

訓練中、突然本艦左舷にいた四戦隊の高雄に敵潜の発射した魚雷二本が命中、その中一本が右舷中部艦橋の下に命中爆発し、水柱は高雄の艦橋よりも高く上って、やがて水柱が消えると高雄は右舷にグッと傾き、速力は落ちて隊列を離れ始めた。

訓練中の各艦は直ちに機を逸さず戦闘配置に就くと同時に、左舷の方の爆発音にハッと想って見回すと、二回目の魚雷は重巡の愛宕に命中し、大きな水煙は愛宕の全体をつつみ、水煙が消えるとともに愛宕の艦隊は我々の瞳から消えて南海の藻屑と消えていった。

将兵一同ただ黙して語らず、悲憤の涙は■衣の袖を濡らした。逝きし戦友よ安らかにあれ、我々の報復の奮闘を照覧庇護せよと念ずると同時に胸を突いた！

山行かば草むす屍

海ゆかば水漬く屍

大君の辺にこそ死なめ

顧みはせじ

敵潜の跳梁はますます激しくなってくる。

またもや見張員の「魚雷、魚雷」と叫ぶ声にハッと想う間もなく、来る！来る！二本の魚雷は白い雷跡を引いてまっしぐらに本艦に突進してくる。本艦は時おかずして回避すれば、艦尾すれすれに過れて本艦の右舷に側行していた四戦隊の摩耶に命中、大音響と物凄い火煙と火炎をまじえてパッと空高く噴き上げたと思うと、摩耶は艦首を高く上げて見る間に本艦の犠牲となって白波だけを残して消えていった。

時おかずして前に愛宕、今はまた摩耶の最後を余りにも現実に眺めた私は、無念とも悲愴とも名状しがたい腹腸をグツと締め付けられるような思いがして目裏がジーンとしてきた。いつもの戦いにも余裕綽々として軽口の一つも叩く戦友も余りの悲惨さに黙して語らず、一時暗影を投じたような雰囲気には私はハッとして気を取り直して配置を固守する。

四戦隊は今愛宕、摩耶を沈め、高雄は戦闘航海に差支えるため無念の涙をのんで一応ブルネイに帰港する。残るは重巡の鳥海のみとなった。鳥海は直ちに四戦隊を解散して本艦の五戦隊に編入され、本艦の後方を続航することになった。

海峡を出てその日の一〇〇〇頃、艦橋見張員は敵艦載機の大編隊を告げた。「配備に就け」のラッパが勇を鼓舞するように鳴り響く。令達器は「対空戦闘」「対空戦闘」を繰り返す。私の戦闘配置は魚雷員兼機銃員であったから、直ちに防毒面を背負い鉄兜をつけ、急いで後部二番の機銃陣に飛んでいった。配置に就くや否や主砲は「右四〇度、高角二〇度」くらいで一斉に火を吐いた。私は砲身の方向を目で追っていくと、見える！ 見える！ 肉眼で豆粒大の艦載機がグングン近づく。グラマンだ、一機、二機、三機と五、六機くらいの編隊で我が艦隊に向かって突っ込んでくる。各艦の主砲高角砲は物凄く唸り出した。南海空一面に対空砲火の弾幕は天日を覆うばかりに張り巡らされた。

しかし敵艦載機は弾幕を縫って艦隊の上空に迫ってくるや、獲物を見つけたハゲ鷹のように編隊を解いて各艦めがけて襲いかかってくる。各艦の機銃弾はこのときを待っていましたとばかりに一斉に火を吐いた。本艦にも一機、二機と左舷から突っ込んでくる。アッと戦友の叫びに、気づくと左舷後部に一機、前部に一機、敵機は四方より襲いかかってくる。獲物を見つけた私たちの目は血走っている。畜生と叫び戦友の

声が悲痛に聞こえる。必死の攻撃に右舷から来た一機は本艦の上を通り過ぎると同時に火達磨となって海中に長く煙を引いて落ちた。

「命中だ、命中だ」と異口同音に快哉を叫んだ。また一機は胴体から火を吐いたまま通り過ぎたと思うと、火達磨の中から白い物が飛び出した。パツと開いて風に散りしく花びらのように揺れて落ちる。同時に白波に突っ込んで消えてしまった。その時またも右舷海面すれすれに、今度は雷撃機が二機、本艦を目指して突っ込んでくる。「面舵いっぱい」の命令に艦はギキツダと歯ざしりのような金属音を出しながら回避運動を始めた。雷撃機は魚雷を投下すると本艦に機銃弾の雨を遮二無二降らせる。右に左に弾魚雷をかわしながら本艦は突き進んでいくと、やがて機銃の音がやんで、ホッと悪夢から覚めたように見まわすと敵機は次第次第に遠ざかっていって雲間に消えていった。令達器からは「ただ今の空襲では一発も損害を受けていない、各員配置付近で休め」と号令が掛かってきた。幾分落ち着いて汗ばんだ顔を身体を硝煙の匂う風が吹いていく。私はほかの艦はどうかと見回すと、「しまった」、妙高が右舷にグツと傾いている。やられたなァと思っていると、本艦は次第に妙高に近づく。近づいて状況をきけば妙高は右舷魚雷発射管室後部に魚雷命中し、浸水大にして戦闘航海に差支えるため隊列を離れブルネイに帰港することになったので五艦隊の司令部は本艦に移すとのことで、初めて司令官橋本信太郎中将の悠揚迫らざる英姿に接した。

しかし僚艦妙高との別離を思えば涙ならざるを得なかった。本艦の使命は重かつ大を極めてきた。妙高に別れると間もなく二回目の空襲に遭遇、それから夕方まで十数回の空襲に敵機撃墜数は本艦のみで三十数機に及んだが、次第次第に空襲は激化してくるばかりで味方艦船にも被害続出し、それに最大の打撃は日本海軍が世界に誇った不沈艦武蔵の落伍であった。武蔵は昼間の戦闘で魚雷数本命中して、艦首は

水面につかり、前部砲塔まで浸水していた。

夕闇迫る頃またも武蔵をブルネイに寄港せしめることになったが、皆の顔はさすがに憂色に閉ざされ、隊列を離れ行く姿は見るに忍びなかった。夜襲敢行の時は刻々と迫ってくる。昼間の空襲に長い時間を費やした艦隊は隊伍を整えて一路レイテへ！レイテへと針路を取る。全艦ともに第一警戒配備となり、見張は二直配置となる。今夜いつ敵艦隊に遭遇するかもわからないその中、水雷長より魚雷は即時待機となせの命令で、私らは薄暗い灯火をたよりに空気油水を活入して魚雷の発射準備を完了したのがやっと二二〇〇頃であった。

皆は戦闘服装のまま、ゴロリと甲板に敷いたケンバスの上に横になった。私も一寝入りする必算で横になったが、脳裏を新旧種々の思い出が走馬灯のようにかけめぐる。瞼の裏にチカチカと昼間の水柱が浮かぶ。

眼はますます冴えてくる。じつと耳をすますと、砲声殷々として天日を覆った弾幕も晴れて星晨のきらめきを仰ぎ、舳に碎け散る波の音のみが響く。やがて幾時を過ぎたであろうか、少しまどろんだかと思うと明けやすい南海に早い朝が訪れた。皇国の興廃を賭けたレイテ突入の日だ！「総員越し」の号令で飛び起きると同時に「配置に就け」のラッパが朝風を突いて鳴り響いた。

「ワレ敵艦隊見ゆ」と叫ぶ声に私は魚雷発射管の上に飛び上がって薄明るい海面をじっと見まわすと、見える艦橋からは直に「魚雷戦用意」「起動弁開け」と次々に号令はかかってくる。突然雷光のような閃とビビッと振動を感じた。打ったのだ。本艦の主砲が唸り出した力だ。急に機銃が主砲の鈍い音を縫うように火を吐き出した。間を置かず令達器は敵機来襲を報じ、今度は爆弾を持つていないようであると知らせてきた。敵機の機銃掃射は物凄く、発射管室の上の飛行甲板を貫いて火の粉のようにバラバラと飛んでくる。私らは魚雷発射管の配置に就いた

ままもう打つか打つかと待っていたが一向に命令がない。じりじりとなってくる心の動揺を制しながら待機していると、機銃掃射で各所に負傷者が出た模様である。私は追尾針進器の把柄をグッと握って基針を睨んでいると、副の日兵曹は一字に口を結んで手動発射艇を手にし、目は発射空気の圧力計を注視している。誰一人として語る者も軽視する者もなく敵艦の動きを熟視している。その時間の長いこと、突然私の前にいた「四ノ一」と「三ノ一」のK、Mの両兵曹が「ウーン」と呻くようにして倒れた。「オウ」と叫んだが、離れることのできない今、みとりもできぬ。そのとき第二の機銃弾は私の左手の下にあった空気網管を貫抜いてカンと音を立て、火花を散らしてどこかへ飛んで行った。

スーッと悪寒が背走る。ところどころに機銃弾が当たった。空気管にジュッジュッと空気の漏れる音が聞こえてくる。そうして掌水雷長の応急処置と令する声が響く。だがなかなか魚雷発射の令は下らない。遂に「発射待て」の号令が来た。残念で残念でしかたがないが、好機を逸したのだ。長い緊張からやっと解放されて一息つく、すぐ負傷者を運び、後始末をして配置に帰ってきた。私は魚雷発射の管口から外を見ると、七〇〇米くらいの海面を敵艦が煙幕を張り巡らして五、六隻逃げていく。その後方を味方の水雷戦隊が勇ましく突込んで行くのが手に取るようにはつきりと見える。本艦の後方はいかにと見れば、敵機の爆弾で水柱は高く上昇して鳥海が見えないくらいだ。本艦の前後左右にも水柱はどんどん昇るがなかなか命中せず、ずっと後方を戦艦戦隊が陣形堂々と続行して相変わらず三十六糎を唸らしている。

不意に私ら三番連管の後部に敵弾が命中炸裂したと思うと、マンドレッドに火がついて燃え始めた。

吐水口の水はいつも開放してあって発射甲板は水びたしである。筒口を持った戦友はすぐさま消火に努め、大事に至らず消し止めたが、こ

のときほどマンドレッドの有難みを感じたことはない。マンドレッドが弾片を防いで僅少の負傷者のみでとどまったことは不幸中の幸いだった。

朝からどんよりと曇っていた南溟の空はいつの間にか猛烈なスコールになってきた。味方が全速で湾内へ湾内へと突込んでいく中、スコールは次第次第に晴れてきた。再三再四の反復機銃掃射に掌水雷長の命令で私らは魚雷戦の下令されるまで魚雷発射管の下に待機していた。

その間にスコールはすっかり晴れてしまった。上甲板の方で敵空母がやられて盛んに炎上しているとの叫び声に、私も発射管の下から這い出して発射管の管口から首を出して海面を見ると、右前方二〇〇〇米くらいのところで擬装を施した一万噸くらいの敵空母が停止して盛んに燃えている。だんだん近づいて七〇〇米くらいのところまで来ると、猛烈な爆発音とともに火を吐いて波間に消えていった。同時に皆ドツと喊声をあげる。昨日来の憂色も一度に吹き飛ばして晴々とした気分が醸し出された。

本艦が進むにつれ海面にボツボツと敵兵が泳いでいるのを見た。その中を本艦は全速力で突っ切って進んで行く。間もなく「右魚雷戦」との号令に、それ魚雷戦だと一斉に配置に就く。待ちに待った時がきた。

待望の秋がきたのだ。今こそ必発必中の信念に燃えて鍛えた我々の胸で敵艦をほうむるのだと思うと、私のみならず連管員の皆が極度の興奮に打ち震うている。やがて「発射始め」「用意」と号令がかかった。その前から追尾針進の基針はグングンまわっている。私は一生懸命追針を合わせていると、タタタタタ……と用意のバザーは鳴り響いて、「テー」とついに電薬は押されたのだ。シュンシュンと鈍い音を立てながら魚雷は発射された。希くば見ん事あたらしめよと祈る気持ちでいっぱい、「発射止め」の令がかかるが早いか発射管から飛び降りて管口の

ところに集まり、後跡を残していく魚雷の行方を見守った。「突入中止」の報をうつろに聞いた。

艦は取舵いっぱい変針して不還を誓った海上を帰路に着く。空襲は相変わらず続いている。

レイテ突入隊の効ならず、七洋制覇の夢空しく洋上渺々にして月齢の満つるを歎き、御旗のもと逝きし戦友を偲びつつ稿を擱く。

終

うそ倶楽部

服部清

(A)先日マッカーサー司令部発行の米進駐軍機関紙『星条旗』紙を見たら、内還問題の記事に「南方における未帰還日本軍人は一九四七年四月一日万愚節(エイプリルフール)を期して内還が開始されるであろう」とあった。

(註)万愚節とは……外国では四月の馬鹿といって年中行事として有名である。

文化部選

(B)今回内地の鉄道省においては最近しばしば列車事故により最後の車両被害甚大のため事故防止の強化をはかるために最後部車両の撤廃を早今実施すべき旨を発表せり。

(うそくらぶ同盟通信)

(C)英国側の内還期日未発表は各作業隊員を大いに焦燥させているが、当作業隊ではその打開策として今回内還期日の懸賞募集を行い、内還期日をいい当てた当選者をして優先的内還せしむることに決定した。

右に関連して某中隊ではコックリさんを利用して見事金的を射んものと着々準備中の由である。

「ほんとのようで うそ八百である」

終



花笠子萬[120]



創作

目

次

陳
才
物
語

數
息
駭

手

奧
沢
博

鎌

福
留
貢

弟
ハ

足
田
四
郎

陳君物語

鮫島駿

ガタガタと凄まじい音を立てて橋を渡っていく自動車の音に陳は目を覚ました。敗れた壁の間から高く揚った日差しがサッと斜に差し込んでいる。眩さに目脂の張った目を無意識に二、三回すった。

「アーア」と大きな欠伸をして、ぐっと両手を差し上げ背伸びをすると、ゴキッと節鳴りがした。

青白い顔、落ち窪んだ目、のびた髭、年の割に更けて見える。噂にきけば未だ彼は三十二の春を迎えたばかりだというのに、暗い陰をもつて寡黙な彼は人と交ろうともせず一人だけ人里を少しはなれたところに細々と暮らしていた。

ノツソリと立ち上ると、彼がセンチなときいつも見入る奥行き壁にかかっている二ツの写真の前に立った。

それは彼の父の写真と最愛の妻子の写真の二枚で、薄黄く薬焼のと煤のために色づいていた。この前に立つと少なくて二、三十分くらい立ち尽くしているのが彼のいつものことで、どうかしたときは窪んだ目をシヨボシヨボさせて涙を流しているときさえあった。

広東で生まれて、父に連れられ華僑中心地のシンガポールへ来たのは、陳がいまだうろ覚えにようやくものの判りかけた頃だった。

その頃シンガポールは英国の東洋の拠点として暗々の中に牙城を築きつつあった。

商才に富んだ彼の父が時世の波を狙った香料売買は見事金的を射て、その取引は日を遂うて■成を呈し、巨万の富をようするようになった。日に日に開発を極めていくシンガポールの繁華街に香料洋行と大きな金看板をかかっていたのが、ちょうど大東亜戦争の始まる頃の陳の家

陳君物語……鮫島駿

手……奥沢博

鎌……福留貢

弟へ……疋田四郎

だった。

陳は二十七の細面の美青年となっていたし、恋愛によって結ばれた芳麗との間には愛くるしい三ツになる啓利があった。

幸事魔多しという世の譬を引用されれば、陳の身の上が適用されるそのままであった。

「ドン」と揚った日本軍の烽火の一弾にシンガポールの街は一瞬にして戦塵の燻煙に覆われた。

陳の家も戦災を被って、唸るほどあった富も一夜の中に灰燼と化した。老後を安逸に送っていた父はあまりの変転に打ちのめされて、いくらかなくしてジョホール州の山小屋で逝ってしまった。

陳の苦闘と悲運はそればかりではなかった。祖家復興のため彼が商用で東奔西走していた留守中に、愛妻の芳麗と掌中の玉と恙しんでいた一子恵利【初出時は啓利】は日本軍の手で殺戮されていた。

それを知ったとき、彼は一瞬、夢遊病者のように毎日を過した。過度の悲しみに涙すら出なかった。しかし日が経ち月を経るにしたがって、父や妻子への恋慕の念はその生命を奪い去った日本軍嫌悪の情に変わっていった。

日章旗が風にはためき、日本軍の横行する昭南——そのとき、既にシンガポールは日本でかく命名されていた——の街がたまらなく重苦しい唾棄したいような息苦しさから、日本が計画した第二昭南市の建設のエンダウへ率先して移住してきたのだった。

昭南バルと名付けられた寒村は人跡稀などと言ってもいいくらいのところだった。が、総てを失い呪の世を送っている彼には世すがのところとして適所だった。

開拓のため狩り集められた二千余人の苦力とともに彼もジャングル伐採開墾に従事していたが、次々と倒れていく苦力の消滅と青天の霹

靨ともいうべき日本敗戦のために、この大規模な事業は遂に挫折してしまった。

日本敗戦の報をきいたとき、陳はうつろな笑いを立て、椰子酒を買って父や妻子の写真の前でボソボソと一人つぶやきながら夜を明かしたのだった。

それから十ヶ月を経た今日でも、相変わらず彼の生活は光も望みもない、ただ生きているというだけに過ぎなかった。

やおら写真の前をはなれた彼は、破れ果てた洋服のポケットに手を突っ込んでみたが、金らしいものは見付からなかった。もちろん台所には食える物は一つもないことが判っていた。ゴロリとまたうす汚い板張りの上に寝転ぶと、そのまま動くのも大儀そうに肩で息していた。断食、それは金もなければ働きたくもないときの陳の用いる常套手段だった。

昼すぎ、ふと写真の裏棚に一昨日遣い残しの金のあるのを思い出した。フラと立ち上ると、写真の裏を探ってみると、約半元の金があった。

ホッと一息つく、陳はその金を後生大事にポケットにしまうと町の方へ出掛けた。

彼が草深い細道を通って町端れの三叉路に出たとき、警笛を鳴らしてトラックが通り過ぎていった。道の片辺によってほこりの舞いしずまるそのとき、彼は見たのだ。「オー日本軍。」低いうめくような声を口走ると、くぼんだその目はギラギラと輝いた。フラフラしていた五体は怨悪の固まりのように硬直した。

一台また一台と、彼は何の面■もないようにほこりを舞き上げながら過ぎていったどのトラックにも、脚絆、戦闘帽の日本の兵隊が満載されていた。

陳は食堂へ入ったが少しも落付けなかった。指先はケイレンして、足もブルブルふるえた。

隣のテーブルにすわると、うどんを注文して卓の上に両ひじをつくと、延び放題のモジャモジャした髪をかきむしった。

「日本軍が二千名も来るそうな。」「またあの山の開墾や水田作業を始めるらしい」と三脚ほど向こうで話しているのを聞きながら、何かしらどなりつけたいような、焦燥ににたムシヤクシヤする気持をどうすることもできなかった。

「お前達は日本軍が来て嬉しいのか、俺は父も妻子も彼らのために殺されたのだ。」

一人一人に知らしてやりたいとさえ思った。

そこそこに食堂を出た。彼は日本軍の立ち去った山麓のあたりをにらんでいたが、ペツと唾を吐き出した。

父を奪い妻子を切った日本軍の姿を見た彼の心は、昭南を去って以来、再び生ける魔性のように変っていった。

陳は日本軍を見たくもなかったし、また噂さえ聞くのもいやだったので、家に立ちこもっている日が続いた。

それから二、三週間も立った日、陳は町まで出るために家を出た。ふと山を見上げると、今まで中絶されて見る影もなかった山の上に約二、三町ほどが黄色い土膚をあらわにしていた。その付近にはもうもうと立ち上がる煙が山から山の嶺を伝い、立ちそろっている枯木をぬって空の彼方へ棚引いていた。

陳は見てもならないものを見たような、裏切られたような気持でその山を眺めていたが、鍬や鎌を肩にして半裸体で通って行く日本軍の姿を見ると、急に不機嫌な顔になってトボトボと我が家へ帰った。

そのあくる日からまた続々とトラックによって日本軍が移動してきた。そして朽ち果てた道路の修理、見かえりもされなかった排水溝の作業、エンダウ住民の白視にもかかわらず着々と進捗していった。

ある日ぼんやりと鶏に餌をやりながら、半ば開墾された山を臨みながらいるところへ、若い目のぱっちりした、まだ少年と思われるくらい

の兵隊が入ってきた。

煙草の半切にしたのをくわえて、手真似と半端な(インド)ネシア語とを交えて、火を貸してくれと頼んだ。陳は今まで開墾された山を驚嘆に似た気持で眺めていた自分の心を見すかされたような気がして、慌てるように顔を硬直させ、目を三角にして帰れ帰れと手真似をして、しまいは側にあつた肉の空缶を放った。驚いて目を見張った兵隊は苦笑しながら出ていった。そうして何のわだかまりもないように口笛を吹きながら……。陳は肩すかしを食ったような、ホロ苦い気持でヤケに舌打ちをするとゴロリと横になった。

彼が右足首を怪我したのは翌日の夕方だった。吹き出る血を押えながら薄汚れた布の切端でくくついているとき、鍬をかついだ三人の兵隊が通りかかった。

陳の足から出る血を見ると、三人して何か顔を見合わして話していたが、一人の兵隊が雑囊から白と赤の薬瓶と真白い繃帯を取り出して陳の傍へ何か言いながら近寄ってきた。陳は後へ身を引きながら強引に拒んだが、三人して押えつけるようにして消毒をし、赤い薬を塗って繃帯を巻いてくれた。

陳は傷のいたみに口をゆがめて、するがままになっていたが、手当が終ると一人の兵隊が「ベソ、サヤルマ、マリシニ——」【あした私の家に来なさい】と言って自分のキャンプの方角を指して立ち去っていった。

その夜、傷の痛みと、今まで自分の持っていた日本人観の相違に幾分かうなされた。

彼が見てきた日本人は、老幼を問わず打った切ると、些細のことでも悲鳴を上げるのもかまわずなぐりつける日本だった。

朝起きて治療に出掛けようとした陳は、しかし深く根ざしている日本人嫌悪の情に打負かされて、その日は遂に出かけなかった。

翌日また日暮時手当をしてくれた一人の兵隊が来て丁寧に治療を施してくれた。振り下ろした勢いで切ったパランの傷は思ったより大きく、白い口をパツクリとあいて、線の太くなっている陳も少ししたじろぐくらいだった。

ぜひ明日治療に来るようにと筆書して帰っていく兵隊の姿を、陳はただ夕陽に映えてまばゆいとばかりは思えなかった。

トボトボと杖を頼りに陳はあくまで日治療に出掛けた。目鏡をかけた軍医の診察、治療は懇切を極めていた。それでも拳銃を肩から吊るし、軍刀を杖にしてそり返っている日本士官とは似てもつかぬものを陳は知った。

その後毎日陳の治療に通う姿が昭南バルの町に見られた。

その頃日本の軍隊は山の開墾作業を終えて水田の作業に掛かっていた。逞しい体力と精神力を持っている彼らの前には、丈なす草も近寄り難い灌木もなかった。

六月を越して陳の足がなれる頃には、切り払われた荒地は耕されて水田となっていた。陳はそこに汗とほこりにまみれて働いている兵隊の姿を敬虔な気持ちで眺めている自分を見出して不思議なくらいに思った。

あれほど不精者であった陳が、細々と付近の荒地を耕して昭南バル付近の現地人のやっているように芋とかタピオカを自作した。

日本軍が来てからその感化のせい、エンダウ付近には、今まで雑草のはびこったところも湿地も、到るところが華僑や現地人の手によって芋の青葉と早苗が波打っていた。

七月も終る頃には、あちらこちらから陳にはわからない歌が流れながら田植がされていた。

網を張ってキチンキチンと柵目に植えていく彼等の仕事は陳には合点が行かなかった。

棒の先に苗をはさんで植える現地人の田植を見ている彼には奇現象にしか見えなかった。まして彼等はあるなかに几帳面に植えたところで自分のものでもあるまいに……。そうしてまた、節面白く歌うその歌も、わからぬながらも何ともいえぬ朗らかさがあった。

ある日、陳は治療を受けてから顔見知りになったKという兵隊にきいてみた。

Kは笑いながら、「瑞穂音頭」という歌であること、彼等の国では田植はあるなかに几帳面に植えるんだと書いて教えられた。そうして彼はなお書き足した。「四海同胞、五族協和、是日本国是」と。そこで陳は「無人道、日本国」と書いた。

Kは大きくかぶりを振って、「戦前道義、戦争中無人道、戦後道義国」と書いた。陳は改めてKの顔をみつめて、黄色い歯を見せながらニッコリした。

雨期が来ても兵隊達の作業は続行された。

年の明ける頃には見渡す限りの水田には天心に向って立った稲の葉が早くも孕んだ身をくねらせ、山にはタピオカの青い大葉がサワサワとなっていた。

陳は年明けてから鏡を見て吃驚した。去年の春より自分の顔に何の影響もなく、目は生気を帯びて若返っているのに……。

日本軍が水田の取入れ終えてのある日だった。

珍しくも長い間来なかったKが陳の内へ来た。

「小生東京帰国、貴人万幸祈」と書いた。陳は驚いてその真否を尋ねたが、Kは微笑んで大きくうなづいた。

それから陳はKと色々と筆談を交わした。

Kは最後に大きく「勤労体験得、天地人愛、知他日又南溟再会約」と書いて陳の手をにぎりしめて帰っていった。

彼らがトラックを連ねて帰る日は、陳が始めて彼等を見た日のようにカラリと晴れた日和だった。

陳は町はずれで彼等を見送って、いつまでもその姿が峠を越えて山の向こうに消えても立去ろうとはしなかった。

山にも水田にも、新しく入ってきた苦力が燃やしている煙がもうもうと空を覆っていた。

終り



華僑の姉と弟 [38]

手

奥沢博

人の手、聞く手、握る手、全力をあげて握る手。今誰かが「オイ、君現在の君の手は何を握っているかね」と問われたとき、諸君は何て答えるであろう。あるいは「何も握っていない」と答える人もあろう。

否、現在の吾々の手は、祖国再建を握って今相手なき戦をしているのだ……と答えることができよう。そうだ、その通り吾々は、この作業隊に来て、このエンダウに来て作業し、一日一日大和健児として祖国再建に、この大きい皮の厚くなった、何ものにも恐れずと修練したこの尊い手で、鍬を振る、鎌を使い、光を放っているのである。

今日ここに私が書かんとすることは、この戦争の半ばでたおれ、祖国建設中途でたおれた、今は無き戦友の大いなる手を思い出し、有りし日を偲びて、この一篇をしたためたいと思う。

僕と沼田忠一君とは隣組同志、「遠き親より近き他人に」と昔からの諺にある通り、純朴田舎のこととて、両家とも自分の家のようにであり、交際もし、また力になっている関係で、自然僕と彼とは兄弟同様であり、小学校では良き勉学の競走者であった。

彼の最も得意とするのは相撲である、級で誰一人として知らぬ者はない。彼の大きい独特の手、この手で握り、あの手で押されたら、級の仲間はずれ一人としてかなう者もないというくらい、その手は大きい割合に器用に動き、また力のある手である。

しかしながら、僕と彼とは、毎日愉快に学校に通い、家の手伝をし、また遊んでもやった。

いよいよ卒業式るとき、僕も彼も競走した甲斐あって相当な成績で卒業ができた。

このとき、彼の大きな手は、僕の手をしっかりと握って、「よかった、お互いに競走した甲斐があつて。これから先もしっかりやろう」と力強く握りしめた。

僕はこの手をいつまでも忘れまい。否、終生忘れまいと誓った。

卒業後、自分はある付近の会社に勤務し、彼は家で農業にいそしんだ。やがて春も過ぎ、夏も過ぎて……二人とも徴兵検査に甲種合格になった。自分は海軍、彼は陸軍に決まった。

彼は陸軍入営のため、海軍の自分より入営が早いことになった。遅れて行く僕は時々「一緒に行けないで残念だ」と言う、彼は「なあに心配するな、陸海軍の違いこそあれ日本軍隊には変わりない。いくらになれても、ほら忘れたか、卒業式るとき誓った言葉を思い出してくれ。お互いにしっかりとやろう」と、相変わらず彼得意の大きな手を出して力強く握るのであった。

彼の入営の日はいよいよ来た。朝早くから僕と彼とは終始一緒に談じ合いながら駅のホームに入った。

見送りの人々は彼に「しっかりとたのむよ、体に気をつけてね」と大きな声で激励している、やがて電車が来た。彼が乗り込んで窓に立つと、見送りの人々は「万才、万才」と連唱している。

僕も声を限りに叫んだ。発車のベルが鳴った。彼の窓際に立つと、いきなり手を握ると「オイ、これが最後だ。よく見てくれ、この手」と言つてしっかりと握った。

「ウン、俺も後から征く。お互いにやるぞ、負けないで」と言つて彼の視線を見つめた。手をつないで彼の心と「僕の」心が無口の中に結び合った。電車は発車した。

彼はいつまでもいつまでも手を振って……自分も手を振り……この手とあの手はどこまでもどこまでも幾山河を越えて握り合つて、とも

に建設に祖国の防人として……。

僕もまもなく入団した。

ある基地において故郷の父から便りを受け取った。読んでいる中に、彼が戦死したことがわかった。

僕はしばらくの間、彼の面影を忘れなかった。無二の友、よき競走者であつた彼の姿が浮かんだ……。

そうして駅で別れたときの光景が時々思い出されて、自分の胸を暗くした。

彼の手、僕の手、今俺は彼の手と自分の手と二人分の大きな手を開いて、祖国再建に頑張ろう。これが僕が彼に対する友情ではなからうか。

同胞よ！ 祖国復興の秋！

皆大きな手を開いて祖国再建に張り切ろうではないか。

終り

俳句

月

おおらかな月の上るや枯木立……………服部清

今宵また月にさざめく抑留舎……………原正勝

残月を峯にとどめて霧深し……………紀生

病む友の頬白くして月おぼろ……………風ノ子

名月の影落ちてゐる井戸の底……………野崎甲衛

蚊をはらう手音のにぶき曇り月……………池田勝巳

鎌

福留貢

「兵舎離れ」の喇叭がコの字型になっている兵舎に響き渡った。

村山は例日の如く水筒を左肩に、陸軍支給の帽子を無造作にかぶると、「トン」と素足のまま、雨季の湿りの深い中隊区間の通路にとびおりた。

ヒヤリと足裏に冷たい感触を覚えながら草の囲みを出ようとした時、目の前を白閃がサツとかすめた。

「アッ。」小さな叫びを咽喉元でようやくかみ殺すと、村山の目は異様に輝いた。

大鎌を肩に宮越が素知らぬ顔で歩いていく。

隣班の中でもいつも生意気な奴だと平常から思っていた宮越。故意か、偶然か。朝の出足先に出会頭であっただけ、村山は収まらぬものを感じた。

「チョッ。」わざと大きく舌打ちすると、宮越の後から肩の張りを睨みつけた。

朝の清々しい風は遠い野末から抑留舎の芭蕉の葉をゆすぶって流れていく。男ばかりの生活で澄まし汁のように味気なく苦しくても、一晚寝れば疲れの片鱗も見せない若人達は今朝も朗らかに笑って喋っていた。

村山のムツリした前へ、大きな手ぶりで二、三の友達と笑いさざめいている宮越が振り向いて、「いよう」と挨拶をした。

村山は知らん顔で左の方を向いて歩き出した。

「畜生、ふざけやがって。」吐き出すように言うと、その後でまた大きな声が笑い崩れた。

「ウーム。」村山のコメカミの辺には動脈がケイレンして、胸にはいまましいような侮辱されたような一種悪寒が背走った。

整列して東方遙拝して出発するのも、過度の興奮に駆られている村山は無意識といつていいくらいだった。

七番線の受持作業場についても不機嫌な村山の表情は変わらなかった。二十五米に二百米の伐採作業は楽ではなかった。ムンとする草いきれ。しとどに頭から降りかかる露。遠慮容赦なく喰いつく蟻の群。半刻もたつ頃は汗でぐっしり濡れになっていた。

拳大ほどの木株に斜からサツと振り下ろした鎌は、ガツと切り込んだままで、押しても引いても一向動こうともしない。

「オイ どうした」と村山のかたえに宮越が汗まみれで鎌をかかえて立っていた。

「ウーン。」村山は朝から「肝」の収まりの蒸し返しを覚えて意地に取り外そうとした。

「待て待て。」宮越は気さくに言いながら、手にした鎌の柄でポンポンと下から斜に叩き上げた。

喰い込んでいた鎌はようやく取れた。村山は何かちぐはぐな気持で、礼を言うのも何か後ろめたさで面映ゆい感じがしたし、だまっただままに一振り振りおろした。

グアツと勢いよく切れた木が倒れるより先、「ワアツ」という絞り出すような声に、村山は冷水でも浴びたように冷たいものが背を走った。

左斜の後ろに宮越がうずくまってワナワナとふるえながら右腕を押さえていた。ぐつと苦痛をこらえた唇は紫色に変わりつつあった。押えた指の間から紅い血が吹き出るように流れている。

村山は腰から下の力が抜けていくような、そうして目先が眩むのかと思われた。

意地で振った鎌の力で、木も、そして戦友の足も！ 村山は持っていた鎌をパラリと落すと、宮城の側へフラフラとしゃがみこんだ。

「済まなかった……済まなかった。」

村山はうわ言のように口走った。

腰のタオルを割いて慣覚えの止血法をして、いやがる宮越を背にして医務科に運んでいったのも、さほど苦しいとも遠いとも思わなかった。釘結合して床に休んでいる宮越の顔は青かった。作業から帰った村山はまず病室を訪れた。

「いいんだよ、もう大丈夫だよ。」と意に介しないような宮越の言葉に、些細な感情で戦友を傷つけた自分の身が疼くのをどうすることもできなかった。

カッと夕茜の雲が映えている窓辺に、宮越の今朝持っていた鎌が土のついたまま立てかけてあった。

終り

冠句

永久に 祖国の歴史を護らなん……………文代

〃 忘れ得べきか赤道下……………新人

外国で 春を迎うや稲太し……………仙人

〃 四度おろかも初日かな……………高橋正弥

〃 新春を迎えるわび住居……………仙人

高らかに進め吾等が再建譜……………柴田■吉

〃 希望の一路いざいかん……………洛陽

嬉しさは内還令のその日こそ……………無花果

〃 大君ともに我もあり……………古賀満雄

〃 帰り待つてふ妻の文……………一郎

もろともに合わす力は何ものも……………三井喜八

〃 秋津島とば守らめや……………古川

〃 少なき糧は分け合いて……………山田行雄

〃 背負う瑞穂の国柱……………雪子

弟へ

疋田四郎

弟よ。今頃お前は何をしている。兄の俺は祖国を遥かに馬来の東南
エンダウの地で、作業隊として今も残っている。

お前を思う切なるものがあるので、この一文を綴って送る。

戦争中は俺もお前も若き学生であつた。多くの若人とともに情熱は
戦場へ戦場へと駆り立てられ、北に南に進撃して征つたのだ。

戦争が果たして醜であり悪であるか分からないが、吾等若人は日本
民族の興亡の岐路に立つて、若い力はひたむきに突進していったのだ。

多くの人々は真に国民の総力を挙げて、よく働き、よく頑張り抜いた。
「我必ず勝つ」の信念の下に戦い続けたが、矢折れ弾つきで一敗地に
まみれてしまった。

ああ、皇国聖天子は宣い給うた。

「戦い我に利あらず」と。日本民族百年の行方を思い戦局を拾収せし
められた大御心を拝察するだに畏き極みである。

思えばすべてを結集していった日本であつたが、国家も社会も無秩
序と混乱の中に雪崩の如く崩れていきつつある。

日本という国はかくも救い難い国になつてしまつたのか。俺が海軍
に入ってから、お前は俺の後を慕い、唯一の医学志望を捨てて高等商船
に入り、終戦前まで海兵団で訓練を受けていたとか。あの時代のあの頃
のお前には、そうせざるを得ない気持ちになつたのであろう。

そうして俺もお前も、若き者の生命である青春を祖国に捧げ尽くし
てきたのだ。

世界を吹きまくつた戦争の嵐は一まずもつて沙塵の中から立ち上つ
たとき、俺の眼の前は汚辱と労苦の作業隊生活があり、内地にあつたお

前の眼の前には一切をさらけ出した荒れ果てた祖国が横たわっていたのだ。

現在祖国にあつて移りゆく世の様をどういう気持ちでお前は見つめているか。完膚なきまでたたきのめされた祖国、荒れ果てた街々には住むに家なく、食うに食なき人々がうごめいている。

社会悪の一切を曝け出した人々のあさましい姿、戦争の責任を一方的になすり合う人々。あるいはまた自分はこの戦争は一切責任も関係もないものであると言いながら、日本の土地に住み、日本の米を食っている人々。まだ年若きお前にはすべてが困惑と矛盾の中にさ迷っていることであろう。

俺達は何を目当てに一体何によつて生きて行けばいいのだろう。

世の中で一番美しいものは何か。お前には分かるか。あるいは人と言うであろう。麗しき花であり、美しき行為であり、謙虚な信仰の姿であると。

しかし俺はこう思うのである。若い健康な男性が真摯に仕事にたずさわるとき、また、すべてを忘れて運動に熱中するとき、あるいは一つの信念の下に自己のアイディアを主張するとき、そこには不純もなければ策略もない。男性美の極致が発揮されたときが一番美しいものではないかと思う。

変転極まりない今日、この混沌たる社会現象の最中に押し寄せる怒涛を、きり立つた巖頭から見下して、自己の進むべき道をはっきり見つけなければならぬ。世の中には誰も道を指示して教えてくれる人はいやあしない。思うに人生航路の羅針盤となるものは若人の純真な気持ちで世相を直視することだ。お前の持っている現在の教養で充分善悪が区別され、進むべき方途も開けてくるであろう。

今は俺はお前と同じ年頃の兵隊達を多く持っている。

様々な娯楽設備も設置されつつあるが、敗戦の汚辱と現在の境遇は内還して真に祖国再建に従事することの外、何の足しにもなりやしない。それでも兵隊達は黙々として働いている。悲しき運命を背に負つただただ祖国の再建の一字に思いをかけて邁進している若き人々の姿があるのだ。

一日の業も終え、抑留のわびしき夕餉の後、静かに士官室の片隅で思ふは、多くの兵達の行く末やお前の心情に想いは馳せるのである。

便りによれば、お前は俺の帰りを方針も定めずに待っているという。若いときの貴重な時を空しく待つなんていけないことだ。お前のゆがめられた希望を今こそ是正して邁進すべきである。

もちろんそこには表現することのできない苦境の道は必ず横たわっているに違いない。

俺も終戦以来、幾多流転の生活を続け、その日その日が異郷の星の下の仮寝のわびしさである。いっそのこと、この身をなくして一切を終わりにしたいと、冷厳な死を虚に見つめたこともあった。

生への愛着が人一倍に強い俺がこんなにもたやすく死を眺めることができるようになったのも、戦争中も元よりであったが、終戦後言い尽くせない苦しみが生死の形相を幾たびか頭に髣髴するからであった。一つの死の影が薄らぐと生の愛着がより強くなり、また逆転してすべてに行き詰ったときにまた死の影が俺につきまとってくる。

現在の俺には、死の恐怖が戦争中より、より以上に薄らいできているような気がしてならない。いつでも死に直面したって恐れやしない。

この考えは何も捨て鉢になつて言うのではない。常にあらゆる生とし生けるものの最も恐れ免れることのできない死をもつて背水の陣を布いているのだ。

弟よ、諸行無常の鐘を聞き、死の一步手前に至るときまで、生あるも

のの全きを期せ。

弟よ、困苦を切り拓け、お前はお前の信すべき道を邁進せよ。俺は俺なりの一つの生き方をもつて行く。お前の歩む道も俺の行手も大差のあるものではない。

親愛なる弟よ、少しでもこの兄の気持ちを汲んで、お前の疲れを知らない逞しい若さに信倚し、たゆむことなき奮闘を遥か南溟の地より祈っている。

一九四七年一月

作業隊の

兄より

親愛なる弟へ

(終り)



叢林の彼方[15]

編集後記

☆本文集の諸作品の投稿者達はいわゆる知識階級の人々ではない。だが全文に盛られた雰囲気は、何というまなましい現実を盛られたものであろう。

海軍生活の教養教育の成果と激しい体験によって生み出されたこの文芸的感慨は、『噴焰』編集の意欲的源泉となった。

☆文集出版に費やした貴重な紙は八千枚に及んだが、この莫大な紙の捻出は吾々の祖父格に当たる艦隊司令部の吾々に対する深い愛情によるものである。

直接労して戴いた司令部森中尉に感謝を込めてお礼の言葉を贈る次第である。

☆文集出版のため戴いた紙の全部を費い果たしてしまった。『噴焰』の意義が作業隊員にとっては甚だしく貴重なものでないならば、カンパンの包み紙で苦役の後に日夜学問する多くの人々に対して——会わす顔がない——理由である。

☆だが鉛筆も謄写版も原紙も墨も何もかも

不自由くしの身の上である。

また、作業から帰隊してからの仕事の関係上、加えて英軍の消灯時間の厳守などのために時間的ゆとりがつかず、予期の成果を挙げ得られなかったことを深くお詫びせねばならない。

☆続『噴焰』は紙の入手と内還時期の問題によって左右される。もし出版ができるとすれば、今度こそ立派なものを作り上げたいものである。

☆表紙は吉沢上機曹に製つて戴いたが……

吾々の血涙の結晶である稲の穂を表紙にこまれてあるということは、この文集を思い出深いものにするに違いない。

☆最後に編集印刷不備の点は御判読のほどお願いする次第である。

(向)



噴焰製本[132]

昭和二十二年三月発行
発行者 森山幸晴
編集者 向駒雄
発行所 エンダウ海軍作業隊

CIRAS Discussion Paper No.117

山本 博之 編著

南方抑留資料が現代に問う「戦争」と「戦後」
——文集『噴焰』および野田明氏スケッチから

発 行……2024年10月

発行者……京都大学東南アジア地域研究研究所

京都市左京区吉田下阿達町46 〒606-8501

電話：075-753-7302 FAX: 075-753-9602

DTP・印刷……英明企画編集株式会社



Center for Southeast Asian Studies,
Kyoto University

A watercolor sketch of five men in a river. One man stands on the right, while others are wading or crouching in the water. The sketch is dated 1906-1.